507
50

設

87 111

ヱ1444

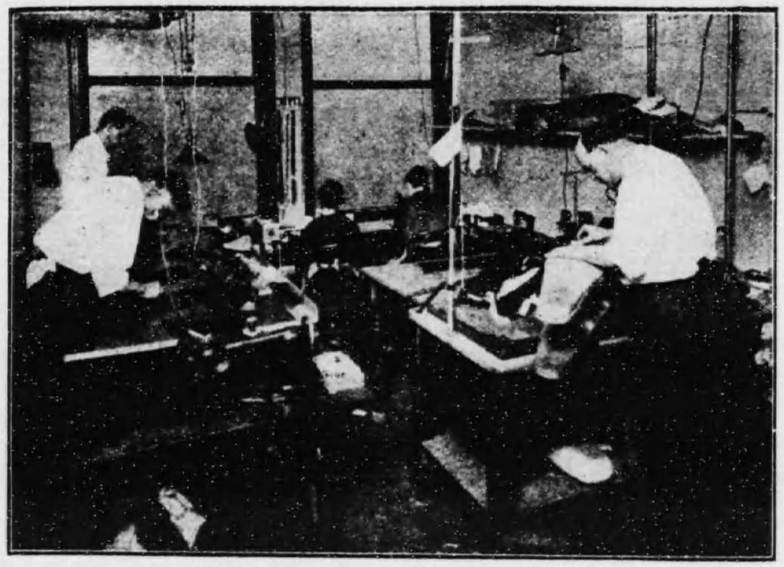
107-80

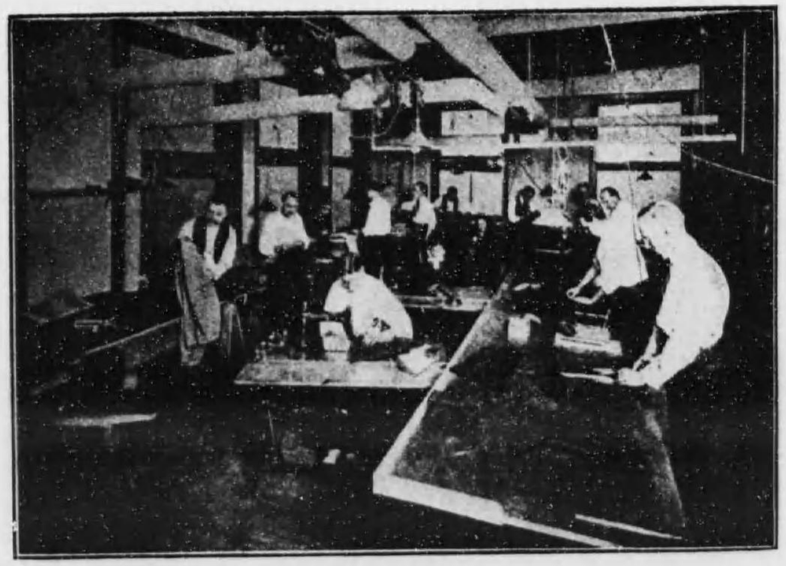
洋服裁縫全書

ズボンの手引

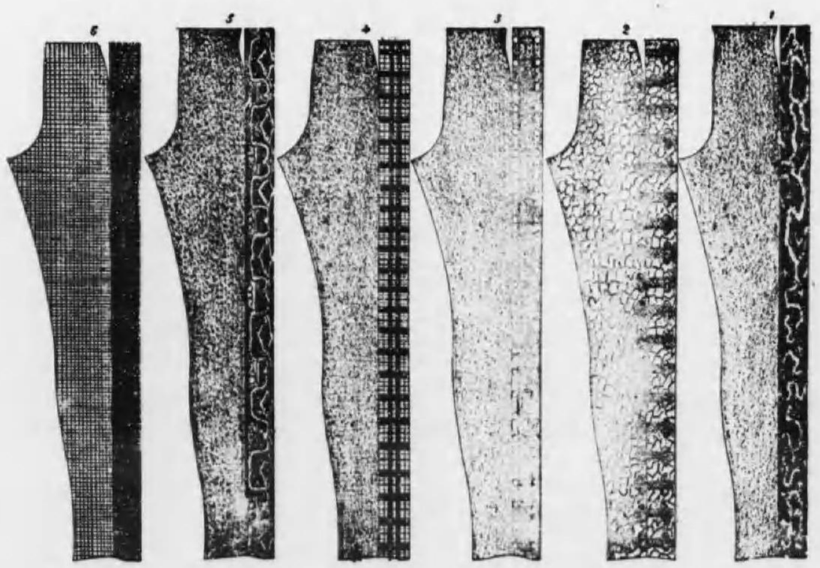
大正
11. 10. 28
内交

千九百二十二年流行形ズボンの圖





米國に於けるズボン及チョッキを分業作業に依つて製作中の圖



千八百五十年の流行形ズボンの地の模様

序

洋服ノ我國ニ輸入シテヨリ五十余年輓近大ニ洋裝普及ヲ見ルニ至リシハ文化生活ノ實現ニ伴フ洋服業ノ發展ヲ證明スルモノニシテ是ヲ他ノ工業若クハ手工業ニ比スルトキハ其進歩ハ頗ル顯著ナリ殊ニ最近ニ至リテハ洋服ヲ以テ國民ノ常用服トナサントスル場合其製造能率ハ需要ヲ滿タスニ足ラザルヲ遺憾トス此時ニ當リ友人柴田一郎君洋服裁縫全書ズボンノ手引ナル一書ヲ著作シテ予ニ示サル就而之ヲ見ルニズボンノ裁縫ニ關シテ秩序的ニ其裁縫ノ技術ヲ說ク事到レリ盡セリト謂フベシ洋服裁縫ノ技術ヲ學バントスルモノ此書ニ依リテ習得セバ必ズヤ大ニ利スル

所アルベキヲ信ズ是レ予ハ業界ノ子弟ガ之レニ依リテ技術研磨ノ資ニ供セラレン事ヲ薦ムル所以ナリ

東京洋服商工同業組合長
大野傳吉

序

近頃洋裝の盛んに爲つたのは、洋服が世界的の服裝であるからでもあれど、其外に我國に生活改善の叫びが到る處に擧げられて、其生活改善の第一歩として衣食住の衣から改善しやうとの計畫が試みられた、結果は簡易輕便であつて活動に便なる洋服に改めよとの宣傳が段々實行の運びと爲つて、遂に洋服の時代に入つたのである、洋裝が斯の如く生活改善の第一歩として踏み出されて以來、洋服の需要は激增して洋服裁縫業者は俄に多忙と爲つた、全日本が悉く洋服化するには可なり長い年月を要するであらうから、裁縫業界の前途は多望なる幾春秋を以て滿たされてゐると言はねばならぬ、然るに洋服裁縫は最も六ヶ

しい手藝であつて、到底僅少の日子で覺へられるものではない、或る師に就て數年間實習してすら之を悉く覺へ込むのは至難である、況んや海外からは新らしいスタイルが輸入せられるから一面には是等も研究せねばならぬ、裁縫師も中々樂なものではない、斯の如き有樣で洋服の需要增加と共に裁縫師を需要することも刻下の急務と爲つた、此場合に數年を要する年期を終るのを待つては決して需要に應ずることは出來ぬ、業界に於て此一事は大に憂慮に堪へなんだ處であつたが、斯界の新人柴田一郎君は業務の餘暇を以て「洋服裁縫全書ズボンの手引」なる一書を著さる、同君は多年米國紐育裁縫學校に學び凡百の服裝裁縫の蘊奥を極めて歸朝せられし人、說く所親切丁寧にして且つ多くの挿圖を挿入し、最新のスタイル及び自己の考案に爲れる新形等の仕立法を說く、寔に洋服裁縫業の完全なる敎科書と稱すべく、之に依りて裁縫師を養成するに多くの日子を省略するを得て、洋服激增に應ずる一助たるを失はずと謂ふべし。

大正十一年七月

日本毛織物新報社長

米田季吉

自序

洋服の裁縫は手工業中にても最も至難にして、之を充分に習得するには相應の年月を要するが上に、斯業は最近の發達に係れるを以て、參考に供すべき書籍は絶無にて又裁縫上に關する記錄の如きすらもなく、師匠又は親方の口授を暗記して徐々と其職を學習するが故に、教ふる者は幾度教ふるも工手が中々呑み込めぬに怒り罵り、教へらるゝ者は單に記憶の一方なれば六かしき事限りなし、是れ秩序も立てず、組織もなく漫然として教ふるが爲にして、現代に於ける諸教育が總て秩序的なる時代に於て此教育法に從はざるは矛盾の甚しきものなり、此故に漸く一ト通りを習得しても更に一歩を進めて其奥を極はむるには無限の努力を要するは實際に其道に入つたる者にあらねば解ら

ぬなり、私は米國に在りて裁縫術の研究中に、諸種の參考書を蒐集したれば、是等の參考書と私が多年筆記したるノートを基礎とし、之に實驗より得たる考案とを加へて、先づズボン裁縫書を公にしたり、説明は成るべく簡易にして、專ら圖面に依りて解説するやうにしたれば一目瞭然にして、從來容易に會得し難かりしものも自ら解り、秘密の口傳も文字にして現はしたれば、此書を座右に供ふれば裁縫習得上、便宜多からんことゝ信ず、唯、業務の餘暇を以て匆忙として記したのではあるが、其説明に至つては出來るだけ努力して秩序的に編成せるも尙ほ遺憾の點甚だ多し、是等は大方の是正を俟つて再版の機に訂正增補すべし。

大正十一年七月

柴田一郎

例言

一、本書に引證したものの内には米國發行の書籍、裁縫雜誌等より參考として採つたものも有ります。

二、挿入の圖面は悉く私の製圖に成つたもので、書籍や雜誌には全然據らないのです。

三、寸法は總て吋で説明しましたが、中には便宜上鯨尺で何寸といふやうに説いた處もあります、是等は解し易いのを專らとしたに過ぎません。

四、本書は總て解り安く且つ要領を直に會得し得るやうに簡明に叙述するのを本旨と致しましたから、修辭上には餘り重きを置きませんでした。

五、振り假名は總て口唱するやうに附けました、例へば「切仕付」は「キリビツケ」「熨斗切れ」は「コテギレ」等の類です、其他「クワ」「カ」も總て一緒に單に「か」として必ずしも字音假名遣に據りません。

洋服裁縫全書ズボンの手引 目次

第一章　ズボン裁斷法……一
ズボン寸法の取方（第一圖）……二
比例寸法と其表……四
比例寸法型紙の用法と其利益……七
ズボンの概括的説明（第二圖及第三圖）……九
直角尺の説明（第四圖）……一三
直角尺の使用法（第五圖）……一四
米國式細形ズボン裁斷法（第六圖、第七圖）……一七
ズボン地質の裁ち方（第八圖）……二五

附屬品細別表……二五
第二章　ズボン裁縫準備工程……三〇
切仕付の打ち方と其注意（第九圖）……三二
癖の取方と其注意（第十圖、イ、ロ、ハ、ニ）……三四
假縫の作り方と其要點（第十一圖、イロハ）……四三
第三章　ズボン各部分の製作……五一
靴擦れとベルトホルダーの作り方（第十二圖）……五一
ビジョウの作り方（第十三圖）……五二
雨蓋と時計隱し袋の作り方（第十四圖、第十五圖）……五四
改良せる尻隱し袋の作り方（第十六圖）……五七
縱隱し袋の作り方（第十七圖）……五八
腰マクの作り方（第十八圖）……六一

新式天狗鼻の作り方（第十九圖）……六二
新式前立の作り方（第二十圖）……六八
米國式腰裏の裁ち方と作り方（第二十一圖）……七〇
改良せる片玉緣尻隱し作り方（第二十二圖）……七四
改良せる兩玉緣尻隱し作り方（第二十三圖）……七七
第四章　ズボン製作順序……八七
製作順序第一……八七
裁ち合せに就ての注意……八七
裁ち合せ方……九〇
裁ち合せ品の整理表……九二
廻りのからげ縫に就て（第二十四圖）……九六
製作順序第二……九八

ミシン掛第一……九八
製作順序第三……九九
製作順序第四……一〇〇
ミシン掛第二……一〇〇
製作順序第五（第二十二圖、第二十五圖）……一〇一
製作順序第六……一〇三
ミシン掛第三……一〇三
製作順序第七……一〇四
製作順序第八……一〇五
ミシン掛第四……一〇五
縦の縫目の入れ方（第二十六圖）……一〇七
天狗鼻の附け方（第二十七圖）……一〇八

隱しの部分を割り開く（第二十八圖）……一〇九
腰マクの附け方（第二十九圖）……一一〇
時計隱し附け方（第三十圖）……一一〇
製作順序第九……一一一
製作順序第十（第二十六圖、第二十九圖、第三十圖）……一一三
ミシン掛第五……一一三
製作順序第十一（第三十圖）……一一三
製作順序第十二……一一三
ミシン掛第六……一一五
製作順序第十三……一一四
製作順序第十四……一一六
ミシン掛第七（第三十二圖、第三十三圖）……一一六

製作順序第十五（第三十二圖、第三十三圖）……一二六
製作順序第十六……一二八
ミシン掛第八……一二八
製作順序第十七……一二八
製作順序第十八……一二九
ミシン掛第九……一二九
製作順序第十九（第三十七圖）……一二九
腰の部分の下拵らへ（第三十一圖）……一三一
仕付の打方と飾りミシンの掛け方（第三十二圖、第三十三圖）一三二
前立の附け方（第三十四圖）……一三四
尻の縫目の入れ方（第三十五圖）……一三五
裾口の上げ方（第三十六圖）……一三六

腰裏の附け方（第三十七圖）……一三七
製作順序第二十……一三八
製作順序第二十一……一三九
カフスの作り方三種類（第三十八圖）……一三三
第五章　各種ズボン裁斷及び製圖法……一三九
肥滿形ズボン裁斷法（第三十九圖）……一三九
カフス附半ズボン（第四十圖）……一四四
最新式乘馬ズボン裁斷法（第四十一圖）……一五一
普通形半ズボンの製圖法（第四十二圖）……一五八
普通形ズボン裁斷法（第四十三圖）……一六五
普通形子供用半ズボン裁斷法……一七〇
第六章　勞働能率より見た洋服業……一七五

時代に依りて變る心理狀態……一七五
經濟戰爭の時代……一七六
科學的經營法……一七七
武力に代るに富の力……一七八
勞働能率は國富增進の源泉……一七九
賃金は高く能率は低し……一八〇
神聖なる力……一八二
間違つた見解……一八三
富の原動力……一八五
ピン製造の例……一八六
分業の利益三ヶ條……一八九
組織的組立法……一九三

ズボン裁縫の分業法（其一）……一九四
同（其二）……一九五
能率の差三倍强……一九五

目次終

洋服裁縫全書ズボンの手引

柴田一郎著

第一章　ズボン裁斷法

ズボンを裁斷するに際しては先づ第一に作るべきズボンの寸法を取らなくてはならぬ、この寸法は如何に取る可きかを知て然る後に裁斷に着手するのであるが、人の體軀には自から則るべき四肢の標準がある、この標準則ち比例寸法を心得て居ると或る部分の寸法を測つて他の部分の寸法を知ることが出來る、次に比例寸法の型紙を使用するの利を覺つたならば、更に進んでズボン其物が如何なる部分から成つたかを學び、次で角尺の使用法に渉り愈よ裁斷に進むのである、以下圖面に就て詳解を施したから、本文と圖面とを對照して研究されたい。

ズボン寸法の取方

第一圖參照

六種類三度位

尻廻りの寸法

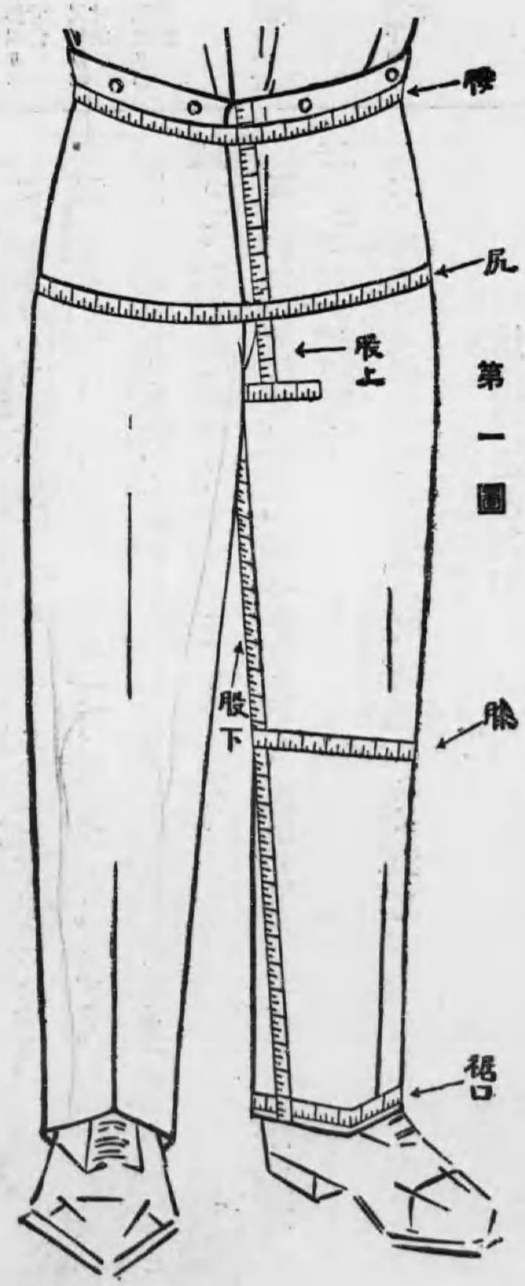
ズボン寸法の取方は、第一圖に示した通りズボンを着用した上より、寸法を測るを以て法則とする、通常左の六種類であつて、間違ひを避ける爲めに、三度位づゝ測るを以て安全とする、又左の寸法の中にて、尻廻りの寸法を最も重要となす、されば測寸により、細心の注意を以て測らなくてはならぬ。

若しズボン下の上より寸法を測る場に於ては、尻廻りに於て一時くらいの餘裕を附けて作圖裁斷するを以て安全とす、而して膝廻り裾口、股上等の寸法は左記掲載の比例寸法辯に依りて推定するを尤も便利とす、即ち比例寸法標は斯かる場に有効なるを以て特に本書刊頭に掲載せしものなり。

股上の寸法

嗜好

一　股上の寸法を測るには、先づ尺度又は、眞直なる、木片を股の上端へ、水平に挾み、其の上端より、臍に至迄を以て、法則とする、然し人々の嗜好によつては、多少の手加減をなすのは勿論である。



第一圖

腰廻りの寸法　二　腰廻りの寸法は、腰の最も細き處を以て測寸するものとする。

尻廻りの寸法　三　尻の寸法は、尻の最も大なる處にて、測寸するものとする。

膝廻りの寸法　四　膝廻りの寸法は、他の各部の寸法と異つて、着用してゐるズボンの膝廻りを測つて、其寸法へ多少の、加減をなすものである。

裾口の寸法　五　裾口の寸法は、膝の寸法の取方と同く、着用してゐるズボンの裾口を測つて之れに多少の加減をする。

股下の寸法　六　股下の寸法は、股の上端から、靴の踵までを測る。

身長と尻廻り

比例寸法と其表

左の寸法表は、身長と尻廻りを基として作りたるものなれば、各部分は勿論、一部分の寸法を推定する場合の參考として用ふれば甚だ便利である。

例へば、尻廻りの寸法が三十八吋の人にて、五呎三吋の身長を有する人の寸法を

見出す場合には、左の表中上より四行目の、三十八なる箇所に於て尻・腰・股下・股上・膝・裾口・と云ふ順序に見だし得るものとす。

五	尻廻	尻廻	尻廻	尻廻	尻廻	尻廻	尻廻	尻廻	尻廻	尻廻	尻廻	尻廻
呎	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	45
	31	32	33	34	35	36	38	39	40	42	43	43
	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27
	8½	8½	8¾	8¾	9	9½	9½	9½	9½	9½	9¾	9¾
	17¼	17½	17½	17½	17¾	17½	18	18½	18½	18½	18½	18½
	15	15½	15½	15½	15½	15½	15¾	15½	16	16½	16½	16½
五呎一吋	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	45
	31	32	33	34	35	36	38	39	40	42	43	43
	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27
	8½	8½	8¾	8¾	9	9½	9½	9½	9½	9½	9¾	9¾
	17½	17½	17½	17½	17¾	17½	18	18½	18½	18½	18½	18½
	15½	15½	15½	15½	15½	15½	15¾	15½	16	16½	16½	16½
五呎二吋	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	45
	31	32	33	34	35	36	38	39	40	42	43	43
	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27
	8½	8½	8¾	8¾	9	9½	9½	9½	9½	9½	9¾	9¾
	17½	17½	17½	17½	17¾	17½	18	18½	18½	18½	18½	18½
	15½	15½	15½	15½	15½	15½	15¾	15½	16	16½	16½	16½

五呎三吋	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	五呎四吋	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
	31	32	33	34	35	36	38	39	40	42	43		31	32	33	34	35	36	38	39	40	42	43
	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28		28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28
	8	9	9	9	9	9	9	9	9	9	10		9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	10
	17	17	17	18	18	18	18	18	18	18	18		17	17	17	18	18	18	18	18	18	18	18
	15	15	15	15	15	16	16	16	16	16	16		15	15	15	15	1	16	16	16	16	16	17
五呎五吋	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	五呎六吋	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
	31	32	33	34	35	36	38	39	40	42	43		31	32	33	34	35	36	38	39	40	42	43
	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28	28		29	29	29	29	29	29	29	29	29	29	29
	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7		9	9	9	9	9	9	10	10	10	10	10
	9	9	9	9	9	9	9	9	10	10	10		9	9	9	9	9	9	9	9	9	10	10
	15	15	15	16	16	16	16	16	16	16	16		15	15	16	16	16	16	16	16	16	16	16

比例寸法型紙の用法と其利益

一般に註文の洋服は、一人一人の寸法を取り、型紙も又、一々製作して作ると云ふ様な事が行はれて居る、此事に就て、能く考へて見ると、斯ふいふ結果になる。

一人一人の異つた寸法に從て、洋服を裁斷し假縫無しにて、工合善く作り上ることは、至難事である、又假縫をしても、隨分補正の必要を生じ猶出來上つた時にも、度々直しの出る事がある、何故に斯る事に爲るかを、考へて見ると、大體に於て左の三事に原因する。

一人一人の型紙
假縫無し
補正
直し
三事

一　完全なる寸法を得るに困難なる事、

二　裁斷法、卽ち製圖法の完全なる式法の見出し難き事、

三　假縫と補正の不熟練に依る事、

完全なる式法
不熟錬

此の三つの原因の内、何れか一つに該當しても、其結果は同じ事である、然れば不

結果

不完全

完全なる寸法と、不完全なる製圖とを以て、一人一人に型紙を作ると云ふことは、何の意味をも成さぬ、無論私も嬉めは其仲間であつたが、然し米國の或る大都市の大洋服裁縫會社へ裁斷見習として、入社することに依つて、其夢は醒まされた、それは前述の比例寸法型紙を以て仕事を成すといふ知識を得たと同時に、彼等の働き振りが如何に組織的に、如何に能率的なるかを、實際に見聞する機會を得て、實に驚歎したのであつた、彼等は此比例寸法型紙を用ひて、短時間の中に、如何に多くの、洋服を裁斷して居るか、現狀を見ない者には、想像も及ばない次第である、それで私は、此比例寸法の型紙が、如何に絶濟的に、しかも好果を及ぼすかを實際に知覺したので、斯る方法に依つて、短時間の中に、澤山の仕事の出來るやうに、御奬めしたいと思つて、こゝに此の比例寸法を掲げたのである、これを御利用あらむことを、切に御すゝめする。

比例寸法型紙

組織的

六種

參考迄に附言して置が、表中の五呎より五呎六吋、迄の七種の寸法を以て、型紙を作り（六ヶ月間位堪へ得る上等の型紙用紙を以て製作し置く）六ヶ月間位試驗して見ると、大體の見當は付く、夫れに依つて斯樣なる型紙を使用すると云ふことは、如何に好果があるかと、云ふ事が確實に證明される、普通に發達したる人體に於ては、個々別々に、そんなに寸法の違ふと云ふことは少なく、皆平均に發達して居るそれに少し位の寸法の違ひは、假縫の時に補正する事が出來るから、何も貴重なる時間を費して迄も、一々製圖する必要もなく一定の寸法に依る、型紙を加減して、用ふる方が、どれだけ時間の經濟になるか、經驗のある人の中には、よく御領解される事と思ふ私の考として、言ひたいのは、型紙を一々作る時を以て、假縫と補正に就て、最も合理的の知能を磨く事が、より以上に肝要の問題だと思ふ、猶上着の比例寸法は、後編を以て、上着の縫方を、發行する際詳說しやう。

試驗見當

證明

補正

加減

合理的

後編發行

ズボンの概括的說明

第二圖及第三圖參照

第二圖は、ズボンの出來上りたる側面の形狀にて、其足に適合せる程度に於て、工合と格好を能く作る。

前面、後面、と上前、下前、

ズボンは前と後の二部分より成りて、其前の部分を前面と云ひ、後の部分を後面といふ、又第三圖の如く穿きて左方に當る方を、上前と云ひ右方を下前と云ふ。

ポケットの用途

ポケットは普通五個を附くるものであつて、前面にある二個の大なるポケットを「縱ガクシ」と云ひ、墓口、ハンケチ等を入るるために用ひ、最も便利にして有用なる隱しである。

前面下前の腰マクの縫目にある小さき隱し（第三圖の**ホ**を以て云す）を「時計隱し」と云ひ、時計又は切符等を入るゝに用ふ。

第二圖に於て**ト**及び**ハ**を以て示すは「後隱し」と云ひ、ハンケチ、鍵等を入るゝに用ふ、此「隱し」は內側の袋の深さと形狀に依りては腰を掛くる際絕へず不快を感ずるとがあるから、「隱し」を作る時には、其位置と深さ形等に余程注意するを肝要とする

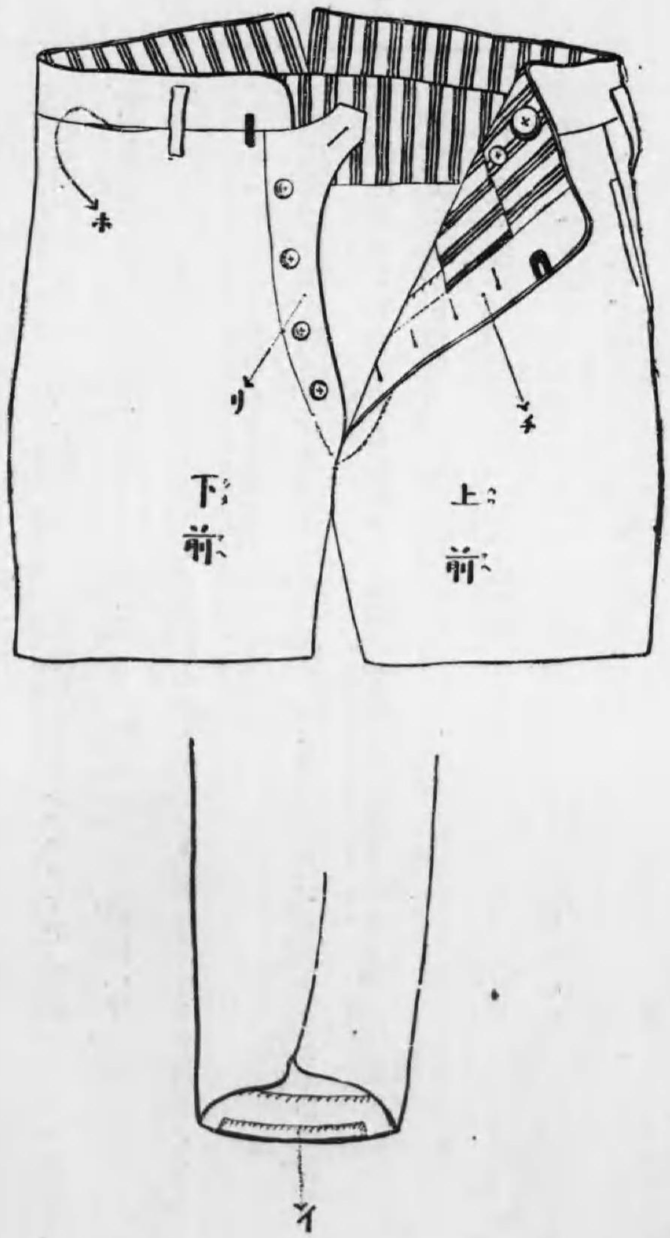
前ダテと天狗鼻、及び前開き

第三圖に於ける**チ**は前ダテ、**リ**は天狗鼻と云ひて、ボタンとフックを用ひて脫ぎ穿き等に便ならしむる爲めに用ひ、此所を總稱して前開きと云ふ。

附屬の名稱

イ、靴ズレ　**ホ、**時計ガクシ向切　**リ、**天狗鼻
ロ、ベルトホルダー　**ヘ、**ビジョウ　**ヌ、**腰マク
ハ、尻ガクシ向切　**ト、**雨蓋
ニ、縱ガクシ向切　**チ、**前ダテ

側面格好
前面後面
左方上前右方下前
縱ガクシ
時計ガクシ
後ガクシ形狀位置
總稱前開キ



第三圖

第二圖

直角尺の說明

此直角尺なる尺度の使用法は、裁斷上缺く可からざるものであるから充分に使用に通曉しなくてはならぬ、往時は各自思ひ思ひの尺度を使用したのであつたが、當今に至つては世界各國一般に共通して、此尺度を用ふるやうになつた、吾人はそれによつて利益を得る事が少なくない、此尺度を用ふれば直接に人に就きて習はずと

も、裁斷をなし得らるゝにより、現代の洋服裁斷には缺くべからざるものである。

直角尺の使用法

直角尺使用法

洋服を裁斷する上に於て、最も必要なる器具は、策四圖に示すが如き直角尺（則ちスコヤー、メジユヤ）にて、此尺度の使用法は左の如し・即ち製圖裁斷上には一般に半寸法を用ゐるのであるから、此半寸法の事を製圖上正度若しくは半度と名附け、尺度も又此半寸法（則ち半度）にて、自由に應用し得るやうに作られたるものであつて、直角の角は則ち此尺度の基點である、猶此直角尺の長さは長き方が二十四吋あつて上胴廻り四十八吋の寸法迄使用し得らるゝものである、其長き方に於ては、半度の三分の二の區劃より、三分ノ一、六分ノ一、十二分ノ一、二十四分ノ一迄の區劃が五個ある、又短き方に於ては半度の二分ノ一より、四分ノ一、八分ノ一、十六分ノ一、三十二分ノ一迄の五區劃が有つて、凡て割出しに必要なる數は一目し

半寸法正度半度

基點

五個の區劃割出し

て分り得るやう同數字を以て圖の如く記してあるから、割出上如何なる寸法にも煩はしき計算を要せず、何分ノ一は何吋に當るかと細かく記してあるものである、猶此尺度の使用法は圖面に於て其實際を示してあるから就て研究せられたい。

計算

尻廻りの半度

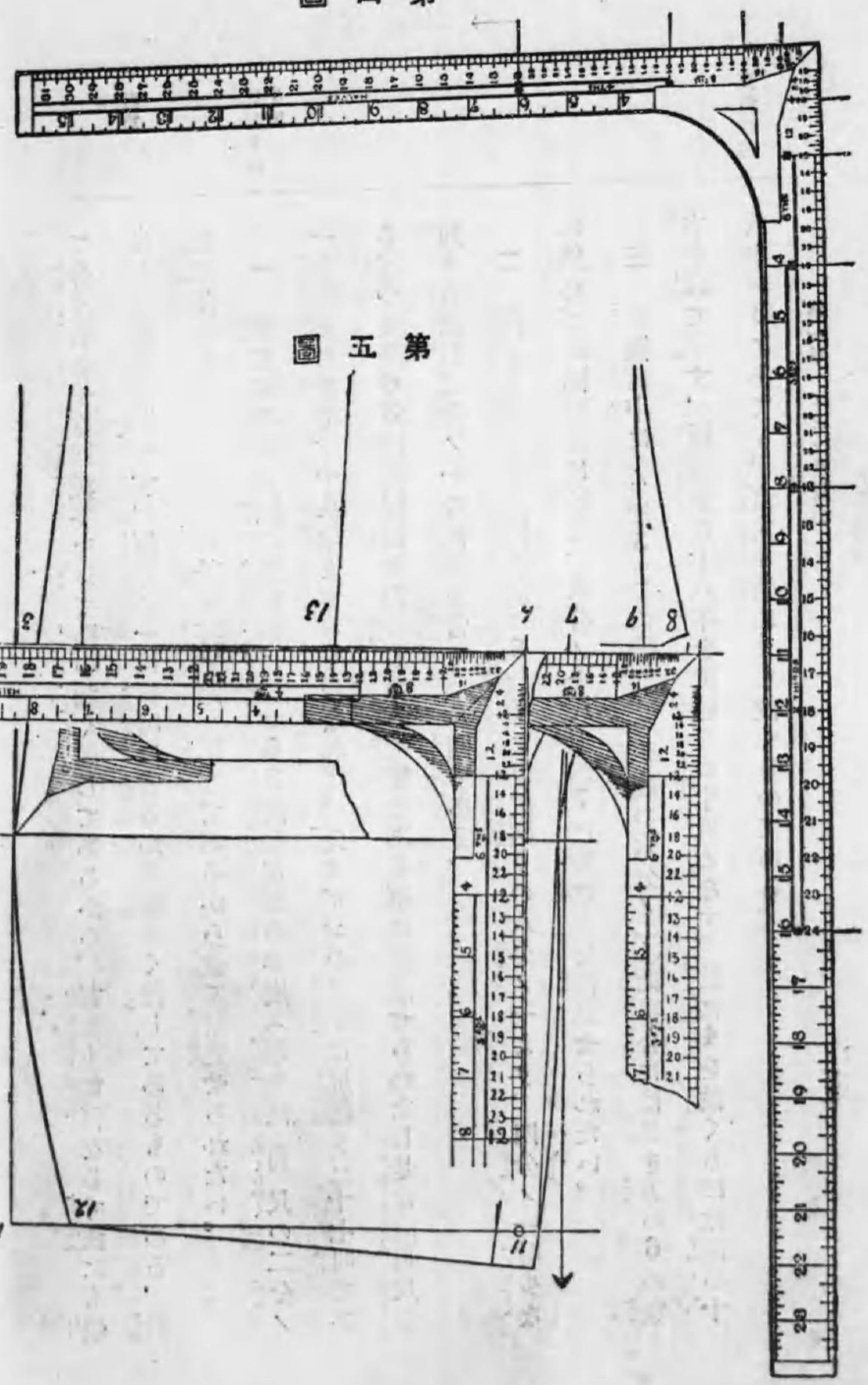
一　第五圖及第六圖の製圖法に於て63間は尻廻の半度（則ち直角尺の二分ノ一の區劃に於て、十八半とするものなれば、此ズボンの寸法は尻廻り三十七吋である）つまり63間は尻廻を四分したる寸度である事に注意せられたし是は直角尺の短き方則ち二分ノ一の區劃を當てたる圖である。

二　猶第五圖及第六圖に於て8は7より尻廻りの八分ノ一より、四分ノ一吋少ない然れば此圖面中に於て、八分ノ十八半が7に於けるを注意せられたい。

三　同圖面中に（4は3より尻廻りの半度の六分ノ一）此場合には長き方の6の數字を以て示す、區劃中の十八半を尻廻りの半度となす、故に4を設くるには前の十八半を3にあてゝ、直角の角に4を設くるのである。

直角の角

第四圖



第五圖

之れにて大體の説明は終つたけれど、若し其れにて會得のゆかぬ時は、實物に就きて研究せられたい。

米國式細形ズボンの裁斷法

尻廻、　卅七吋　腰廻、　卅二吋　股下、　廿八吋
股上、　九吋半　膝廻、　拾八吋　裾口、　拾五吋四分の三

1は圖面に於けるが如く、2及び11に至る直角線の角である、

2 1 間は股上及び股下の寸法を加へたるもの、則ち右の寸法に從へば、三十七吋半である。

3 1 間は股上の寸法卽ち九吋半なり、

4 3 間は尻廻りの半度の六分の一、

5 3 間は膝廻りの線にて、3 2 間の眞中より二吋少ない、

2 3 4 の各點より直角線を前方に引く、

6 3 間は尻廻の半度乃ち角尺の二分ノ一に於て十八半とす、

7 6 間は四分ノ三吋、

8 7 間は尻廻りの半度の八分ノ一より四分ノ一吋少ない、卽ち二吋五厘なり、

9 8 間は四分ノ三吋、

10 は 4 と 6 の交叉點に於て設けらる、

矢線は 7 より直角線を引き上げて設けらる、腰の線上に於て矢線より半吋後部を當てに 7 より、直線を引き、又此線に並行せる直線を 6 より引き、此二並行線の中央に圖面の如く 11 を設く、

12 11 間は腰の寸法の半度乃ち角尺の二分ノ一に於て十六吋である、

13 3 間は 9 と 3 の中央である、

14 2 間は 3 8 の寸法へ四分ノ一吋を加へたるものと同じ、

15 14 間は腰の半度の十二分ノ一である、卽ち一吋八分の三なり、

16 15 間は裾口の半度より半吋少ない、

17 15 間は 16 15 間の中央へ設けらる、

13 より 17 に至る直線を引く、此直線は前後面の折目となるべき線である、

18 13 間は 5 3 間の長さと同じ、18 より 13 17 の直線によりて、前後に直角線を設く、

19 18 間は膝の寸法の四分ノ一、

20 18 間は膝の寸法の四分ノ一、

12 より始まつて前開き及び內股を經て 15 に至る仕上線を設ける此仕上線は 11 に於ては腰線の半吋上に設け、股角に至りては 8 より四分ノ一吋下位に定むる、

6 より腰線に至る並行線は下前辮を設くる爲めに斯くなせるなり、腰より 10 9 を經て 19 に至る仕上線を圖面にならひて引く、

12より4 3 20 16間も同じく圖面にならひて仕上線を設く、

裾口は17に於て四分ノ三吋位上位へ弓形に仕上げる、

これにて前面圖は終了した。

後面の製圖は前面圖を基礎として製作するのである、先づ38線、及び裾口の仕上線に於る15 16の如く各線を引き延ばすのである、

21 8間は尻の半度の十二分ノ一へ四分ノ一吋を加へたものである、

22 3間は一吋四分ノ一である、10より22に至る直線を引き、猶此線によりて、10より直角線を引き腰線上に23を設く、

24 23間は尻の半度の六分ノ一である、

25 19間は半吋、

26 15間は一吋

24より23 10 21 25を經て26に至る仕上線を圖の如く設く、

25 26間に於て外側へ曲りたるは脹ら脛の餘裕を付けたるものにて此圖面に於ては四分ノ一吋とするものである、

27 16間は一吋、

28 20間は半吋、

29 22間は一吋半、

28より29を經て腰に至る直線を引き30を設く、

30 28間は20 12間の長さと同じ寸法である、

30より24に直線を引く、

31 24間は腰の半度の二分ノ一である、

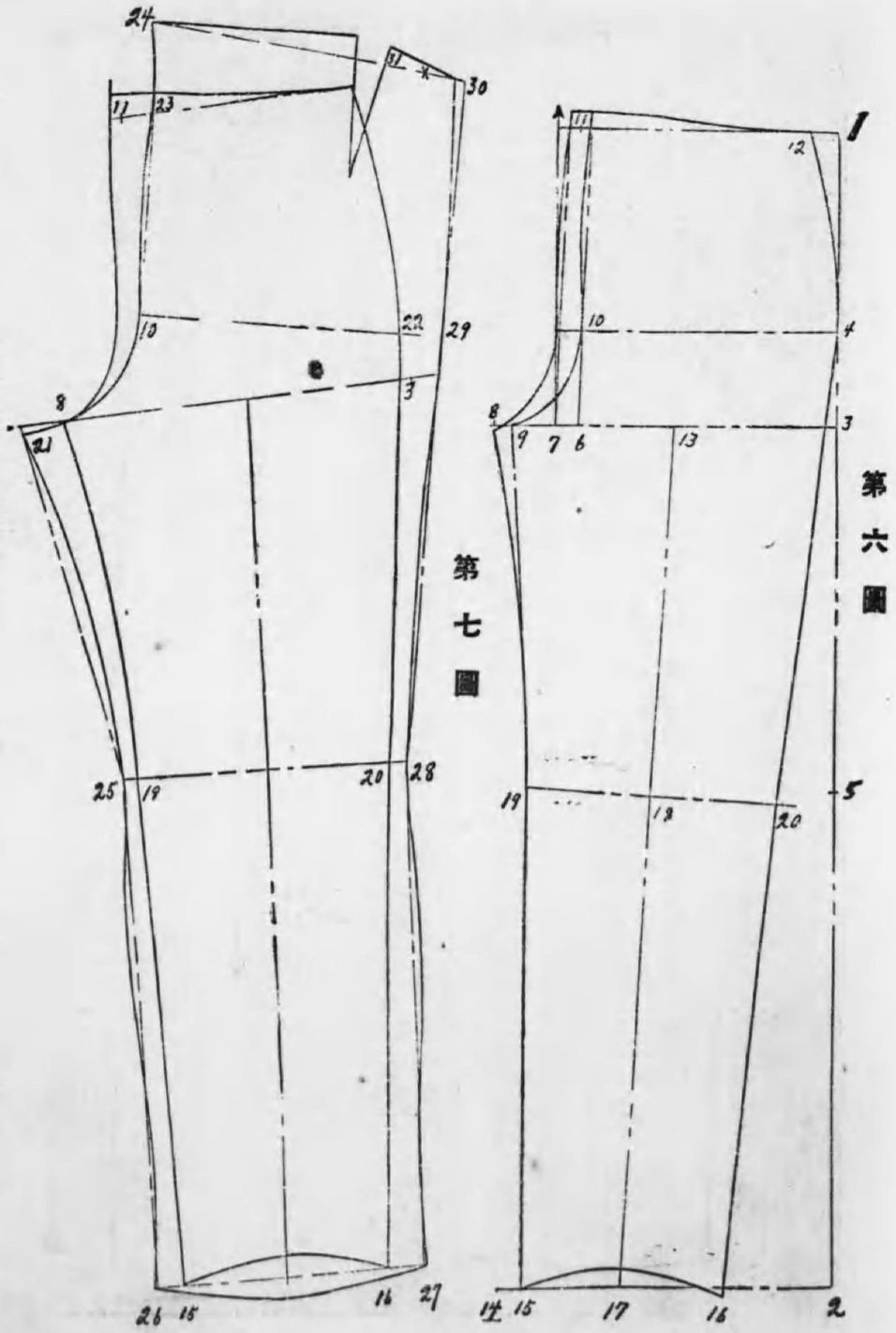
X 31間は一吋半にて、此一吋半は腰廻り全部の縫代を加算せるものにして、腰の縫目は全部にて六本あり、一本の縫目に半吋を要するにより、全部にて三吋とす、されば此半度は右にいふ一吋半とするものである、

X30間は腰の殘寸法にて、癖の縫目にて取り去るものとす、又は此圖面に於けるが如く30に於て二分ノ一吋取り去り、其殘餘を癖にて取り去るも差支へはない、30の二分ノ一吋内側より29 28 27に亘りて、圖面の如くに仕上線を設く、29より28の間は八分ノ一吋位内側へ28より27の間は脹ら脛に於て前の如く四分ノ一吋外側へ曲ぐるのである。

27 26間は二分ノ一吋位弓形に仕上線を設く、

30より24に至る間は圖面の如く仕上線を設く、此仕上線は癖の縫目にて四分ノ三吋位上部に設くるのである。

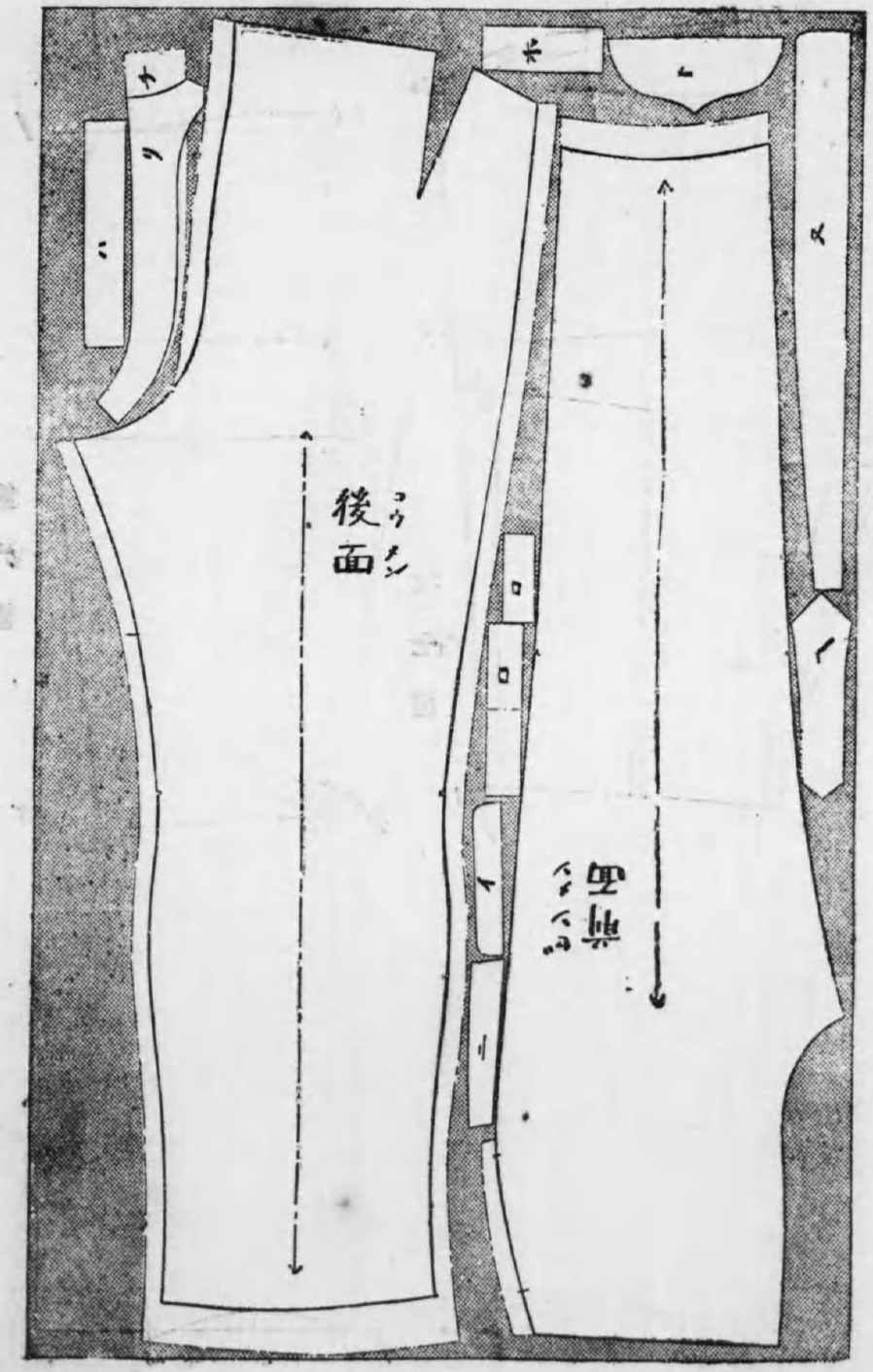
此ズボン裁斷法は股下の兩脚間の開き少きために身體に適合良く、又出來上りの體裁極めて良好なれと紳士の高級ズボンとして尤も適當なる法式なり、若し後面臀部に於ける餘裕乏しき時には23點を半吋より一吋半位の程度似内にて後方に設け、其れに從て30點も然るべく後方に設くるものなり、



第六圖

第七圖

第八圖



點線は代表線
縞目の注意
前後面の點線縫込みの寸法

ズボン地質裁ち方（第八圖參照）

此圖は五拾六七吋巾にて、一碼二分を要する取り方であるが、寸法の長短に依りて多少の增減を要する、

前面と後面との中央にある點線は、製圖13に於て説明せしが如く前後折目の代表線なれば、布目を眞直に取る樣に注意を要す、尙縱縞等の場合には充分に注意して、縞目の眞直に通る樣に取る事を肝要とする、前後面の外側の點線は、縫込を示したものにて、裾口は二吋より二吋半位、後面の內外兩側は半吋又は四分ノ三吋位、尻は半吋より一吋位迄圖の如く附するものである。

附屬類のロハヘヌは矢張布目を眞直に取るべきものである。

附屬品細別表

第一表　附屬

1、イ、靴ズレ、　二枚、

2、ロ、ベルトホルダー、六本、
3、ハ、尻隠し口切、二枚、
4、ニ、縦隠し向切、二枚、
5、ホ、時計隠し向切、一枚、
6、ヘ、美錠、二枚、
7、ト、雨蓋、二枚、
8、チ、前ダテ、一枚、
9、リ、天狗鼻、一枚、
10、ヌ、腰マク、二枚、

第二　裏附屬

1、イ、前ダテ裏、スレキ、二枚、
2、ロ、天狗裏、ホランド、又は、一枚、スレキ、

3、ハ、美錠、裏同上、二枚、
4、ニ、雨蓋裏、アルパカ、二枚、
5、ホ、腰裏、縞スレキ、又は縞サテン、二枚、
6、ヘ、膝裏、甲斐絹、二枚、
7、ト、前シック、スンキ、又は縞スレキ、二枚、
8、チ、後シック、ネズスレキ、一枚、

第三　袋切

1、イ、縦隠し袋、袋地、二枚、
2、ロ、後隠し袋、同上、四枚、
3、ハ、時計カクシ袋スレキ、二枚、

第四　芯

1、イ、腰芯、　天ジク又はスレキ、　二枚、
2、ロ、腰マク芯、　眞地、　二枚、
3、ハ、ビジョウ芯、　同上、　二枚、
4、ニ、穴の當芯、　スレキ、　七枚、
5、ホ、ボタンの當芯　眞地、　拾枚、
6、ヘ、尻ガクシ當芯　眞地、　四枚、
7、ト、テープ、　眞地、　四本、
8、チ、フック當芯、　眞地、　二枚、

第五　ボタン類

腰ボタン、　大、　六個、
前ダテボタン、　小、　五個、
雨蓋ボタン、　二個、
フック、　一個、
ビジョウ、　一個、
金具、

裏附屬の寸尺

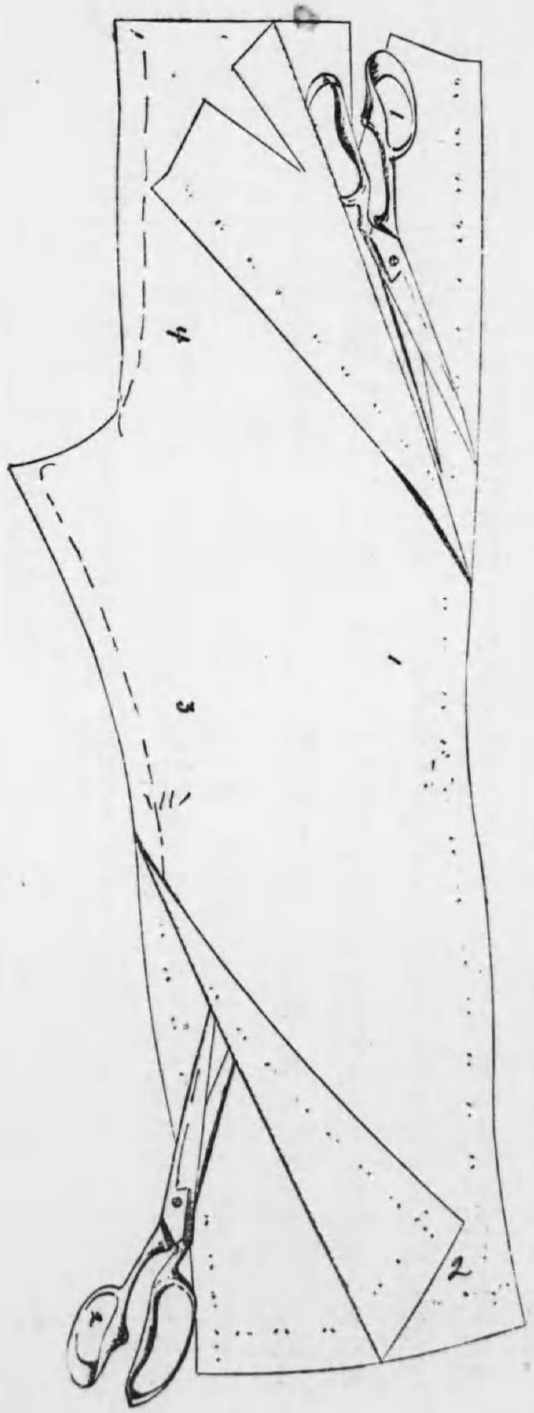
腰裏は縞スレキ、縞サテン等を用ゐる、
前ダテ裏、天狗裏、時計隱し、袋、ビジョウ裏、シック等は表地の色合に合せて
黒スレキ、又は鼠スレキ等を用ゐる、

腰裏、　六吋半×　袋地、　廿五吋×
スレキ、　七吋×　天竺、　四吋半×
芯、　六吋×　テープ、　約卅二吋×
膝裏、　廿二吋×

第二章

ズボン裁縫準備工程

ズボンの裁斷が領解せられたならば、次に起るべき問題は裁縫の準備は如何なる工程を經べきかである、準備に必要缺くべからざるものは附屬品であるから第一に其細別表を掲げて附屬とは如何なるものであるかを詳述した、就中、切仕付の切り方と其注意とは裁縫者の必ず知らねばならぬ點で次で癖取の取方も亦忽諸に附することの出來ぬ點である、更に假縫の作り方は準備工程中でも重要の地位を占めてゐることは事新らしく說くまでもないことである、以上の諸點に就て詳密なる圖入にて說明すれば左の如くである。



第九圖

切仕付けの切り方と其注意

第九圖參照

縫込み縫合の目印
合付附
往々地質を切る
鋏の安全使用法

切仕附は縫込み又は縫合せ等の、目印として用ゐるものであるから、若し此目印に間違が生じたならば、到底完全なる品物を作ることを期す譯には行かぬ、故に合仕附は勿論隅々の仕附等も明了に爲し置く事を以て第一とす。

切仕附を切る時に當り、第一に注意を拂はなくてはならぬことは鋏を以て地質までも誤つて切つて了ふ事である、殊に夏服地、合服地等薄地の時には、斯ふ云ふ事が續々ある事なれば特に注意して斯る失敗を演ぜぬよう心掛けなくてはならぬ。

鋏、圖面第一に於けるが如く、鋏の先を外側へ向けて、用ゐるのを以て最も安全なる使用法とする、然れば切仕附を切るには、常に斯かる方法を心掛けられたい、此方法は鋏の先端が、外側へ向き居るために間違ひを生ずる恐れ少なく、且地質を

地質を傷けた場合
安全法の正反對
尻部
内服
地質表面全部
熨火

萬一傷付けたる場合にも、其傷處は仕付の處か、或は外側になる爲めに、製品の表面に累を及ぼさないのである、鋏圖第二は之と正反對の結果を及ぼすもの故、絶對に之に倣ふては不可ぬ。

切仕附を打つには、先づ1234と圖面の數字に從ひて、尻部に於けるが如く、仕附を打ち次に、3なる内股に於けるが如く、仕附の眞中より糸を剪み切りて後、地質の間の糸を切り、猶表面の糸を短く切り去る、斯の如くして全部の切仕附を終つたならば、切仕附全體に火斗熨を掛けるのである、之れは切仕附の糸の拔くるを防ぐ爲めにする。

假縫後に於ける切仕付の注意!!

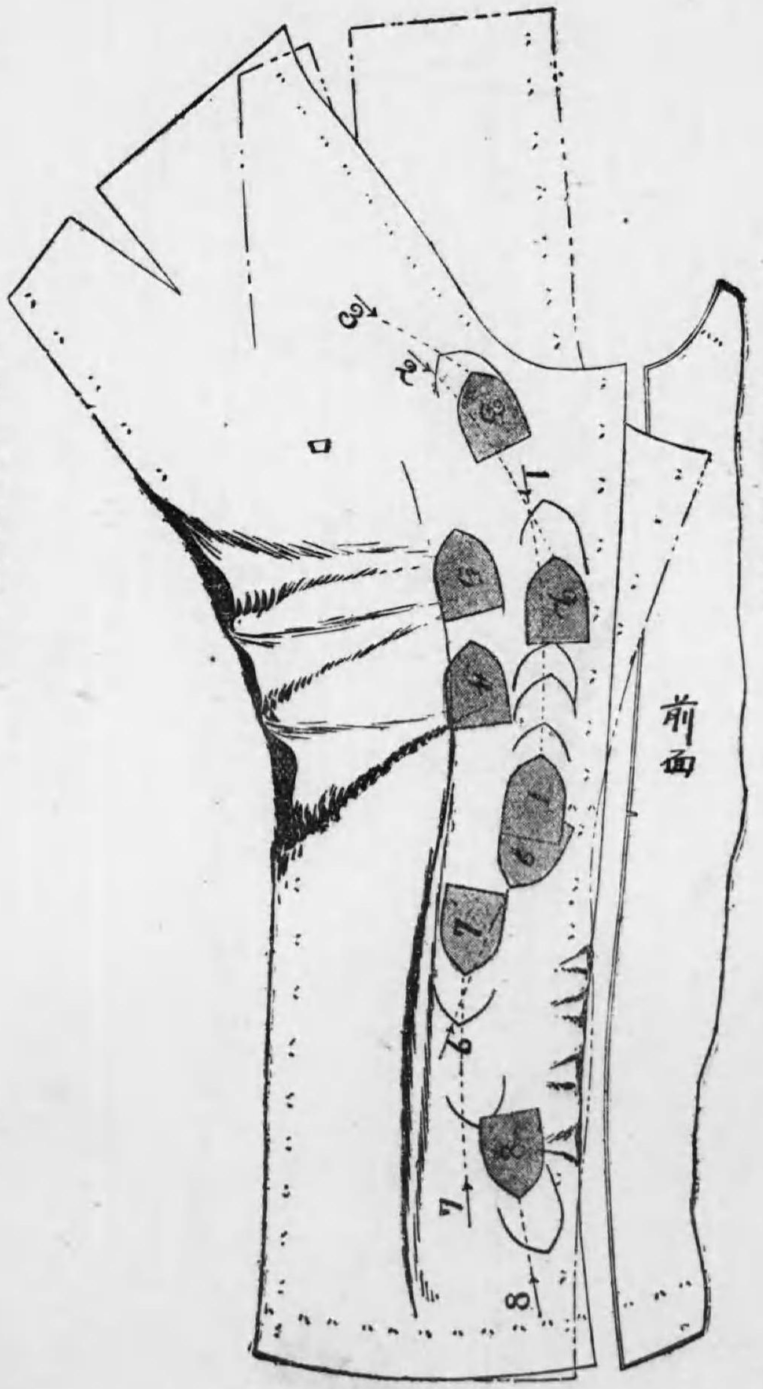
此の記事中最初三行に亘り注意したる如く、合仕付又は隅々等を明瞭に爲すは勿論であるが、假縫後に於ける切仕付に至りては本縫の目印となる、故若し之れに間違を生すれば寸法の大小にも結果を及ぼすから、一層の注意を要する所である

癖の取方と其注意（第十圖イ、ロ、ハ、ニ、參照）

癖取とは平直なる前後面を、熨斗の熱度を以て、伸ばし又は縮め、或は曲げて、之を圖面（ニ）及び假縫圖（ハ）の如く、足の形體に似せて、地質を形作る、技工方法の事を謂ふ

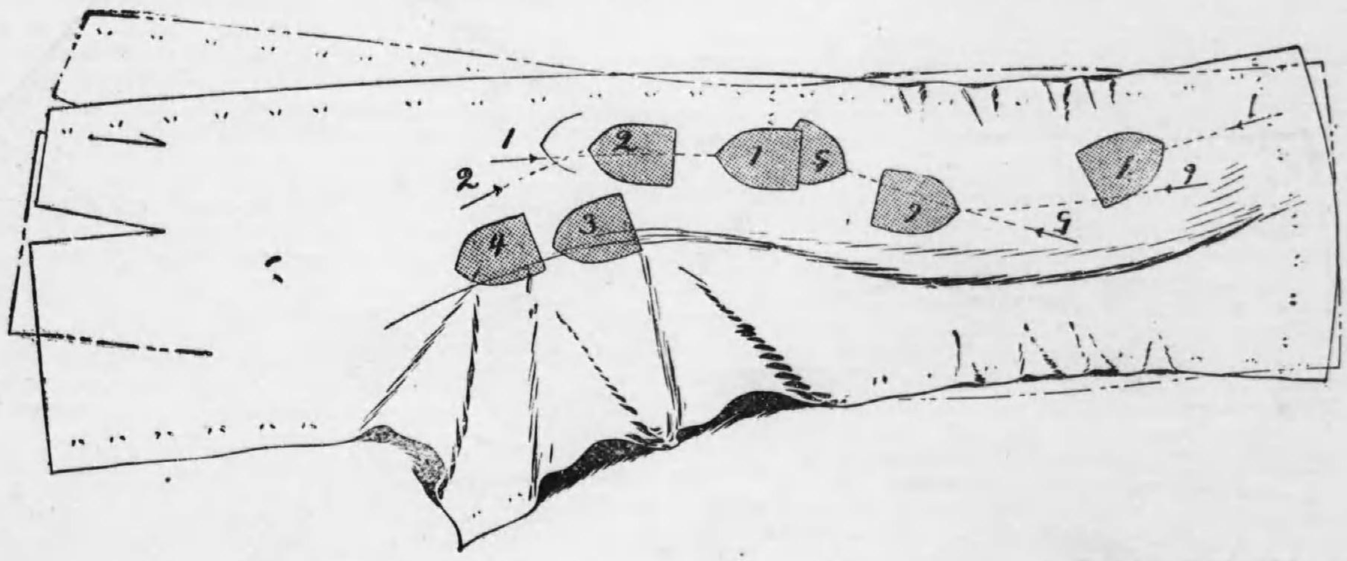
熨斗の熱度
技工方法

第十圖（イ）

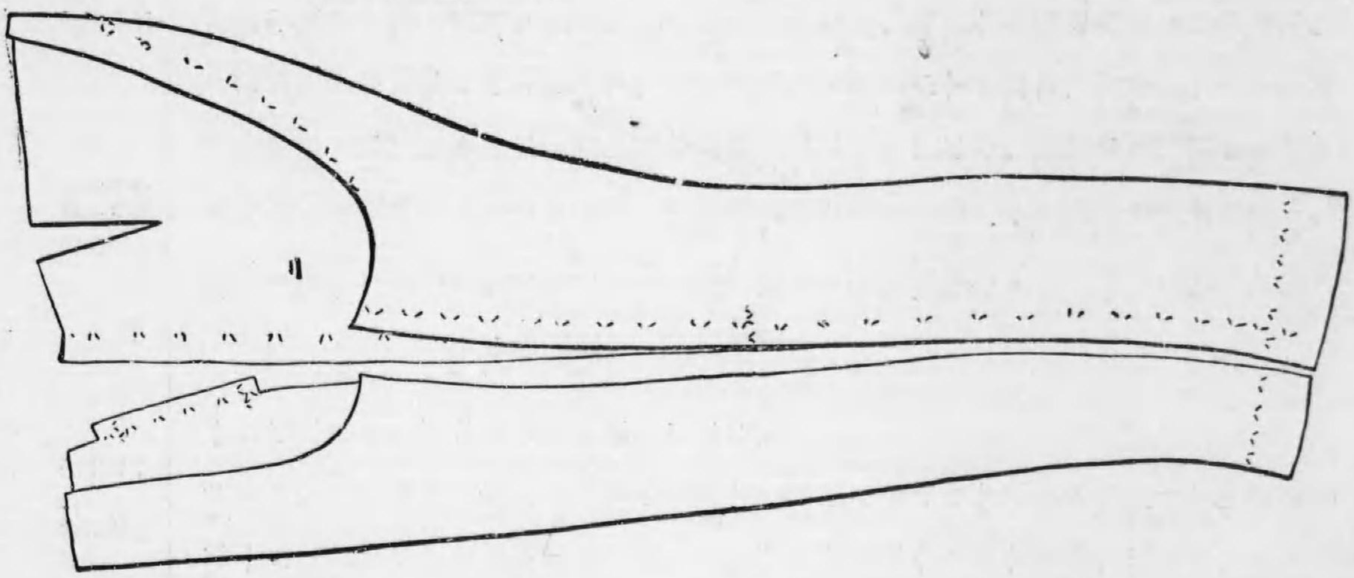


第十圖（ロ）

第十圖（一）



第十圖（二）



燒け焦がし
安全第一

熨斗を用ふるに就ての注意

第一に注意しなくてならぬ事は地質を燒け焦がさぬやうにする事、之れは、吾々の如き多年の經驗ある者にも、度々失敗する事があるから十二分に注意して、安全第一といふ事を、忘れぬことが肝要である。

極度の熨斗を水中
鼠色の注意
實物試驗

熨斗の熱度

熨斗の熱度は筆紙を以て能く說明をなす事は、不可能事であるけれど、先づ大體を云へば、極度にきゝたる熨斗を、水中に入れて能く冷し、一分間位を經たる後に、尙他の切を以て、試したる後、用ゆれば安心なものである。適當なる熱度を覺知する迄は、實物に取りかゝる前に、其都度必ず試驗をなすを以て、安全第一とす。又切地が鼠色の場合には、黑色、茶色等の場合より、早焦する恐れあるものなれば、熨斗を運進中に於ても、屢〻注意して冷し、尙其切を以て試驗するのが萬全である。

地質の軟化
一枚宛辯取
二枚同時に辯取

羅紗を伸ばす

地質の表面に薄く水を引きて、夫れに熨斗の熱度を加へ、切地が充分に、軟化した瞬間に、壓へつける力と引張る力の、一致したる時に、伸びるものである。第十圖中にある點線は原形であつて其內の黑線は辯を取り終りたる後の圖であるから、比較參照せられたい。

辯の取り方

一枚づつ取る方法あれども、此方法は出來上りの結果、二枚異り易き恐れあると同時に、長時間を要するに依り、左の方法を以て最良とする、然しながら二枚となれば別々にズリ安きものであるから、常に注意することが肝要だ。

イの圖面は前面衿口の辯取である。

1の熨斗形上に熨斗をあて、左手を以て矢面を持ち、前記の如く、切地の軟かくなつた時、充分に押付け、又引張つて、順次に矢の方面に運進する。

濕氣を去る

2は右と同じ方法に依りて伸すのである。

斯くの如くして伸し得たる處は全部熨斗切を掛けて、充分に濕氣を取去る必要がある、乾き惡き時は折角伸したる處が、原形に戻る性質あるに依り、其心得にて充分に乾かさなくてはならぬ。

下前癖

3下前癖、

通常上前に罩を入るゝものであるから、下前は上前より少しく、少さく作るべきものにて、下前の形を能く見する爲めに、圖の如く股の斷込の少し上部を、伸すものであつて、之れを下前癖と名つける。

癖取中の重要なるもの

□の癖取は三者中最も重要なるものである。

1の矢の面を左手を以て持ち、右の熨斗を1の熨斗形上にあて、全身の力を左右の手に籠めて、黑線の如く、外側へ曲ぐるが如くに引伸し順次に2に至る迄を同じくなすべし。

左手で矢面を

2の熨斗形上に熨斗を當て、左手を以て、2の矢面を持ち、3の方行へ前と同じく運進を續けて伸ばせ。

3の矢面を持ち、3の熨斗形より少しく上迄を前の如く、伸せ、此處を說明の都合により斯くの如く、123に別ちたれど成るべく1より3までを續けて行ふのが良い。

引伸の餘りをイセ込む

45は右の引伸しの爲めに、生じたる餘りを、此間に於て、縮込むのである、この縮込むには前の如く局部に薄く水を引きて、皺を寄せぬ樣に注意して段々に縮込むのである、次に前の說明に於けるが如く熨斗切を當てゝ、12345に亘りて、充分に乾かさなくてはならぬ。

膨脛の餘裕

678は、膨ら脛の餘裕を作る爲めである、此縮込には前の如き强き力は要せぬ、7は膨ら脛の最も突出したる所にして、膝の合仕仕より、約三吋內外の處である。

強度の彎曲

6の矢面を持ち、6の熨斗形に、熨斗を當て、其運進と同時に、切地を曲げ、徐徐に運進を續け、7に至りて、最も強度なる彎曲になし、次に7の矢面を持ち、徐徐に曲度を少くして、順次に8に至るので、斯くして生じたる(圖面に示したる如き)波形の餘を、皺になさぬ樣に徐々に縮込むのである、終りに前の如く、熨斗切を以て、乾す事を忘れてはならぬ。

裏側に返す

次に二枚一緒に裏側に返して、今迄の反對に321、678と同じく引伸し及び縮込を續行して、終りに熨斗切を掛けて能く乾かすべし、又ロに於ける癖取も之れと同じく兩面より成すべき事を忘れざる樣心得られたい。

ハの癖取の方法

大體に於てロに於けるが如くなれども、12間に於てはロの12間より稍や少きものと心得て差支ない。

1の矢面を持ち1の熨斗を2に向けて、順次に運進を續けて2に至り次に2の矢面を持ち、同じく熨斗を進めて2の少しく先に於て止むるのである、以下の34、567はロに於ける45、678に倣ふて、行ふのである。

全部終了

斯くして全部終了した上は、圖面ニの如く折疊み置く。

膝廻

往時流行せる如き、膝廻の太きズボンは、12間に於て、斯くの如き多くの引伸しを要せざるも、23の間は右と同樣に心得て、差支へなし、又半ズボンに於ける時も右と同じく2と3の間を伸すべきである。

半ズボン

假縫の作り方と其要點

仕付縫

假縫とは、第十一圖ハの圖面に示した如く、仕付縫を以て作り上ぐるものにて、又之れを實體に着せ附けて、寸法の大小、恰好の良否、具合の適不適等を推定する試驗的方法の事を云ふ。此故に具合恰好等は勿論其要點に至りては、毫も本縫と異らざる注意と心掛を怠つてはならぬ。

テープを吊る

例へは癖の取方、縫目の縮め方、ボタン付けの位置、縫目の結合等を云ふ。

尙一般にテープを吊ると云ふ言葉を用ゐるが、本來テープとは、何の爲めに用ふるものなりやといふに、これは縮込みし所を、伸さぬがために用ふるものであるから、吊ると云ふ言葉は不適當である、むしろ吊るよりも熨寸にて、縮込みし所へテープを入るゝ方、綺麗に上る故、私はテープを吊るといふことを仕ない、其れ故テープを入るゝと云ふ方が適切であるから、以下テープを入るゝと云ふことにする。

テープを入る

仕付の縫目

假縫は右の說明の如く仕付を以て着せ附くるか故に、仕付の縫目が綻び安きに依り、仕付の始と終り、又は尻の縫目等の如き要所は細く、丈夫に仕なくては不可ぬ。

彎形

弓形

一　の圖面に於て、4の矢を以て示す腰マクの附(前角より脇角に至る)と、矢を以て示す下前のハナを、グシ縱にて四分の一吋位に縫縮る。

二　縮を重に眞中へ寄せ、熨斗を以て彎形に奥へ縮込む。

三　上前のハナと、1の矢を以て示す左右の隱しの所を、前と同じく奥へ弓形に、四分の一吋位に縮込む。

左右の隱し腹の脹らみの餘裕

四　圖面の如く上前のハナと、左右のカクシへテープを入れる、是等の縮込は腹の脹らみの餘裕を作らんがためである。

縱の縫目

五　後面を圖の如く据へ、矢の2を以て指示したやうに、切仕付より半吋內側へ縱の縫目全體に亘りて、チョークにて印しを附ける。

六　膝の合仕付を合せてチョークをアテに前面を重ね、裾に迄仕付を打ち、次に腰マクの付より膝に至る仕付を打つ、此仕付を縫ふに當り、カクシの三吋位下より上の止め迄の間に於て、後面を四分の一吋縮込むのであつて此所は仕付を打ち乍ら平均に縮る。

平均にいせる

七　下前のハナより半吋內側へチョークを引き、夫れを當に天狗鼻をつける、此仕付を打つ時に當り、5の矢を以て示した所は、下前癖を伸ばしたる所なれば縮めぬ樣に注意して仕付を打て。

ボタンの位置

八　腰マクを附くるには、天狗鼻の附と同じくハナより半吋内側へチョークを引き、夫れを目印として仕付を打ち、次にボタン芯を附くる。

腰マクの仕付を打つには、ボタンの位置及び3の矢を中心に、前後一吋二分の一位を細く丈夫に成すべし、ボタンの位置は後より一吋二分の一位、前のボタンは、上前と下前を合したる寸度を三分して其一に當る所とする、(眞中のボタンより測りて、)

寸度を三分

九　内股を入るゝには、始めの説明の如く、切仕付より二分の一吋内側へ股より裾口迄、チョークを引き、膝の合仕付を合せて、右のチョークを當に仕付を打つ。

膝の合仕付を合せる

一〇　上前は右に於けると同じ順序にすればよい、終に前がゝりのハナを四分の一吋内側へ折返して同しく裏側より仕付を打つ。

裏側より仕付

一一　尻の縫目を入るゝには、兩足を第三十五圖に於けるが如き體裁に成して圖7 8 間を四分の一吋の縫代を以て仕付縫をするのである、次に上前に折り返し、

仕付縫

尚表より縫目の上を仕付打つものとす、此仕付を始むる時と終る時は丈夫に止めをなすべし、又6の矢の上下五吋位の間は、着用する時に地質が伸びるために糸の切れる事がある故、仕付糸を充分に緩くして置く事は肝要である。

糸の切れる事

一二　裾の上げ方は第三十六圖を參照して尚此圖面に於ける如く仕付をする、在來の上げ方に依れば、一般に内側に上ぐるのであつたが、是れは穿く時に當り、度々引きかゝる事あり殊に薄色物の時等には、裾口の汚れる恐れあれば、冬物の時も薄色物の時にも、全部外側へ折上ぐる様に改良する事を希望して置く。

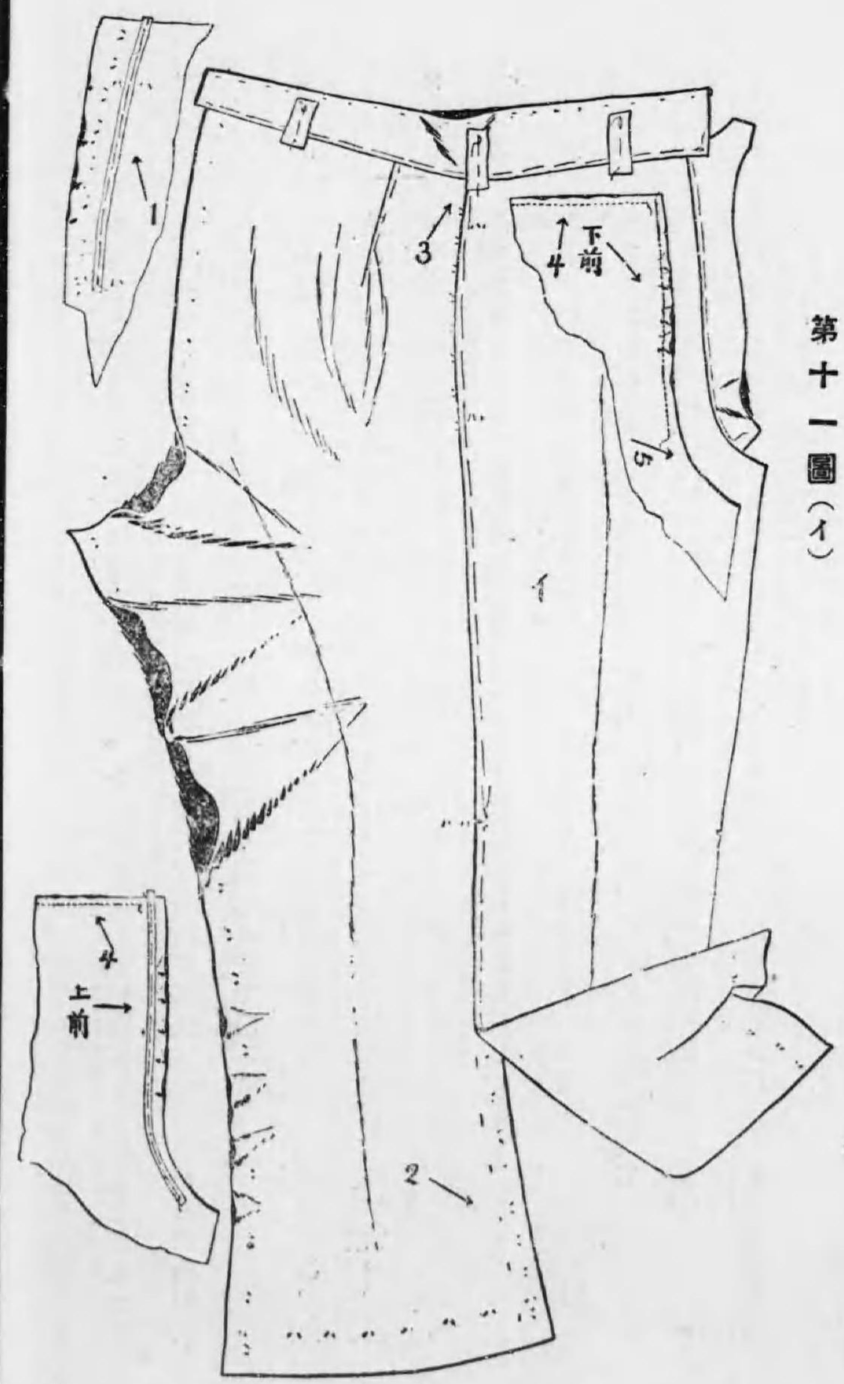
裾の上げ方

薄色物

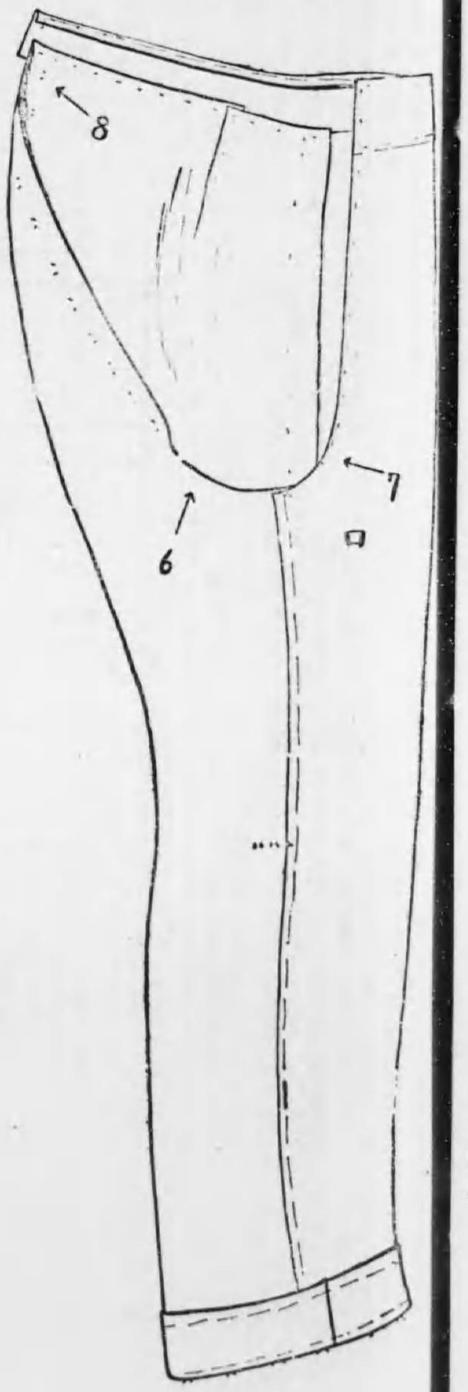
外側へ折上ぐ

附言!!　改良と云ふ事は兎角實行に乏しくなるものであるが、苟くも自己の業務上に於ては何事にも實行を躊躇してはならぬ事と思ふ、假りにズボンに就ての或る一部分を此處に示したまでゝある、其の他種々なる點を掲くれば實に其の遑なく故に本書以外にも之れが發表に努むる積りであるが研究の諸君に於かれても改良すべき諸點を見出したる場合は進んで改善に努められん事も希望して置く

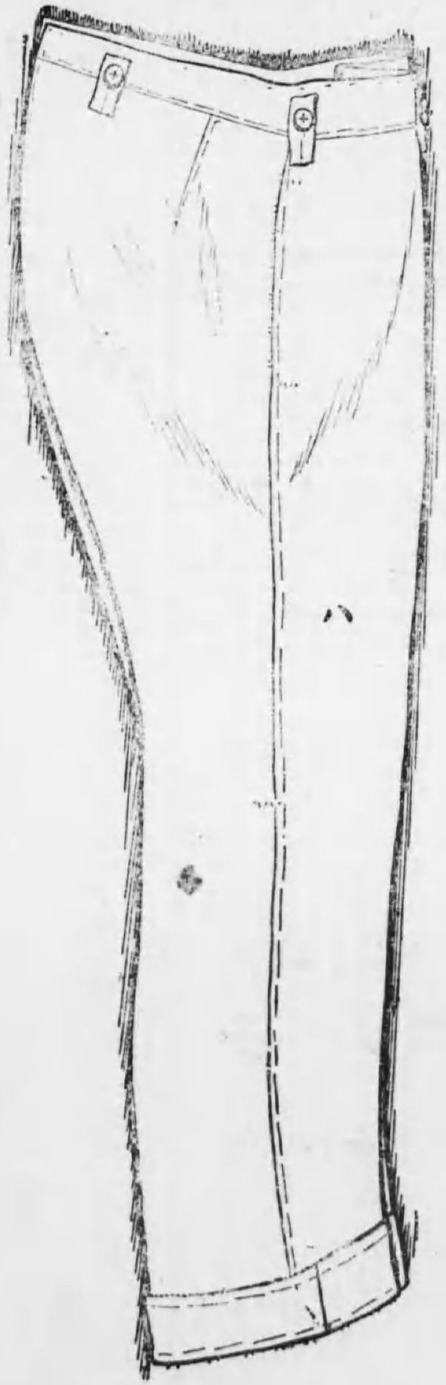
第十一圖（イ）

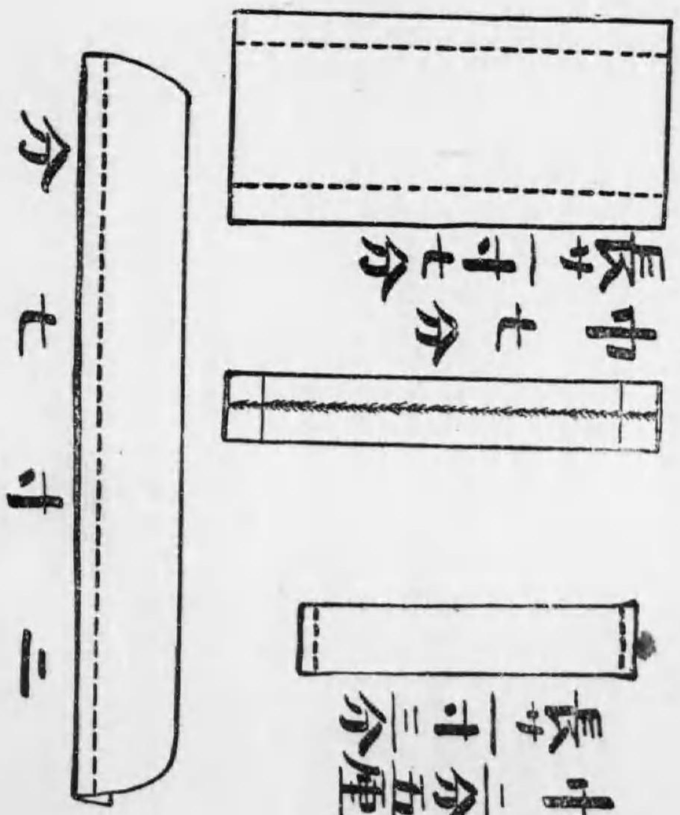


第十一圖（ロ）



第十一圖（ハ）





第十二圖

腰の周圍に縫付ける綴地の切

引繰返し

靴づれ

○第三章　ズボン各部分の製作

靴擦レとベルトホルダーの作り方

ベルトホルダーは第二圖のロに於けるが如く、腰の周圍に縫ひ付け其に革帶を通し、腰を締めズボンを支へるものなれば第四圖に於て説明せるが如く、眞直なる縦地の切を用ふるやうに注意することが肝要である。又かゝる簡單なる事はなるべく仕付を打たずしてミシンを掛くるものとす。

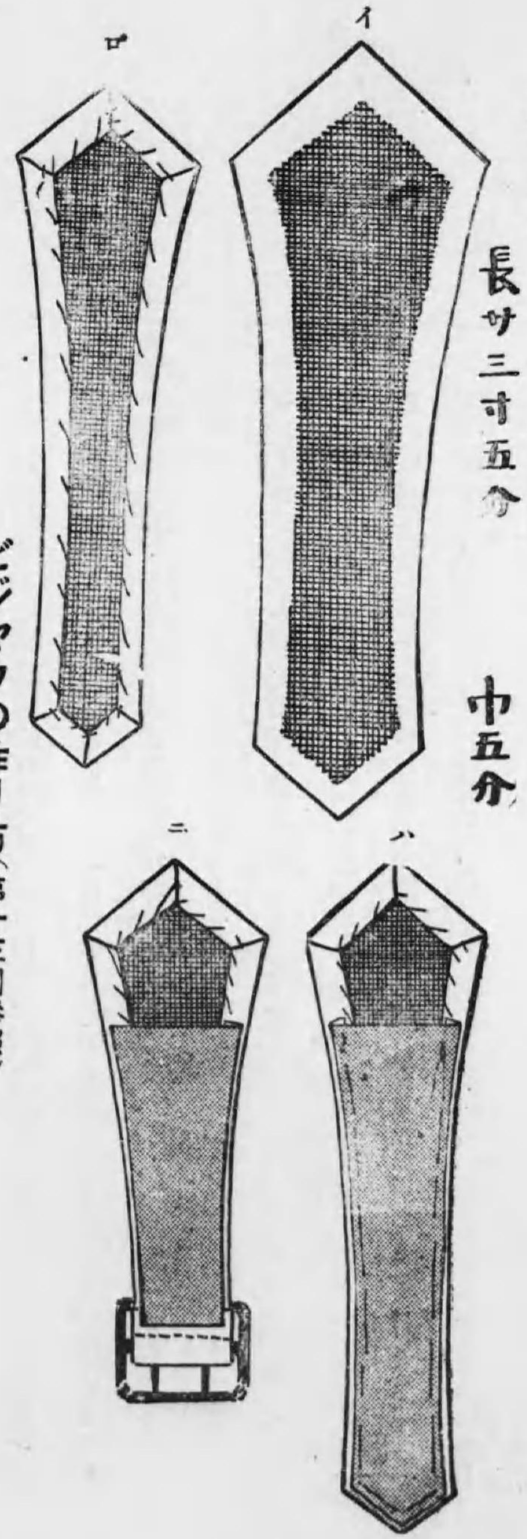
一　イの寸法に從ひて表地六本を斷ち切る事、

二　圖面にある點線の如く、一分の縫代を以て地縫をなす事、

三　地縫をなしたるものを割りて、引繰返し縫目を眞中にして仕上げをする。

靴ヅレは第三圖イに於けるが如く、後面の裾口へ縫付け、裾口の摺り切るゝを防ぐ爲めに付くるもので、長サは圖に從ひ巾は四五分位にして、下端を折り返し一分位の巾にして飾りミシンを掛くる。

第十三圖



ビジヤウの作り方（第十三圖參照）

ビジョウは第二圖へに於けるが如く、腰部を締める目的のために、用ゐるものであるから、表地、芯、裏等全部縦地を以て作り、ハを下前ニを上前に縫ひ付くる。

1 圖面イの容積ある縦地の芯に、水を引き二枚合せて熨斗をかけ。前の寸法と形に從ひ之を斷ち切る。

2 は圖面イの如く表地へ芯を付くる。

3 はロの如く周圍を折る。

4 は圖の如く周圍をからぐる。

5 はハに於けるが如く裏を付けて、仕付けを打つ事。

6 は金具を付けて後裏を付くる（金具は穴糸を以て丈夫に作る事）

7 は裏をマツリ付ける事。

8 は出來上りしものの、仕上をなす事。

ビジヨウを作るに要する切地は左の通り

表地　二枚
芯　二枚

裏地　二枚
金具　一箇

雨蓋と時計隠し裏の作り方（第十四圖及第十五圖參照）

雨蓋

雨蓋は第二圖トに於けるが如く。尻ガクシの上ベリに縫ひ附くるのである。

1 圖面イの寸法と形に從ひて、裏表を同じく斷ち切る事。

2 穴芯をつけ表を五厘ほどいざらせて、イセ氣味に仕付を打つ事。

3 一分弱の縫代に地縫をなす事。

4 仕付けを取去り地縫ミシンのキワより打り、引繰返して裏を五厘ほど內側へ引込めて、熨斗を掛ける事。

5 周圍の仕付を打ちて穴の印をする事。

穴の印はハナより四分引込め、大きサは五分とする。

時計隠し

6 はフチへ飾りミシンを細かくかける事。

7 は仕付を取りて仕上げをなす事。

時計ガクシは圖の如き寸法に、スレキと向切を斷ち切り、次に一枚の袋へ向切をミシンを以て付け、他の袋の上端を折りて、圖の如くミシン縫をする。

所要の切れ地

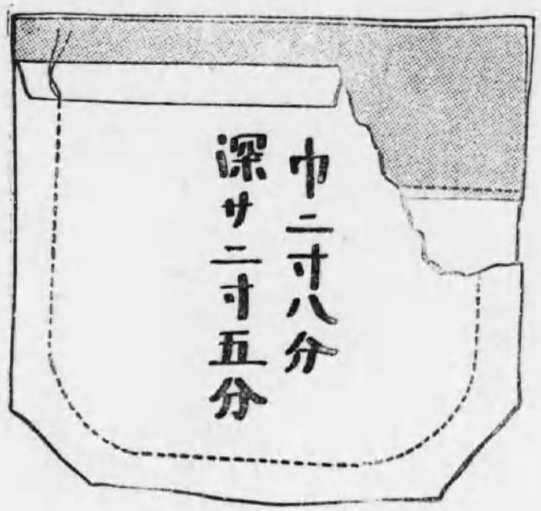
雨蓋を作るに必要なる切地

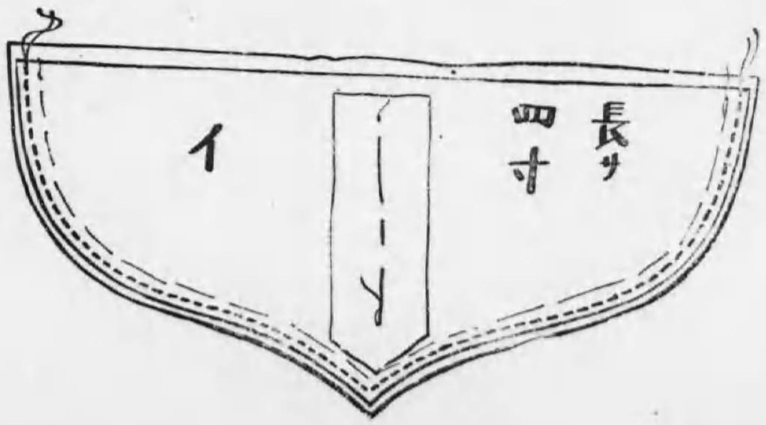
表地　二枚
裏地　二枚
穴芯　二枚

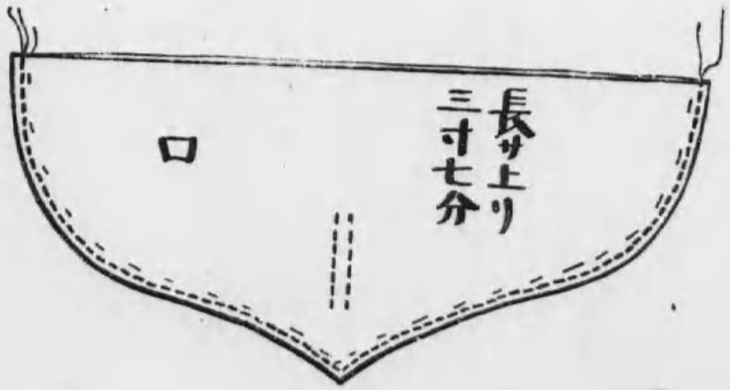
時計ガクシの切地

袋　二枚
向切　一枚

第十四圖及第十五圖







改良せる尻隠し袋の作り方（第十六圖參照）

尻隠シ袋

尻ガクシの袋は、第二圖及第三圖にて說明せるが如く、其形狀と深さ口の位置等に依り、腰を掛くる際臀部の骨に觸はりて絕へず不快を覺ゆると共に、其性質に於ても形狀の大なるを要せざるものである故、斯くの如き形狀に改良したのである、又從來の隱しの作り方は、袋を別に仕上げせずに隱シと袋を同時に作る爲に、非常に煩雜を極め時間を空費する恐れがあつた、其れ故私は此點を考へて、袋を別に前以て仕上して置く、斯ふなれば甚だ便利である。

袋だけ前に仕上げる

〔注意〕 此袋を作るには、口切の縫目が袋の內側へ出づる恐れが往々あるから、よく注意して圖面のやうに外側へ出づるやうにせよ。

外側に出るやうに

一 口切と袋に熨斗を掛ける事、

二 圖面の寸法に依りて、口切及び袋を裁合せ、口切を附くる方の袋は七分他よ

り短くせよ。

三　短き方の袋と口切とを、ミシンにて縫合せよ。

四　袋と口切の縫目の外側とを、中に入れ上端より八分下方より周圍を地縫せよ、

五　周圍を折つて引き繰り返し、圖面のやうに飾ミシンを掛ける。

縦隠しの形狀

縦隠くし袋の作り方（第十七圖參照）

、此袋はズボンのポケットの中にても最も重要なる位置を占めるものであるから、若しも其形狀や深さ等の工合が惡かつた時は、内部に入れたものが自然に出易いために折々紛失する憂あるにより、形狀、深さ等に注意して、第十七圖にあるやうに作るを可とする。又尻隠しの袋と同じく、ロに於けるが如く、出來上つた袋を以て、隠しを作る事を便利とする。

一　向切と袋に熨斗を掛け、次に圖面のイ寸法に依りて、袋及び向切を斷ち切る。

向ふ切を附ける

二　左側の點線に於けるが如く、口の切込の上下へ、平均に向切を付ける事、多物等の如き厚地の切地は、裁ち切りにてミシンを掛け、後に地縫糸を以て細かにからげる事、ホツレ安き薄地ものは折りてミシンを掛けること。

三　圖面の如く向切へミシンを掛ける事。

四　中央より折りて底部の地縫ミシンを掛ける（此地縫に圖面（ロ）の如く、端を五分明けて置く事）

五　地縫のミシンより折り引繰返し、（ロ）の如く飾ミシンを掛くる事、右のミシンをミシン止めを要せぬやう返し縫になし置く事。

所要の切地

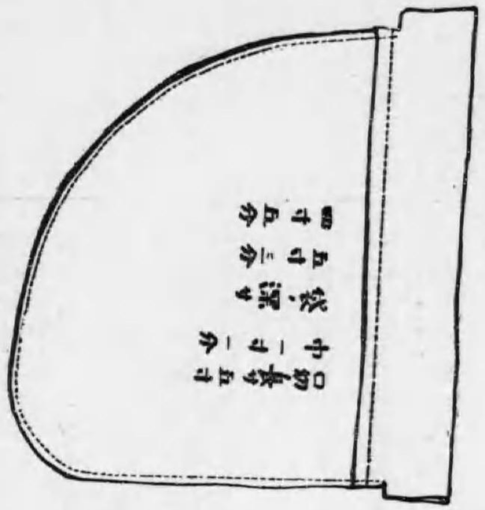
袋地　二枚

向切　二枚

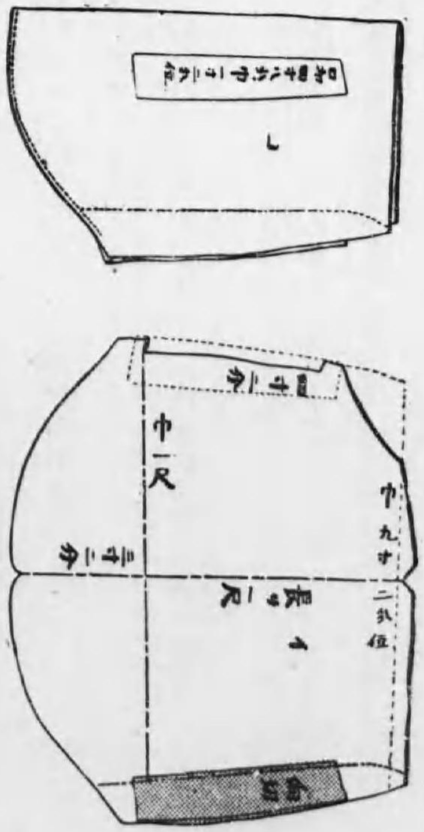
縦ガクシ袋（斷切）〔上巾九寸二分、下巾一尺、（長サ一尺の、内切込下三寸二分、

向切　（同　）巾一寸二分、長サ四寸八分、

第十六圖



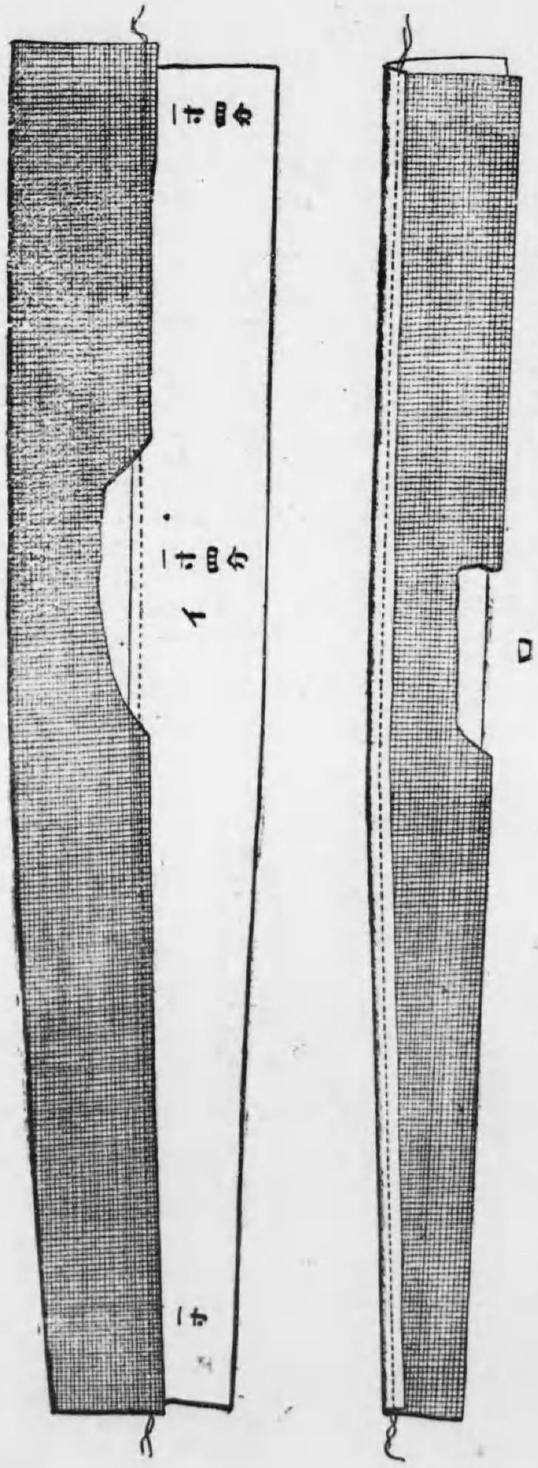
第十七圖



尻ガクシ袋（斷切）深さ（長）五寸三分（短）四寸五分、

口切　（同　）巾一寸一分、長サ五寸、

第十八圖



腰マクの作り方（第十八圖參照）

腰マク

腰マクの長サは腰の寸法の半分、則ち三十二吋なれば十八吋と言ふが如く、それに三四吋長くして、巾イ圖はに於けると同じく斷ち切り芯は表地より巾を三分廣く斷ち切る。

一　表地と芯へ熨斗を掛ける事。

二　圖面のやうに四分位に重ねて仕付を打つ。

三　表地の上端より一分内側へミシンを掛ける事。

四　圖面ロに於けるが如く、ミシンの際より折返す事。

所要の切れ地

表地腰マク　二枚

芯　二枚

新式天狗鼻の作り方（第十九圖參照）

天狗鼻は前ダテと相對して前開の働きを爲す爲めに、作られたるものにして、ズボンの脱ぎ穿きをするに當り、其都度必ず働きを受くるものなれば、前ダテと身頃、天狗鼻、此三者の合致をよくなすを以て第一とす、第二には丈夫にして又體裁もよく作ることを要す、猶も兩者は在來の作り方に依れば、芯を全部へ入るゝ爲めにあまり厚くなりて柔か味を失ひ、工合惡しき故かくの如き新式なる方法を案出したのである。

着脱に働を受ける

三者の合致

新式

斷ち合せ方と注意

天狗鼻及前ダテは、兎角左右の勝手を間違へて作る事間々あるに依り、初學者は此圖面を參考として、よく注意せられたい。

天狗鼻と前立の間違

イに於ける點線は、前ダテと天狗鼻を如何に裁ち合すべきかを、圖解せるものにて、兩者の身頃のナジミ具合をよく作る爲めに、股の切り込みの所に於て、四分の一吋左方に突き出して、彎曲を強く裁ち合すべきものとす、又之等の表附屬を裁ち

兩者のナジミ

合せる前に、必ず熨斗を掛けて、切地の狂を直すべきである。

一　右の説明に從ひて、上前を當にして點線の如く、兩者を裁ち合せ夫れと同時に、フック、穴、ボタンの位置及び股の切り込みの所に、切仕付を打つべし、フックの印は上端より、四分の一吋下位に打て、

上前を當てに裁ち合せる

二　圖面ロに於けるが如く、穴芯をあてる。

三　裏を裁ち合せてロ圖の如く、周圍に仕付を打つ。

四　下部より上部の切り込み迄、地縫ミシンを掛ける。

五　裏側より表の切仕付を當に、折返線の少し内側へ、ハ圖の如くボタン芯を付け、ロ圖の如く切り込みを入れる。

ボタン芯

六　裏の一番上の切込より、ハに於けるが如く裏側へ折返す、ハは圖解の都合に依りて、二番目の切り込みより折返したるものなれば、右やう注意ありたい。

裏側へ折返す

七　周圍の仕打を除き去り、地縫の際より折り、引繰返して裏を五厘位引退けて熨斗を掛ける。

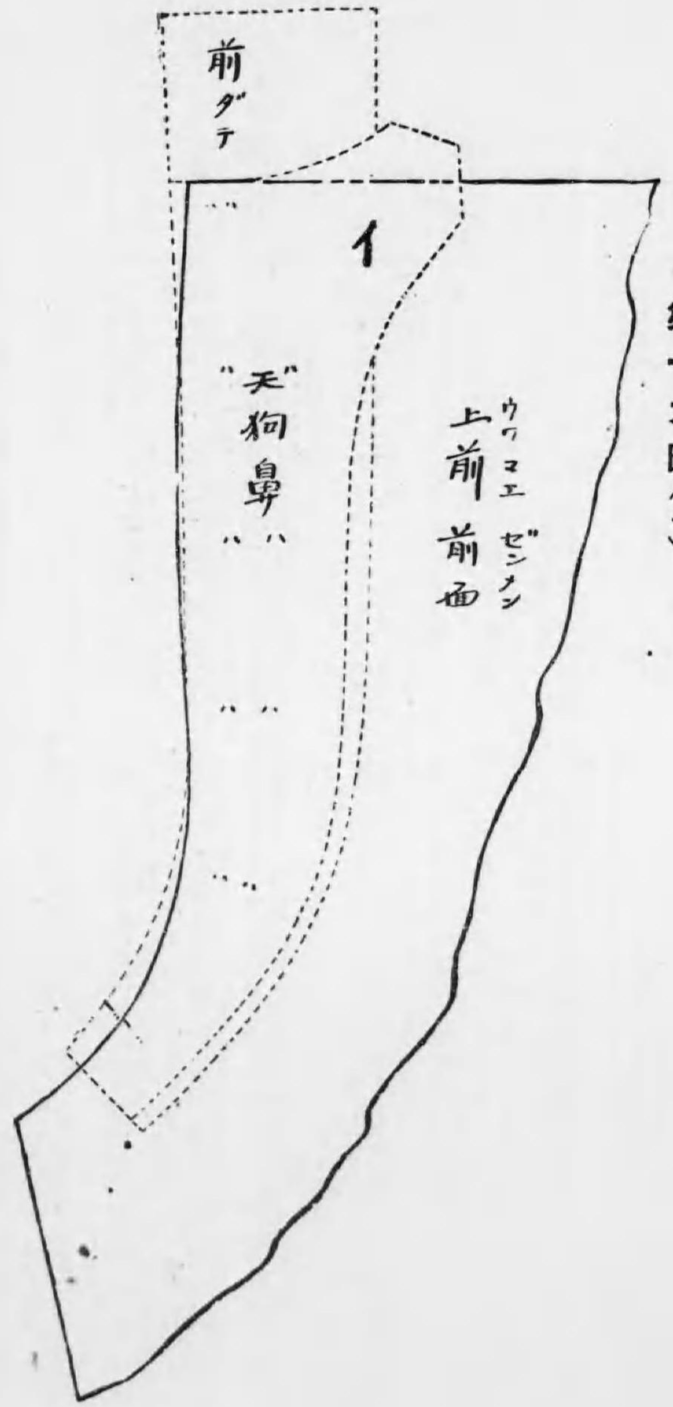
八　裏側より周圍へ仕打を打ち、裏の折返したる所へも、内側より仕付を打つ。

九　飾ミシンを掛けて、次に穴ミシンを掛ける。

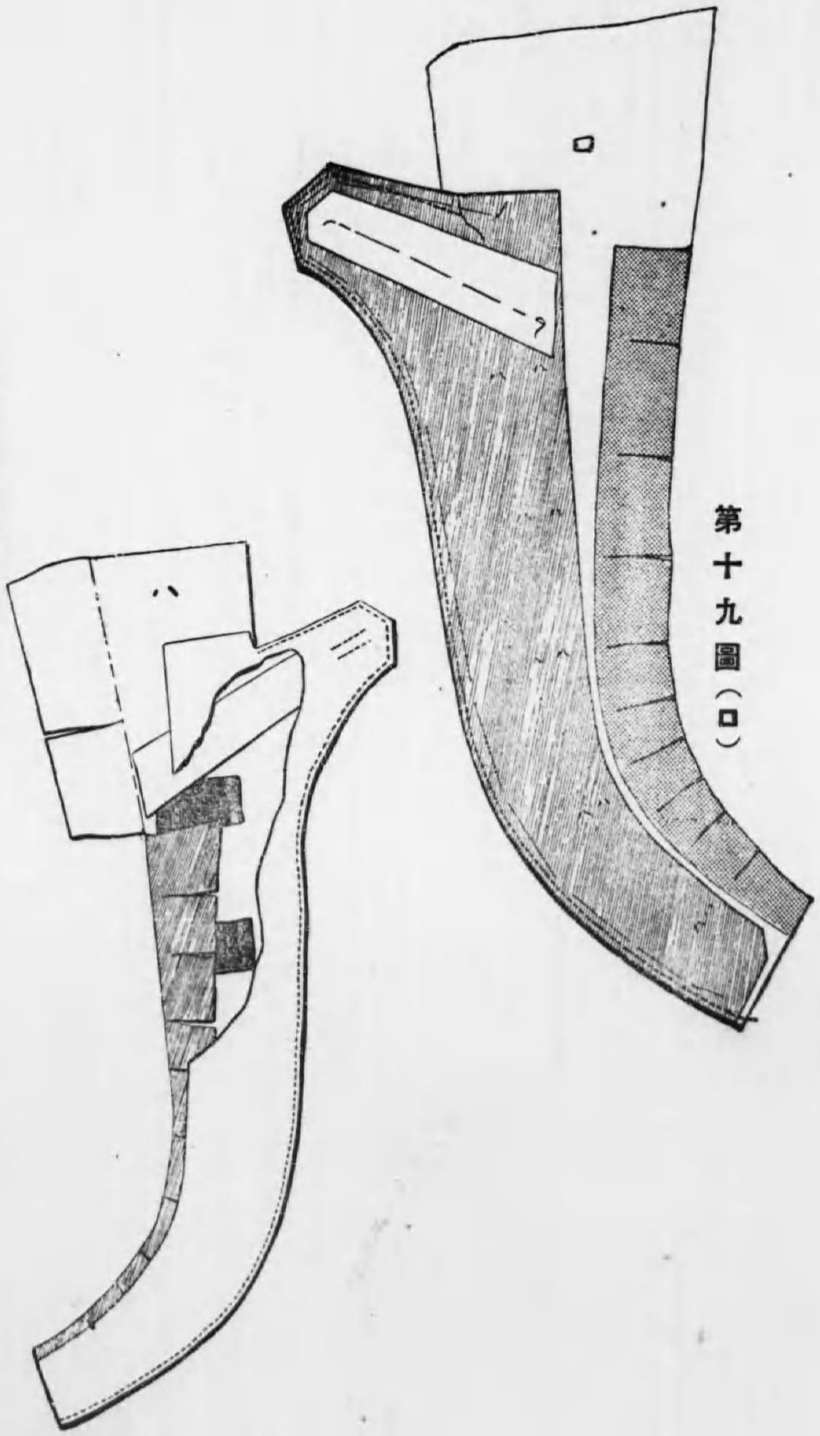
一〇　上の切り込みの所をミシン止めする、下端の、穴ミシンは際より切去る。

所要の布地

天狗鼻を作るに必要なる切地	一枚
表地天狗鼻	一枚
裏地同上	一枚
穴芯	四枚
ボタン當芯	



第十九圖（イ）

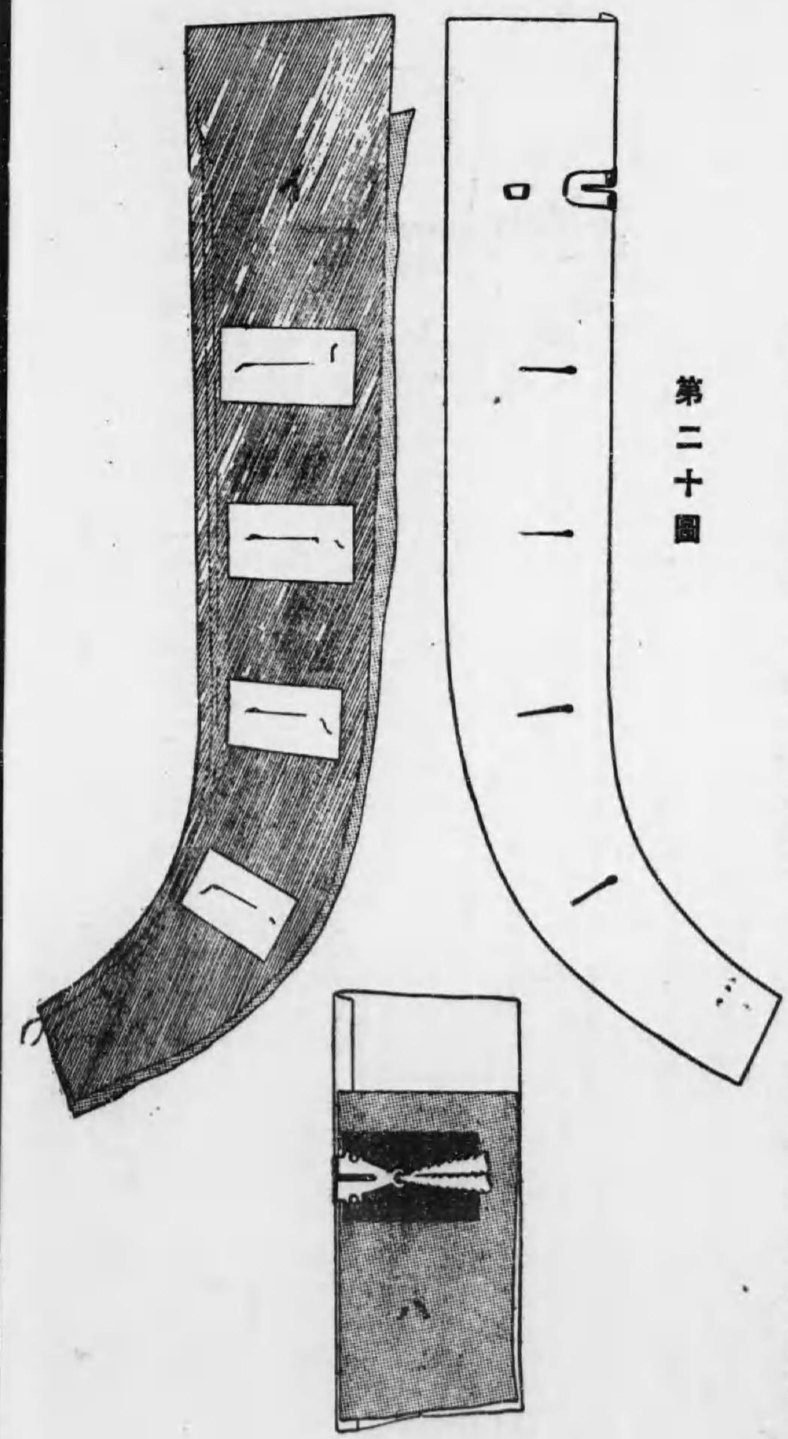


第十九圖（ロ）

新式前立の作り方（第二十圖參照）

前ダテの説明及び斷ち合せ方は前章に説きたる處と同様であるから茲所には之を

第二十圖



穴芯をつける

地縫ミシンをかける

フックを付ける

略す。

一　前章に於て天狗鼻を同時に斷ち合せたるものを、イの圖面に於ける如く、表の切仕付を當てにハナより二分五厘位内側へ穴芯を付ける。

二　裏を斷ち合せて、圖の如く仕付を打ち、裏側より地縫ミシンを掛ける。

三　仕付を取りミシンの際より折返し、引き繰り返して、裏を五厘位引退けて裏側より仕付を打つ。

四　裏の切仕付の所へ穴ミシンを掛けて次にミシン糸を切去り、雨蓋、天狗鼻、前ダテと云ふ順に穴をかかる。

五　前ダテの最後の穴をかがりたる後に、フックを付ける、フックを付けるには長サ二寸位のテープをフックの穴へ通し、又二寸位の芯を二重に折りて、圖解の如く、芯にテープと共に、表へ針足のあまり見えざる様に、穴糸を以て、丈夫に縫付ける。

所要切れ地

前ダテを作るに必要なる切地

表地前ダテ　一枚
裏、一枚は身頃用　二枚
穴芯、　四枚
テープ、　一本（フックの引張り用）
フック、　一個
フック當芯、　一枚
穴糸、一尺八寸位、　五本
同上、雨蓋、天狗用、三本

米國式腰裏の裁ち方及作り方（第二十一圖參照）

新式の腰裏

此處に掲げたる腰裏の作り方は、一見甚だ煩雑のやうに見ゆるが、實際に於ては案外容易にして、又縫上りの體裁も美しく、且つ落付の工合も良ければ、進んで此式に做はん事を望む。

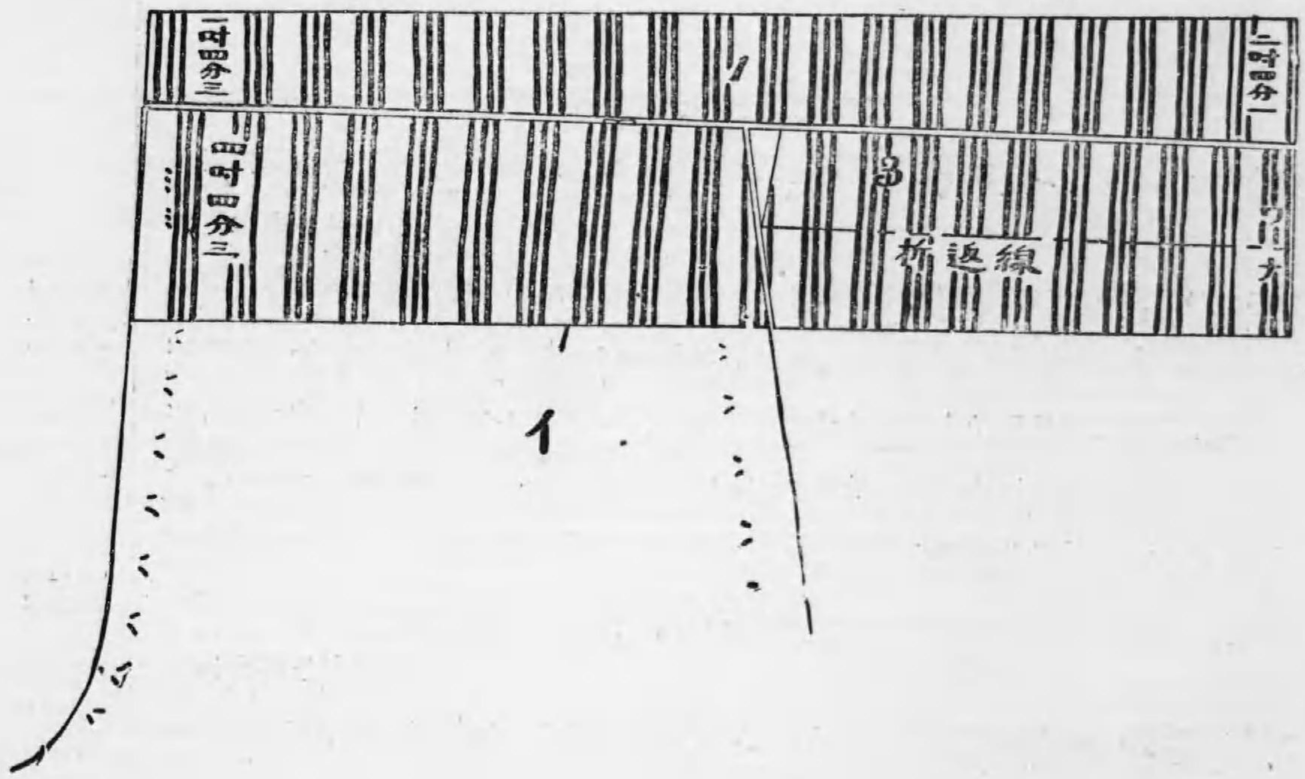
腰裏の付け方

腰裏を縫付くる時に當り、上前は第三十七圖に於けるが如く前端より上り一吋半位内側（前ダテのミシン）迄、下前の腰マクの端先迄付くるものとすれば、上前の裏は短かくして、下前は長く要するものとす、然しながら腰廻卅三吋以下は兩者同じ寸法に斷ち切りて、縫付くる時長き部分を切り去つて差支へなけれ共、夫れ以上の寸法には、上前を短く下前を長く切る必要がある。

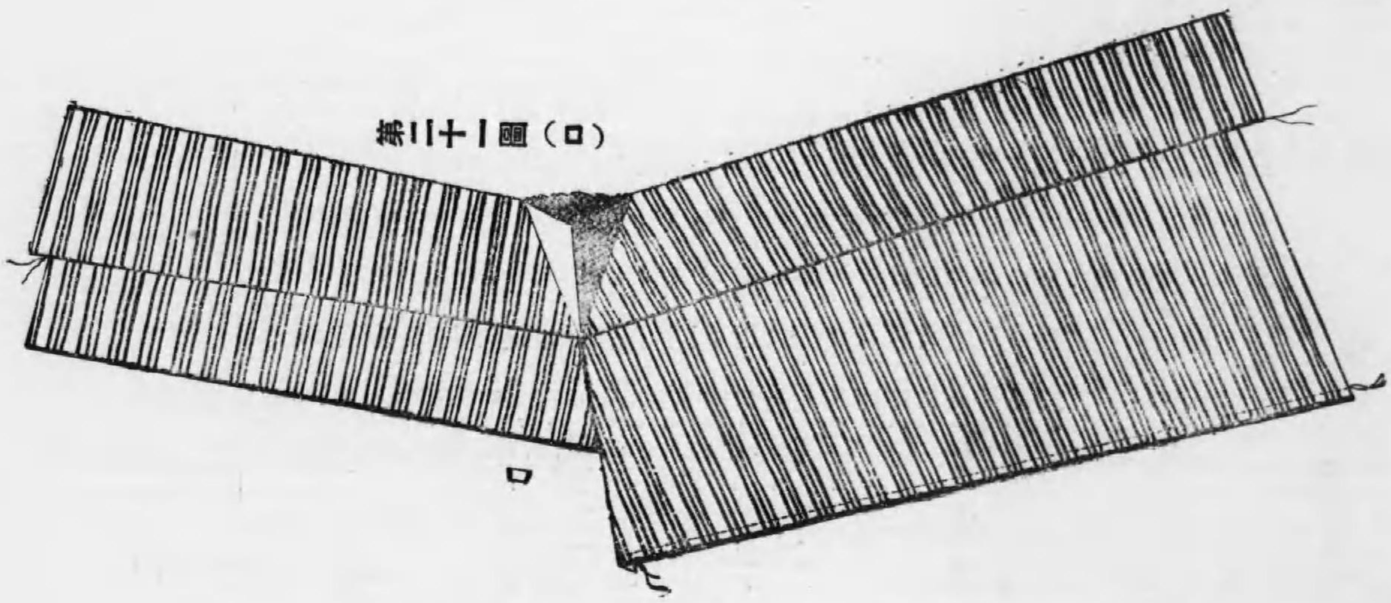
上前短く下前長くワナを開く

下前を長く作るには、1と3の右端なるワナを開き、腰部にあてゝ適當なる方法に、長短を定むる。

次に2の右端を二分折りて、ロに於けるが如く、3の上に重ねたる後、1を分せて地縫したるものを、ロの如く折返したるものである。



第二十一圖（イ）



第二十一圖（ロ）

腰裏の寸法

腰裏に要する寸尺

縞スレキ又は縞サテン巾廿一吋位、六吋、

耳を後にワナを前に

1はイの圖面に於ける寸法に從ひて、耳を後にワナを前にして斷ち切る。

2は後面の腰部に合せて、圖の如く斷ち合す。

3は折返線より折りて、白き參角形の部分を切り捨てゝ、1と3のワナを開き上前を短く下前を長く、前面に合せて裁ち合せる。

4はロの圖面に於けるが如く、2を二分折りて、3の上に重ねて1を合せ、ロ圖の如く地縫して次に折返す。

改良せる片玉緣尻隱し作り方（第二十二圖參照）

片玉緣とは尻がくしの口切れが下の部分にのみ現はれたるを謂ふ、現今にては一般に行はるゝに至りたるが、是は以外に手間を要せず且つ材料を多く要せざるが爲にして、私が多年の間經驗せる結果、改良に改良を加へしものなれば、初學者は勿論、既に技術に習熟した者でも、先入主を捨てゝ、此方法を採用さるれば利する處が多からう。

改良尻隱し

此隱しの位置は上端より三吋半內外、縦の縫目より一吋半位のを以て、通常と定め、口の寸法は五吋四分の三を以て、規定とする。

位置の規定

1はロホ圖に現はれたる癖の縫目を縫割る。

癖の縫目

2は隱しの位置を印して、腰芯を當て、仕付を打つ、腰芯はカクシ口より、一吋位下部迄とす。

腰芯を當てる

3はイ圖に於けるが如く、袋を下位に折り返し、口切れへ仕付を打ち、次に雨蓋へ仕付を打つ。

4は地縫ミシンを掛ける、此地縫をなすには、ミシンの掛け始めと終りを、ミシ

地縫ミシン

返し縫　ン止を要せぬやう、返し縫をなし置く事が肝要である。

切開き　5は**ロ**圖にして、4に於て地縫せるものを、仕付を取り去つて、裏側より圖面に倣ひて切り開く、下位の圖は口の切方を明了に見せんがためである。

切間違　此隱しを切る時には、切違ゐを爲ないやう、注意しなくてはならぬ。

袋を裏に引出す　6は**ハ**圖にして、5に於て、切開きたる口より、袋を裏に引出し、熨斗を以て、口切の縫目を割る。

口切に仕付　7は**ニ**圖にして、6に於て割りたる口切れを表側より、圖面の如く、仕付を打つ。

8は**ホ**圖にして7に於て仕付を打ちたるものを圖面に倣ひて、折返し、矢先より

落しミシン　縫目の眞中へ落しミシンを掛ける。

芯地を當てる　9は**ヘ**圖にして、**ニ**圖の兩端に現れ居る斷り込を、中へ入れ裏側より止めを入るべし、止めを入れるには、**チ**に於けるが如く、裏側へ芯地を當て、穴糸を以て丈夫に、又**ト**に於ける表面の、兩端角の如く、角を美しく作るのを肝要とする。

雨蓋の縫目　10は**ト**圖にして、9に於て兩端を止めたる後、雨蓋の縫目を圖の如く仕付を打つ。

11は**チ**圖にして、圖面の如く裏側より袋を仕付打つ。

飾りミシンをかける　12は**リ**に於けるが如く表より雨蓋の縫目の縁へ細く飾ミシンを掛ける、此ミシンの始と終に於て、止めを入れたる兩端の縁へ、外部に現はれぬやうに、落しミシンにて二三回返し縫を爲し、次にミシン糸を切去り、表の仕付を取り去れ。

表側より仕付　斯くの如くして出來上りたる後に袋の底部へ、表側より仕付を打つ事を、必ず忘れてはならぬ、然らざれば、袋の底部が彼方此方に動く爲めに他の部分にミシンを掛ける際、袋を共に綴ち付くる恐れがある。

兩玉緣尻隱し作り方　（第二十三圖參照）

兩玉緣尻隱し　兩玉緣とは尻がくしの口切れが下の部分と上の部分に現はれたるを謂ふ、第二十三圖の**ヘ**に於ける如き體裁に仕上るなり、袋の大きさ及び口の大きさは第二十三圖

辮の縫目

腰芯

二重に地縫

に於けると同一なり。

1は第二十二圖ロホ圖に現はれたる辮の縫目を縫割る。

2はかくしの位置を印して腰芯を當て仕付を打つ、腰芯はかくし口より一吋位下部迄とす。

3は第二十三圖のイに於けるが如く袋を下位に折返し、圖の如く口切れの上下に二本仕付を打つ。

4はイ圖に於ける如く二分位の巾に二重に地縫をなす、此地縫を爲すにはミシンの掛け始めと掛け終りをミシン止めを要せぬ樣に返し縫に爲し置くべし。

5はイ圖の如くミシンの中央より口切れを切りロ圖に於ける如く裏面を切る。

6は切りたる口切れの縫目を熨斗にて割りハに於ける如く上端と下端に仕付を打つ。

7ロの兩端へ熨斗を掛ける。

8ロの下端へ落しミシンを掛ける。

9表側より袋の底部へ仕付を打つ。

10袋と上端の間へ雨蓋を挿み込みて仕付を打つ。

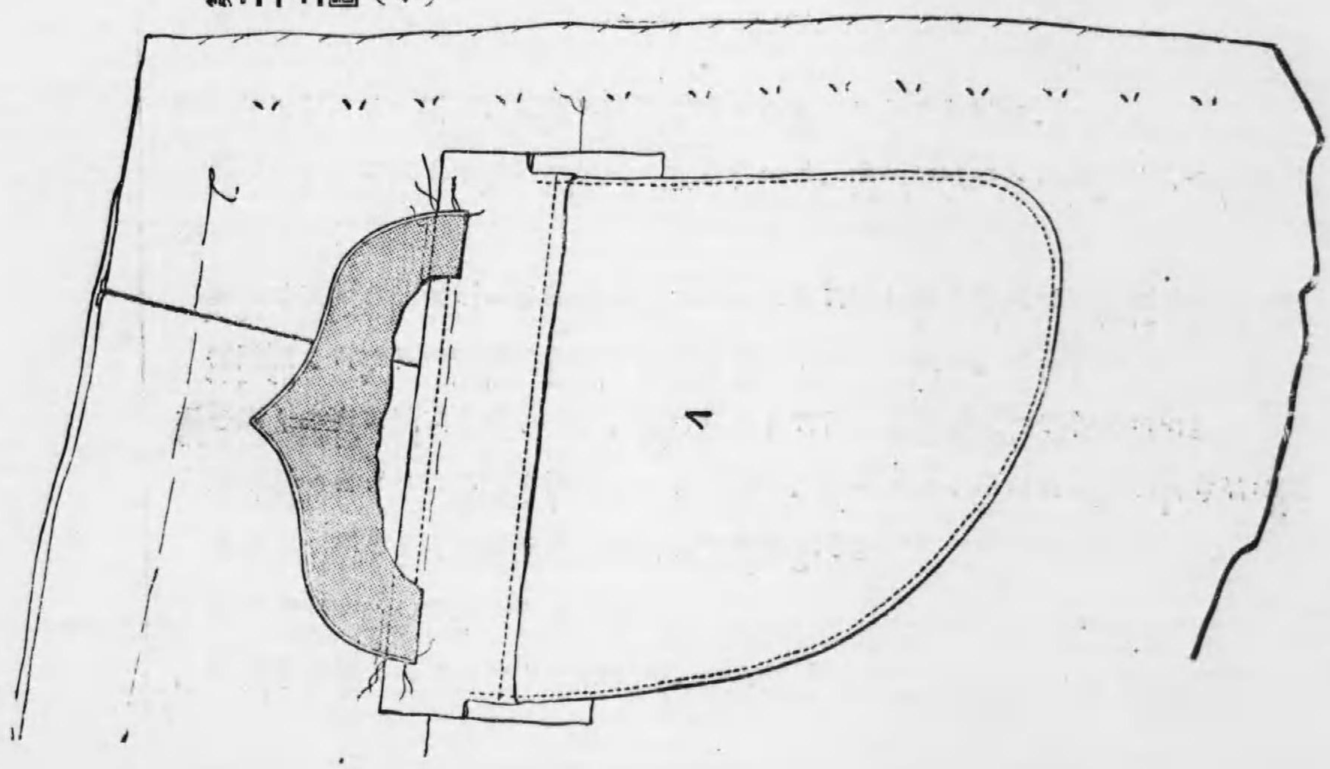
11上端とカクシの兩端へ落しミシンを掛る、此ミシンを掛るには止を入れたる兩端の緣へ外部に現はれぬやうに、落しミシンにて三四回縫返しをすること。

尙圖面ハに於ける點線は雨蓋の恰好を示したるものなり。

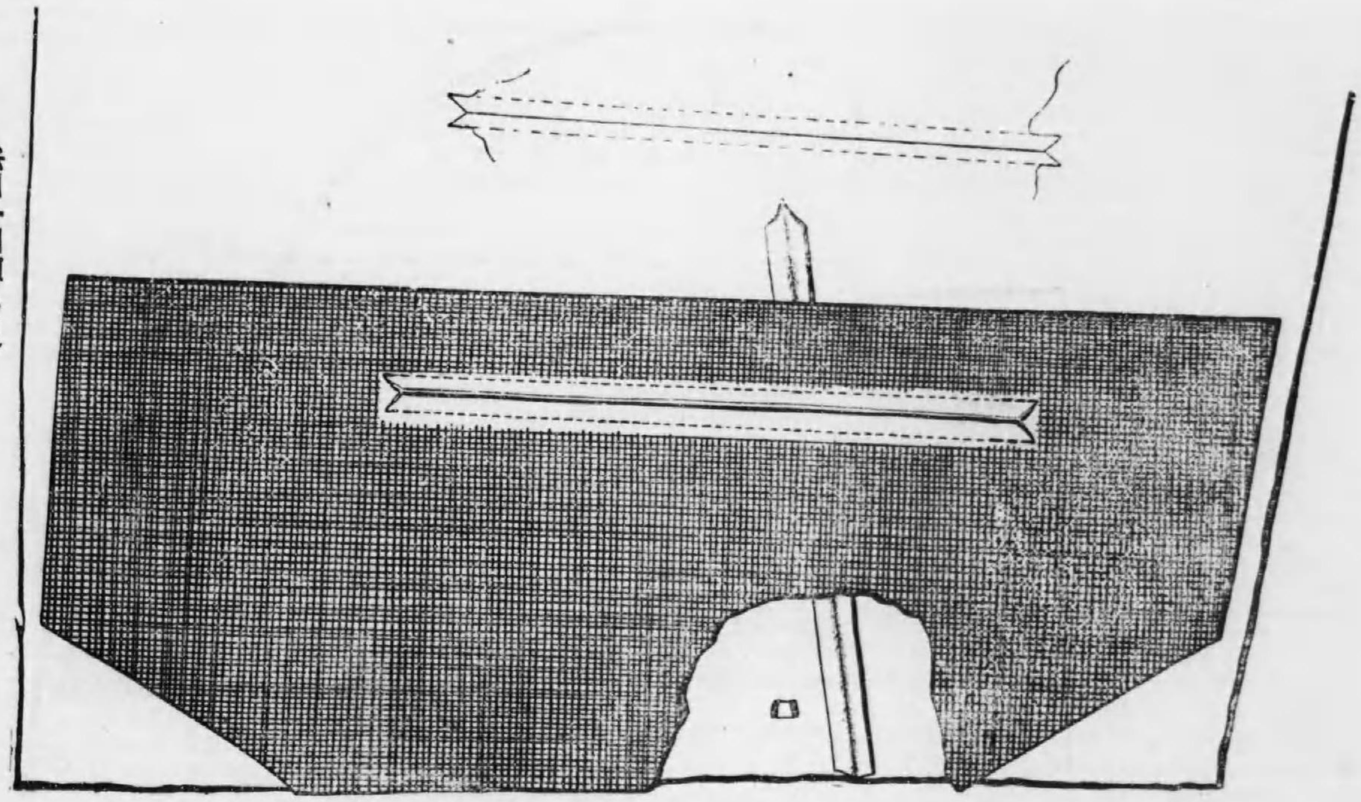
圖面ハは隱の出來上りの體裁を現したるものにして袋の中にある雨蓋の恰好を點線に於て示す、

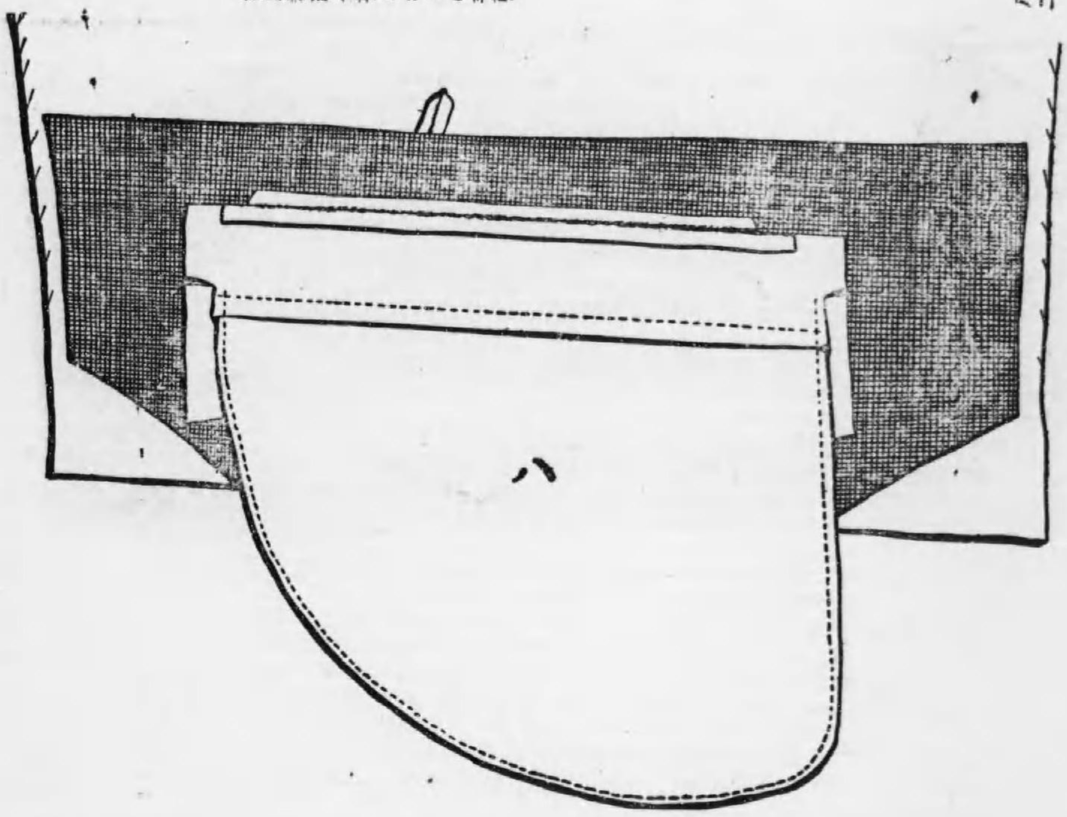
尙袋の兩端に穴糸を以て止を入れねばならぬ、此止を入るゝには成るべく表面に現さず丈夫になし終りに周圍を圖面の點々の如くなすのである、

第二十二圖（イ）

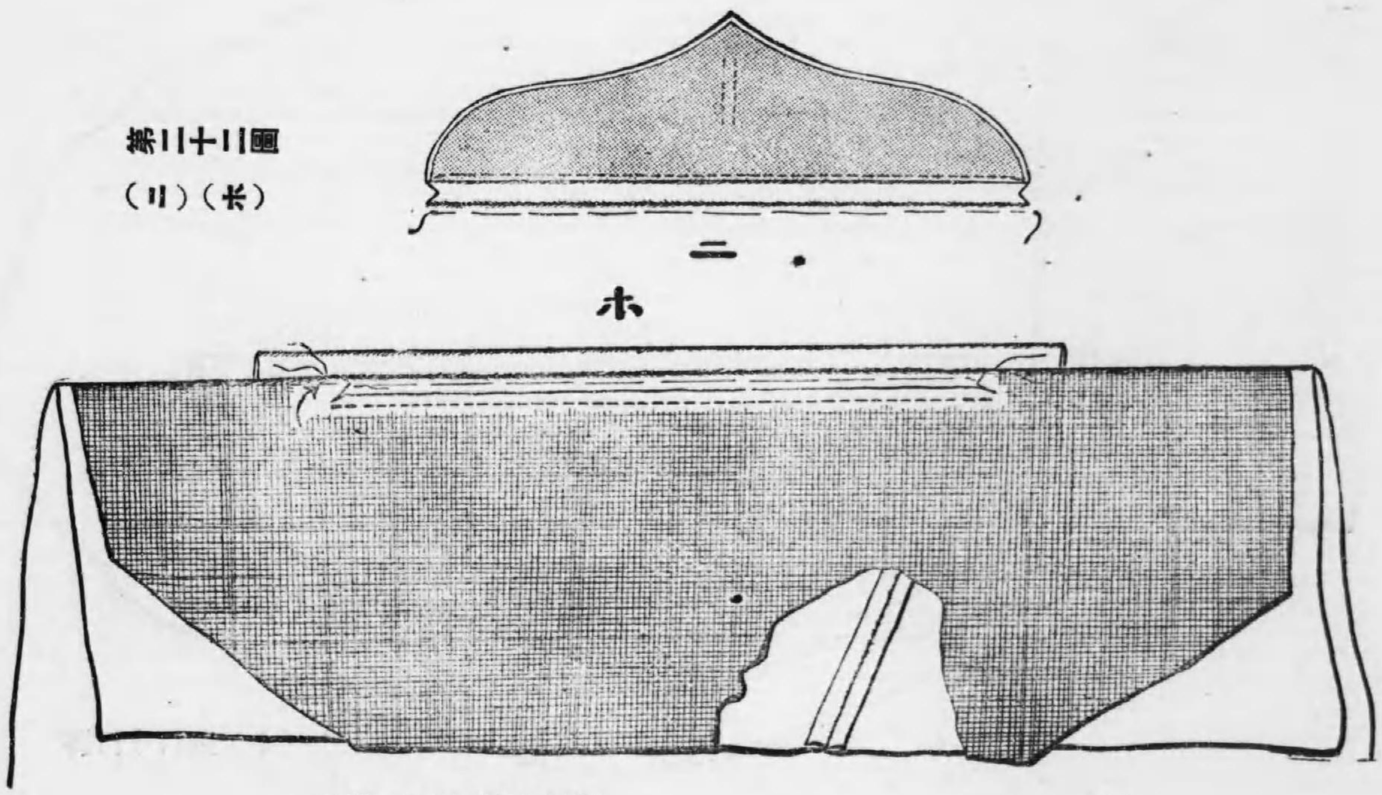


第二十二圖（ロ）



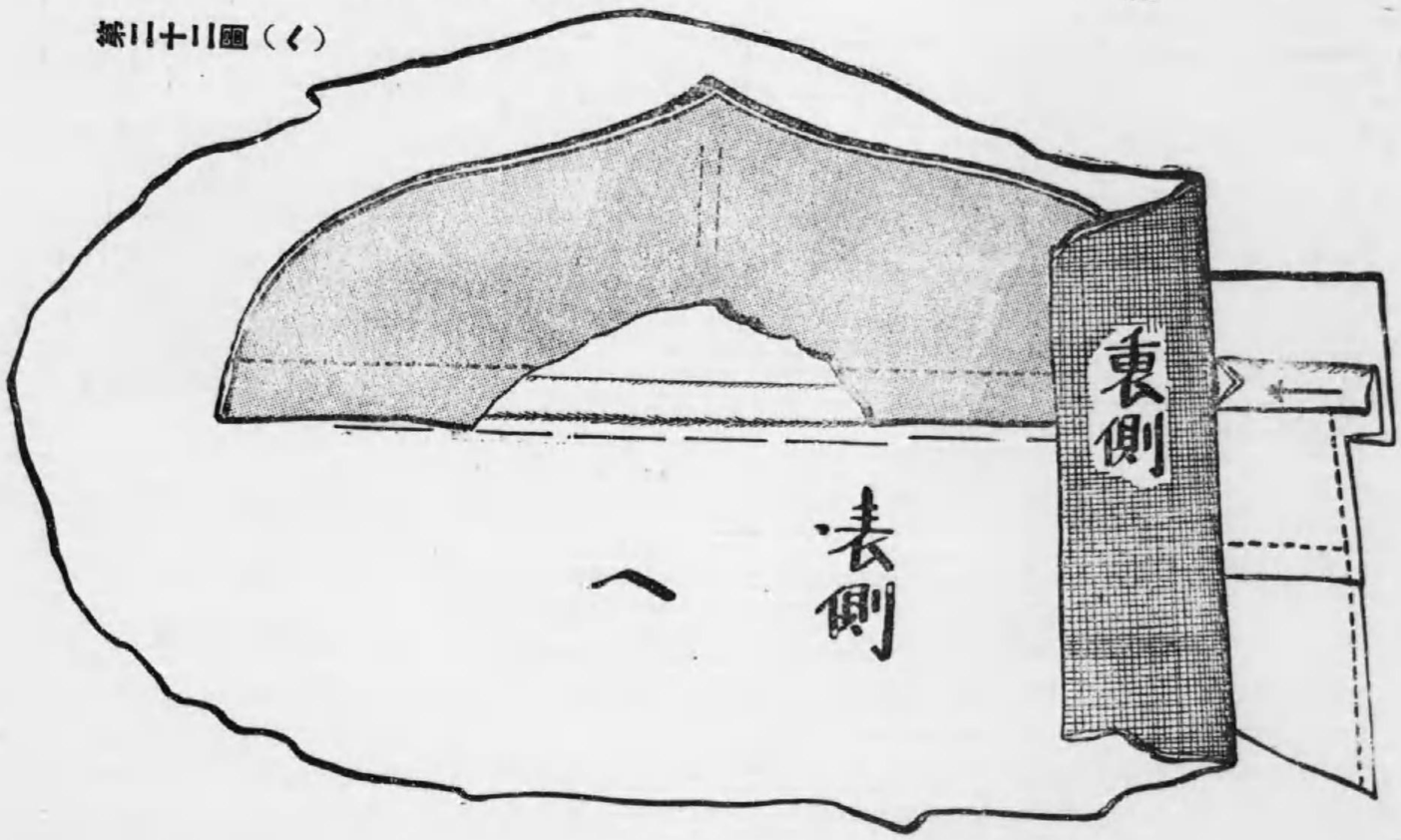


第二十二圖（ハ）

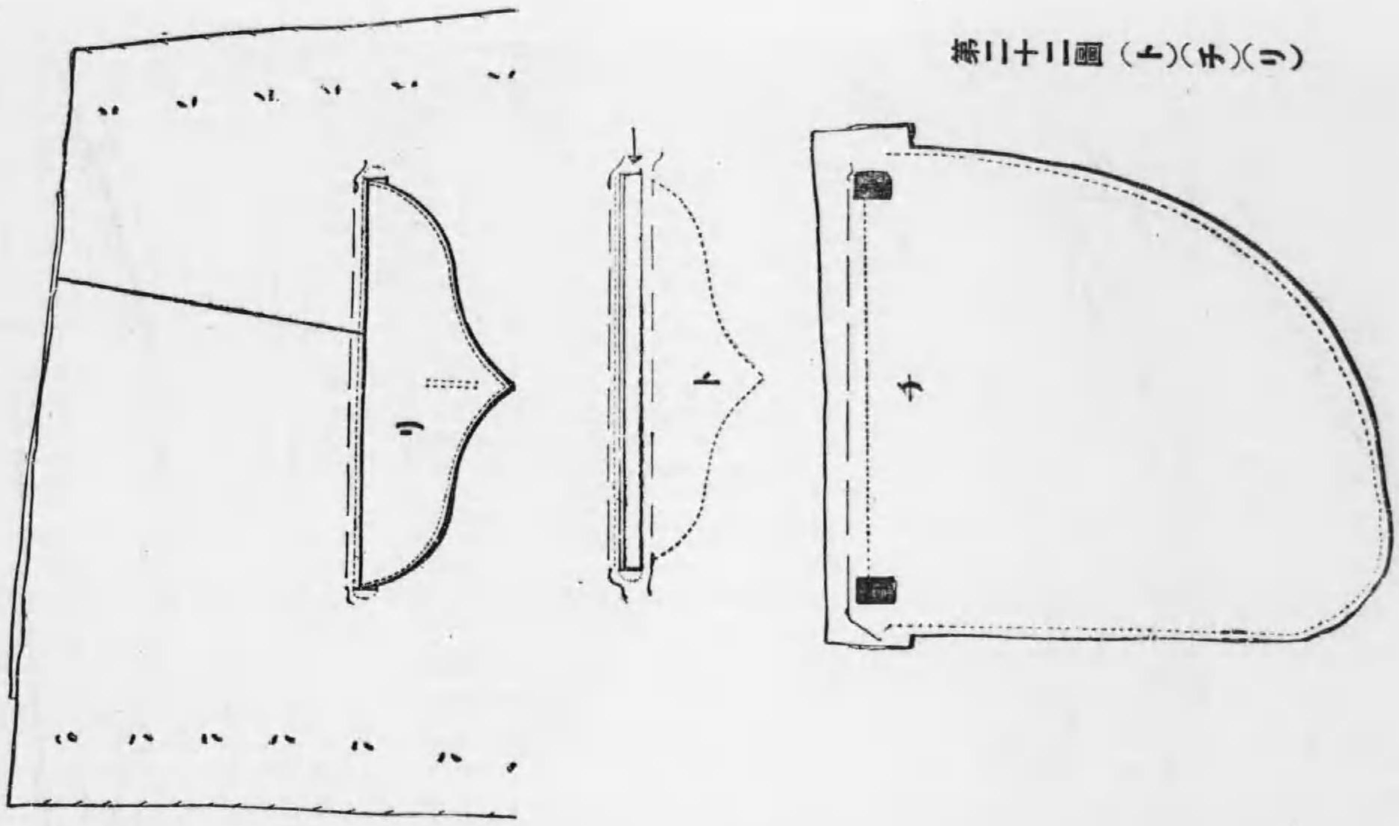


第二十三圖
（ホ）（ニ）

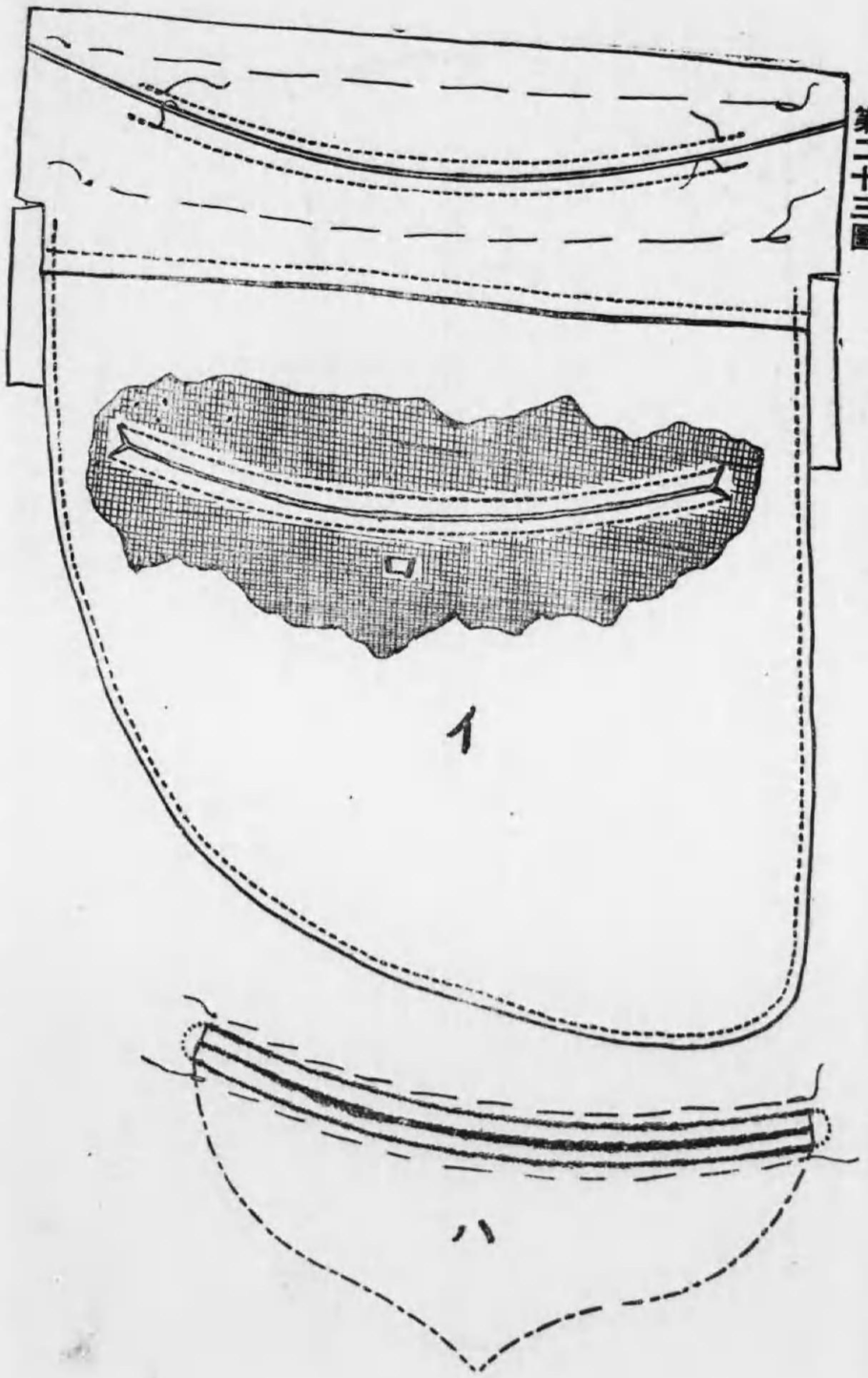
第二十二圖（ヘ）



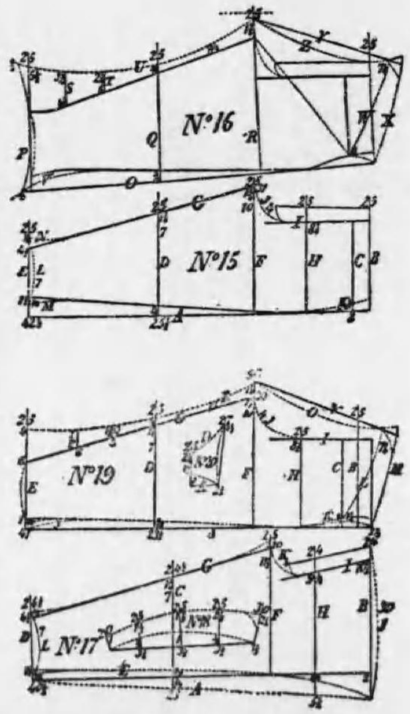
第二十三圖（リ）（ト）（チ）



第二十三圖



（番外挿圖）



千八百四十六年に於ける、米國人フランシス、マハン氏の製作に係る其當時流行を極めたるズボン作圖（參考迄に此處に掲載す）

第四章　ズボン製作順序

製作順序第一

裁ち合せに就ての注意

裁ち合せとはズボン製作に付て、必要なる附屬品、裏、芯、ボタン、フック、ビジョウ、テープ等に至る迄全部を裁ち合せ、一切漏れなく取揃へて、製作に取掛る

全體の注意

動作經濟

最小の動作

最大の仕事

一切を爲す

準備を充分に整へて置かなくてはいけぬ、若しも一端仕事に取掛つた上で、ボタンが一個不足とか、寸法書が見へぬとか、云ふやうな不行屆のなきやう、能く注意して、仕事の順序が滯りなく進行するやう、物を極りよくして置く事が第一の要件で全體に亘つて細心の注意を要する。

裁ち合せに就て、私として特に注意致し度い事は動作經濟の事にて、之れは我々が毎日仕事をなす上に於てのみならず、日常一般に注意を要する事なので、一口に云ひ現はせば、最少の動作を以て、最大の仕事をなすといふ事である、又仕事の上に就て之を言へば、裁ち合せは、鋏、チョーク、尺度、熨斗等を以てする一動作なれば、此動作に於て最大の結果を得るには、如何になすべきか、それは芯地を裁つ時には、腰芯、ボタンの當芯、隱しの當芯、フックの當芯等、同じ動作によりてなる仕事を、漏れなく一切なすのである、是れを若し舊來の如く、其時々の必要に應じて或は芯を切り、又は何をするといふ如く同じ動作を何回と繰返す計りでなく、

ミシン掛の例

ミシン一ケ所の失念

動作の不經濟

裁ち合せ

裁ち合せ品の整理法

或は芯を探すとか、スレキの屑を探す等無用なる時間を徒費するから不可ないのである、又ミシンを掛ける上に就て云へば、假にズボンの第一回のミシンに於て掛くる箇所を二拾ケ所とする、然るに若し不注意にして其中の一ケ所を忘れたなら、其れがために蒙るところの影響は甚大なるものである、そは若し右の忘れたるケ所のミシンを見出したる際、若し他の人がミシンを用ひてゐたとしたならば、其人が掛け終る迄空しく待つてゐなくてはならぬ、斯樣なる時間の空費、動作の不經濟は仕事の順序に多大なる損失を及ぼすものであるから、裁ち合せをなす時には細心に注意して、斯やうな不經濟の動作を仕ないやうに、心掛けて欲しいものである。

裁ち合せとは前述の如く複雜なるものにて、廿種類に於ても卅幾種類と云ふ多數なるものであるから、到底初學者には頭に入るゝ事のみにても、困難なる仕事である、されば大體の裁ち合せの順序と、裁ち合せしものを整理すべき表とを、左に掲げて置いたから、此表に依つて習ふ事を便利とする、之を熟讀して實行すれば煩雜

羅針盤

なる仕事も、秩序よく行はれ時間の經濟の點よりも、仕事の能率の上よりも、一擧兩得と言ふものなれば、之を羅針盤となして、進む事を最も切望する。

附記　ズボン裁縫をなす人は裁縫用として一尺五寸角位の風呂敷を一枚用意すべし。

裁ち合せ方

着手前の用意

一　ズボンに取掛るに當つて、注意すべき點は寸法書の事である、次に附屬品細別表中のボタン類並びに裏附屬の寸尺に依りて、必要品の有無を確かむるものとす。

二　前後兩面に切仕付を打ち、表附屬を取るべき小切には必ず熨斗をかけて地質の狂ひを直す事、並にスレキ、芯、袋等の皺の寄つたものがあれば、全部に熨斗をあてる事、次に左の表の番號順によりて表附屬十種類の斷ち合せを行ふ。

スレキの裁ち合せ

三　スレキの裁ち合せ（裏類を含む）を行ふ、此裁ち合せは左の表中の下位に記せるスレキ全部裁ち合す。

芯地

四　芯地の斷ち合せを行ふ、左の表中の下位に記せる芯地を全部裁ち合す。

袋地

五　袋地の裁ち合せを行ふ、表の通り、

腰裏

六　腰裏の裁ち合せを行ふ、表の通り、

膝裏

七　膝裏の裁ち合せを行ふ、表の通り、

裁ち合せ品の整理

此裁ち合せ品の整理は細かきもの多き爲め、不秩序になり易き恐れあれば、左の番號順に從つて、袋の上へ上へと重ね置き、細かきものを中に包み込むやうにして散らばらぬやうになしおく事が肝要である。

散亂せぬやうにせよ

裁ち合せ品の整理表

1 腰マク……（表地）二枚（腰芯　二枚（芯　地）／ボタン芯　六枚（芯　地））
　　（裏　一枚（スレキ））

2 天狗鼻……（表地）一枚（穴芯　一枚（スレキ）／ボタン芯　四枚（芯　地）／フック當芯　一枚（芯　地））
　　（裏　二枚（スレキ））

3 前ダテ……（表地）一枚（穴芯　四枚（スレキ）／フック當芯　一枚（芯　地））
　　（テープ　二本）

4 縦ガクシ向切……（表地）二枚（袋　二枚（袋　地）／テープ　二本）

5 尻ガクシ口切……（表地）二枚（袋　四枚（袋　地）／袋當芯　四枚（芯　地））
　　（腰芯　二枚）

6 ビジョウ……（表地）二枚（裏　二枚（スレキ）／芯　二枚（芯　地））

7 兩蓋……（表地）二枚（裏　二枚（スレキ）／穴芯　二枚（スレキ））

8 時計ガクシ向切……（表地）一枚（袋　二枚（スレキ））

9 靴ズレ……（表地）二枚

10 ベルトホルダー……（表地）六本

11 腰裏……二枚

12 後シック……（スレキ）二枚

13 前シック……（スレキ）二枚

14 膝裏……二枚

縦隠しの袋へ

一　縦隠しの袋へ向ふ切れをつけて、仕付けを打ち二枚合せて袋を擴げをく事。

尻隠しの短かき袋

二　尻ガクシの短き方の袋へ、口切れをつけて他の長き方の、袋を重ねそれを一の上にのせる事。

腰マクへ芯

三　腰マクへ芯を附けて、裏と合せ周圍へ仕付を打ち、前の袋の上へ重ねをく事。

天狗鼻は穴芯

四　天狗鼻は穴芯をつけて、裏を合せ周圍へ仕付を打つ事。

前立へ穴芯

五　前ダテへ穴芯をつけて、裏と合せハナへ仕付を打つ事。

雨蓋へ穴芯

六　雨蓋へ穴芯をつけ、裏と合せて周圍へ仕付を打ち四の上に重ねをく事。

時計隠しへ向ふ切

七　時計ガクシに向ふ切れをつけ、仕付を打ち他の一枚の袋を合せて、底に仕付を打つ事、（これは重ねるに及ばず）

ビジョウへ芯

八　ビジョウへ芯をつけて、裏より仕付を打つ事、（これにて仕付は終了す）、シツケを打ちたるビジョウの周圍を折りて、別に置く、（これは重ぬるに及ばず）

時計隠しの袋

九　時計隠しの袋の上端を二分折り、靴ズレ、腰裏等の下の部分をも、前と同じく二分折り、右の三種に、ベルトホルダーを加へ、都合四種を前の袋の上に順次重ねる事。

ビジョウの周圍膝裏にて包む

一〇　ビジョウの周圍を芯にからげつける事。

一一　テープ、ボタンの當芯、シック寸法書等は不秩序になり易きに依り、膝裏にて包み置く事。

前後面瓣取

一二　前後面全部の瓣取を成す事。

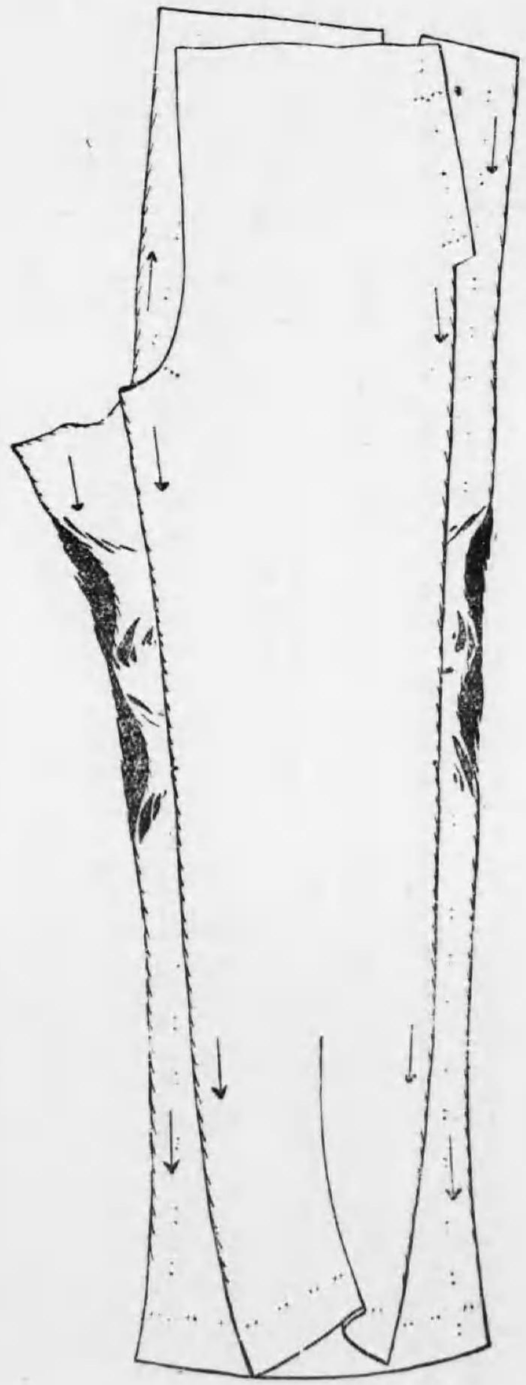
前後面のからげ縫

一三　前後面全部のカラゲ縫をなし、後面の瓣の縫目へ仕付を打つ事。

之れにて第一回のミシンの下拵は終了した、されば當座不用の品則ち前面、及び前述の膝裏にて包み置きしもの全部、裁ち合せの殘り切等を前の風呂敷にて包み置く事。

廻りのカラゲ縫に就て

第二十四圖



我國にては仕上げた後にカラゲ縫をするやうに成つてるが、

我國では仕上げた後にカラゲ縫は米國ではカラゲ縫が先

仕事も時間も經濟

是れは何ふいふ譯で跡でするやうになつたのか、其理由は解らぬが米國では大概製作に取り掛かる前に、全部のカラゲをする事に爲つてゐる、又其方法も我國のとは異つてゐる、日本で一般に爲るやうに一針一針ではなく、グシ縫をするやうな調子に數針連續してするから、可成り細かくしてもその割合に手間がかゝらない譯である、又仕事の順序から云つても誠に都合よく、時間の點から考へても此方法の方が遙に經濟になる、然し長い間の習慣を破るといふ事は中々難いもので、今迄跡でしたものを先きに爲るといふ事は、何だかそれだけ餘計な手間をかけるやうに思はれるが、どうせ一度は是非斯ふなくてはならないから、始めに左樣して置いた方が何れだけ利益だか知れぬ、故に今後は是非始めに斯ふ爲て置いて、少しでも仕事の能率を擧げるやうにしなければならぬ、之れをカラゲルには左の方法に依る。

からげる方法

ほつれを切る

一　切れ地の廻りのホツレて居る所を全部切る。

二　圖面矢の如く表裏の別なく全部据口の方へ向けてカラゲル事、若し逆にする時は切れ地が綻れて、甚しくカラゲ難くなる、カラゲの糸は出來るだけ緩くする事。

三　尻の部分は前と反對に、下より上に向けてカラゲル事。

据口の方へ向けてからげる

製作順序第二

ミシン掛第一

一　後面クセの地縫。

二　ベルトホルダーの地縫。

三　ビジョウの飾ミシンを掛ける事。

四　時計ガクシ向切のミシンを掛ける事。

五　雨蓋の地縫。

六　前ダテの地縫。

製作順序第二

七　天狗鼻の地縫。

八　腰マクの地縫。

九　尻ガクシ口切の地縫。

一〇　縦ガクシ向切の地縫。

一一　腰裏の地縫。

以上の中二より十一迄は連續的にミシンを掛ける事（一つ一つ別々に糸を切って居ては、手間が掛かるのみならず糸も大變に無駄になる故、是非糸を切らずに連續して掛けるやうにする。

ミシンを連續的に

一二　縦ガクシと尻ガクシの底部を地縫する事。

製作順序第三

一　雨蓋、前ダテ、天狗鼻、腰マク、袋等の仕付を取り除く事。

製作順序第三

二　縦ガクシ袋及び尻ガクシ袋を折りて、引繰返し尚表面より熨斗を掛ける事。

三　ベルトホルダー、腰マク及び腰裏を仕上げて、皺にならぬやう風呂敷に包み置く事。

四　天狗鼻、前ダテ、雨蓋へ熨斗を掛けて引繰返し、次に廻りへ仕付を打ち穴印をなし置く事。

穴印

製作順序第四

ミシン掛第二

製作順序第四

一　雨蓋、天狗鼻、袋の底部へ飾ミシンを掛ける事（前の如く連續してミシンを掛ける事、縦ガクシの袋は飾ミシンの後先を五分位返し、ミシンを掛ける、返し縫の時には何所でもミシンが並んで掛らぬやうに、必ずミシンの上に重ねて掛ける事）

飾ミシン

返し縫

二　前ダテ、天狗鼻、雨蓋へ穴ミシンを掛ける事、（前ダテの端へは飾ミシンを掛けぬ事、何故なれば若し飾ミシンを掛けると、前の天狗鼻と前ダテの章で説明したやうに、あまり硬くなつて工合悪しき故掛けぬ事）

ミシンを掛ける

製作順序第五

製作順序第五　第二十二圖及第二十五圖參照

一　前の所にてミシンを掛けたる物の、仕付を取り除きてミシン止をなす、（穴ミシンはミシン止の必要なき故、根元より切り去る事、）

二　前ダテ、天狗鼻、雨蓋の穴を明け穴糸の用意をなすべし。

三　穴カガリは雨蓋、天狗鼻、前ダテといふ順序にてカガリ、穴の終りに前ダテのフツク、ビジョウ金を付ける事。

穴かがり

四　雨蓋を除き他の物は一時風呂敷に包み置く事、ビジョウの裏付等はミシンの合間に成すべく心掛ける事。

五　（第二十二圖を參照せよ）尻ガクシの位置を定め、腰芯を附け、雨蓋と袋の口

第二十二圖參照（片玉縁尻隠し作り方）

第二十五圖參照

切とを、右の位置にあて仕付を打つ、以下は上前の方から仕事に取掛る事。

以下六より一一まで第二十五圖を參照せよ。

六　前シックを附ける事。

七　圖面の如く膝の切込を中心として、膝裏を附ける事。

縮せ込む

八　袋の切込と隠しの兩端の切仕付を合せて袋を附け、仕付を打ち次に假縫圖イ

表地へ切込を入れ

の圖面に於ける説明の如く、熨斗を以て四分の一吋縮込みて、テープを入れる。

九　本圖面の如く表地へ切込を入れ折返じて仕付を打つ、尚又折返した切の奥を止める爲めに、表地へ通さぬやうに袋へ通して仕付を打つ、次に熨斗切を當てて熨斗を掛ける。

前立裏を付けて

一〇　はハと同じく假縫圖の説明に從ひて、テープを入れ熨斗を掛ける。

一一　前ダテ裏を付けて仕付を打つ、（此裏を付けるには、天狗鼻と前ダテの斷ち合せに於て説明した通り、奥を緩くするために彎曲を強くしたるものを表に合せて付ける、されば本圖と反對に、表面より付くるのを便利とする。

一二　上前と同じく膝裏、前シック、袋等を付ける事。

一三　假縫圖の説明の如く天狗鼻及腰マクの附をグシ縫にて縮込む事。

天狗鼻をつける

一四　第二十六圖の如く天狗鼻を付ける、（此を付けるには、上前と長サの相違の生ぜぬやう注意すべし、若し長き場合には上部の中央にて縮せ、尚下前癖の伸びを縮めぬやう注意を要する、縮込に就きては假縫に於ける説明を參照せよ。）

注意

製作順序第六

製作順序第六

ミシン掛第三

此ミシン掛は上前より始める事猶ミシンの兩端は返し縫にする。

一　尻ガクシの口を地縫する事。

二　縦ガクシの飾ミシンを掛け、次に折込の端を仕付を當にして、裏側よりミシ

ンを掛ける事。

三　下前の隱しのミシンを掛けたる後、天狗鼻の地縫をなす（此地縫は終りを返し縫になすべし）、

製作順序第七　第二十六圖參照

一　尻ガクシ、縱ガクシ、天狗鼻の仕付を取り去り、次に縱隱しの兩端をミシン止する。

第二十六圖の如く袋を除きて向切と口とを合せて縱ガクシの口へ表面より仕付を打つ事。

二　尻隱しの口切れを切り開け、袋を裏へ出す事。

三　上前の尻ガクシの袋を上部に返し、口切れの縫目を割り次に下前に於ては、口切れを割りたる後天狗鼻の縫目を割る事。

四　上前尻ガクシの口切へ表面より仕付を打ち、下前も前と同じく口切の仕付をしたる後、天狗鼻の裏へ第三十圖に於けるが如く、下部へ仕付をなす事。

五　（第二十七圖參照）縱の縫目へ仕付を成す（此縫目に仕付を打つには、膝の合印を必ず合すべし）、又假縫の說明に於けるが如く、圖面の矢と矢の間に於て後面を四分の一吋程縮せるべきものとす。

縱ガクシの箇所は切取面に見る如く、上の切込より下の切込の間は、向切と後面のみを縫ふべきものとす。

製作順序第八

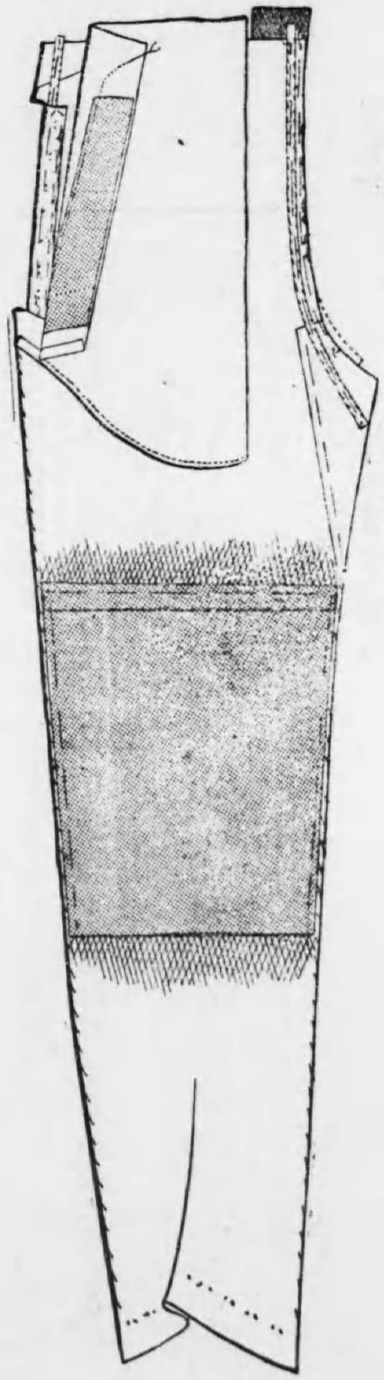
ミシン掛第四

縱の地縫ミシンを掛ける時には、隱し口へミシンを掛けぬ樣注意すべし。

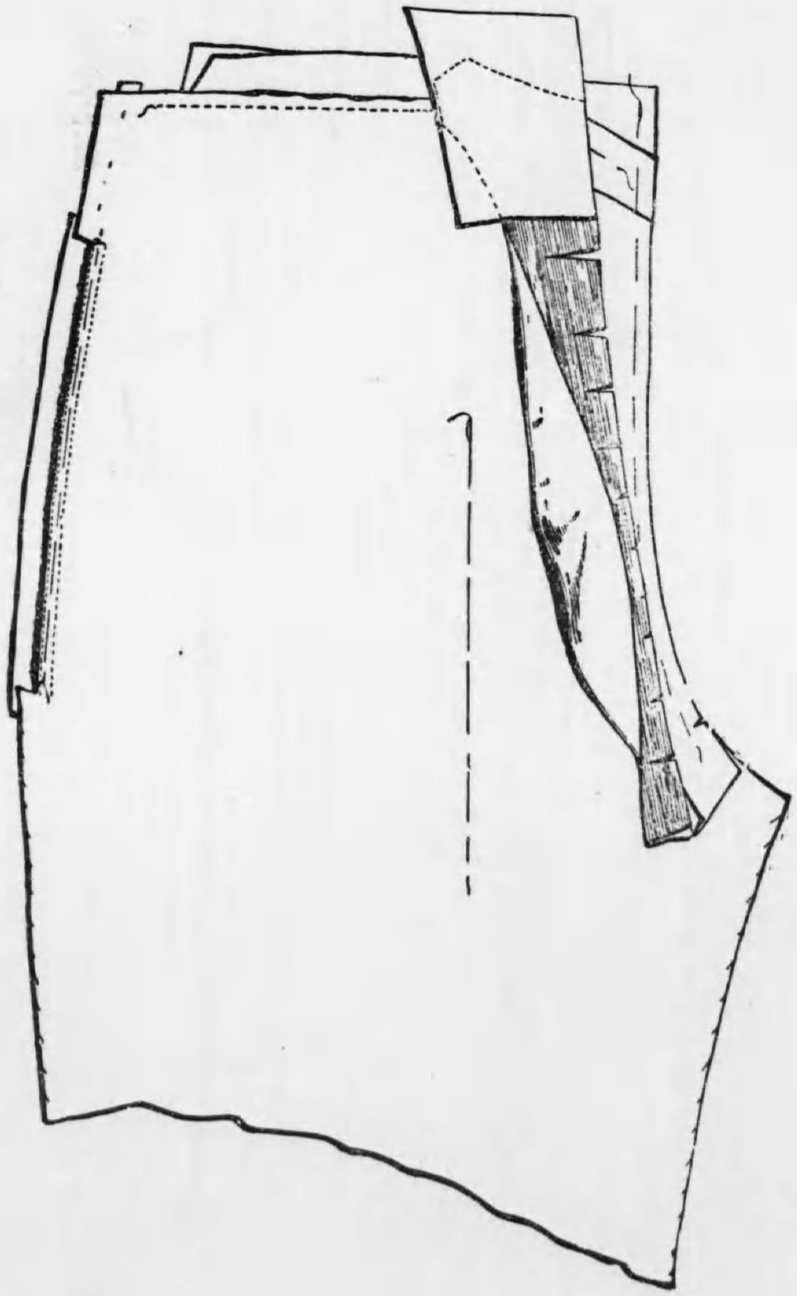
一　縱の縫目を地縫をなす事。

二　尻ガクシ口切の落しミシンを掛ける事。

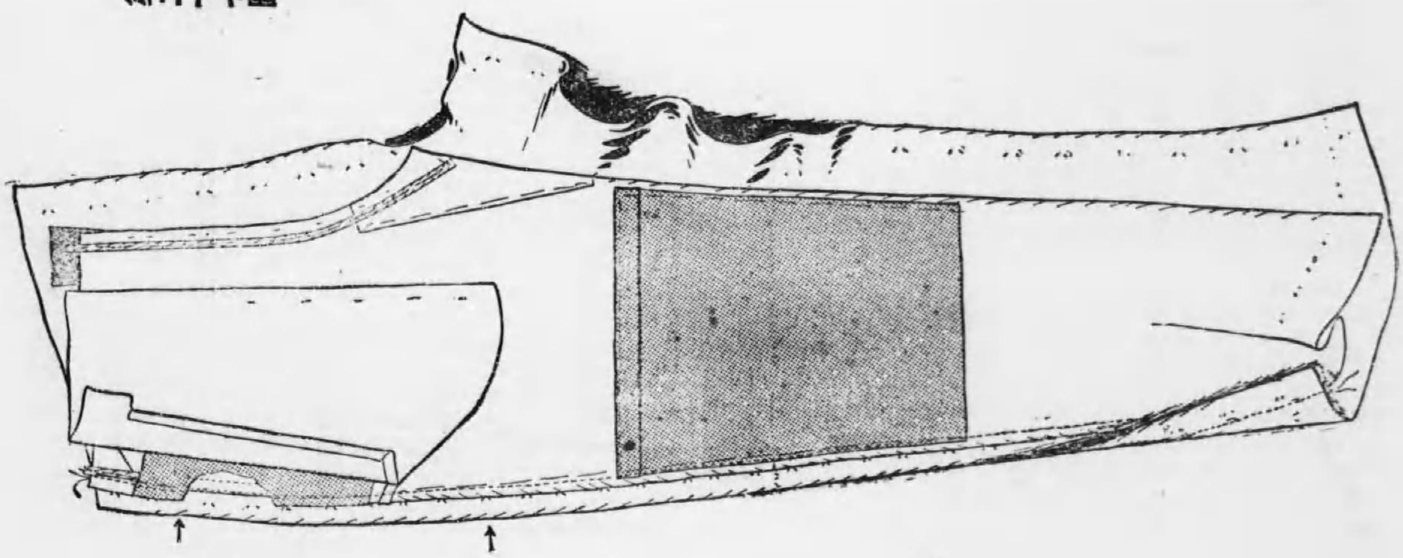
第二十五圖



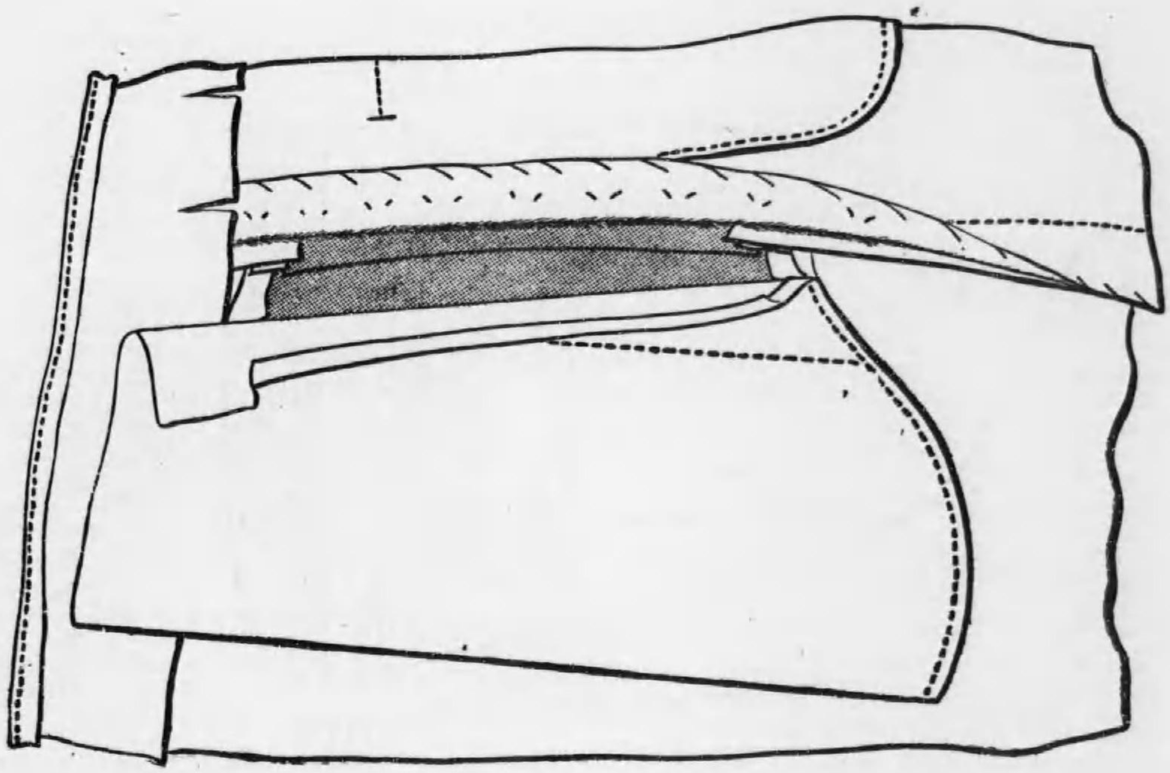
第二十六圖



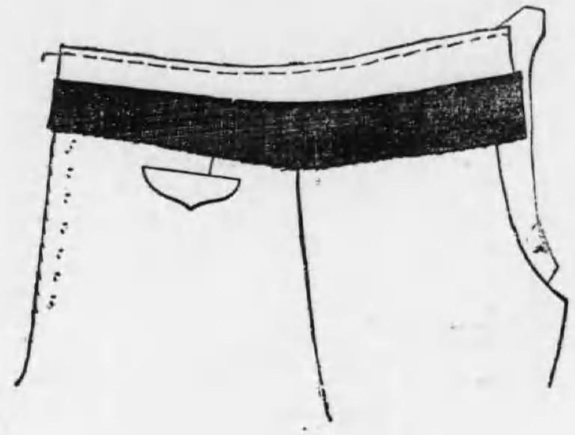
第二十七圖



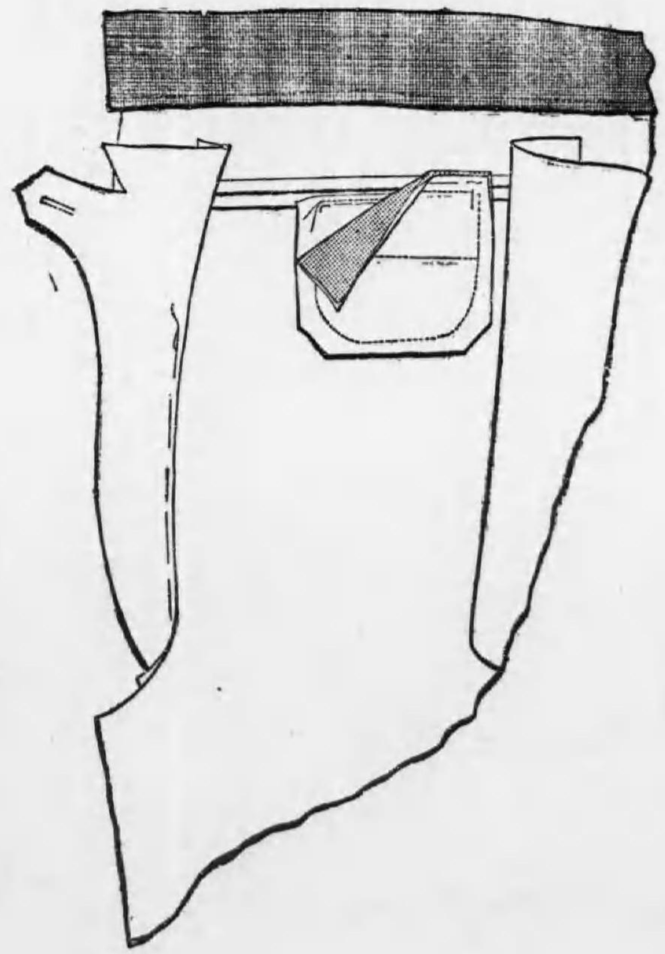
第二十八圖



第二十九圖



第三十圖



製作順序第九

第二十八圖參照縫の縫目を削る

製作順序第九　第二十八圖及第二十九圖參照

一　縫の縫目及び尻隠し口切の仕付を取る事。

二　尻隠しの兩端に止めを入れる事。

三　表面より雨蓋の附へ仕付縫する事。

四　裏より雨蓋の附へ袋を仕付縫する事。

五　表面より隠しへ熨斗を掛ける事。

六　（第二十八圖參照）縫の縫目を割る（此縫目を割るには熨斗の加減に注意して全部を割り、次に又熨斗切を掛けて割目の滑らかに成るやう割る、又若し地厚の地質等にて熨斗の効力悪き時には熨斗を掛ける前に縫目を手にて揉み割りたる後、熨斗を掛けるやうなす、猶此縫目を割る時には癖取の心得を忘れずに、ズボンの形體

を整へるやうに注意されたい。

七　縫目を割つた後に裏側より縦隠しの袋を仕付縫する、是れにて袋は済んだ故表面より第二十六圖の如く袋のいざらぬやうに仕付を打つ事。　第二十六圖参照

八　第二十九圖の如く腰マクの附の仕付を打つ。　第二十九圖参照

製作順序第十　第二十六、第二十九、第三十圖参照

ミシン掛第五

一　上前の腰マク附の地縫をなす。

二　尻ガクシの上縁へ飾ミシンを掛け、次に下前の腰マクの地縫をなし終りを返し縫をなす。　第三十圖参照

製作順序第十一　第三十圖参照

一　上前の尻ガクシ及び腰マクの仕付を取り去る、次に下前も同じくなす。

二　上前の尻ガクシを表より熨斗切を掛けて仕上をなし、腰マクの附を割り次に下前を同じくなす。　第三十圖参照

三　第三十圖の如く時計隠しの袋を附ける、此隠しの位置は縦の縫目より一吋四分の一位とし、口の長サは二寸二分と定む、次に上前の前ダテ裏を腰マクの縫目より五分位上迄仕付縫する、これは製作順序第五中の11に於て下部を表面より仕付をなしたる所を上部へ迄同じくなすものとす、）　第三十圖参照

製作順序第十二

ミシン掛第六

一　上前の前ダテ裏は表側より一分の縫代にて、時計隠しは圖解の如く袋の面より縫ふべきものとす。　製作順序第十二

製作順序第十三

第三十一圖參照

製作順序第十三　第三十一圖及第三十圖、三圖參照

一　時計隱しの仕付を取りミシン止をなし、裏より隱しの上緣へ仕付を打つ、次に縱隱しの袋の上端を下方へ返して、芯を表とに吊りタルミのなきやうに芯の面へ仕付を打つ。

二　第三十一圖の如く袋の上端へ仕付を打つ、此袋の仕付を打つには矢を以て示す如く、タルミを付けて打つものとす、假圖縫の前面に於てなせし如く、此前面は三方面より縮込みたる結果、腹の脹みに對する餘裕が出來て居る故、袋を平に付くる時は此餘裕と馴染まぬために吊れを生ずる理屈である。

三　腰マクの前角なる芯を右端に示したる圖面ロの如く丸く切去り、次に表地は角のみを同じく切去りて、其廻りをグシ縮せてイ圖の腰マクの左端に於ける如き體裁に仕上げるものである。

第三十二圖參照

ボタン芯

第三十三圖參照

四　表側へ返して第三十二圖に於ける如く腰マクの縫目の兩側及び後面癖の縫目の兩側及び天狗鼻の縫目の兩側へ仕付を打つ。

五　フックを附ける（之れを附けるには第三十二圖に於けるが如く、腰マクの縫目の兩側へ平均に股がせて、目打を以て穴を開けて通す、然る後圖面に於けるが如く裏側より芯を當て、穴糸を以て兩端を丈夫に止める。

六　天狗鼻の裏を上方へ返して仕付を打つ。

七　ボタン芯を附くるには假縫の作り方八の終りに於ける說明の位置と同じく爲すべし、次に表側より天狗鼻の縫目の兩端へ仕付を打つ、上前は前ダテ裏の所を除く外下前と同じ形式になすものとす。

八　前ダテ裏を地縫の際より折り、引繰返して裏を五厘位引込めて仕付を打つ、次に又裏のタルミを平均に寄せ乍ら奧へ仕付を成す。

九　表側より第三十（二）（三）圖の腰の縫目全部へ熨斗切を當てゝ熨斗を掛ける事。

飾ミシンを掛ける

飾ミシンを掛ける前に注意すべき事は、芯、袋等の折返りしを知らずに其まゝミシンを掛ける事屢々あれば、其れを避ける爲めに其端を止め置く事が肝要である。

製作順序第十四　第三十二圖及第三十四圖參照

ミシン掛第七

ミシンを掛ける時に表面クズレる事ある故に、斯かる時にはハガキの如き厚紙を當てゝ掛ける事。

ミシンを切らずにかける

一　下前の飾ミシンを掛ける此ミシン掛は第三十二圖及第三十三圖に於ける如く矢の方向を以て示す如く、途中にてミシンを切らざるやう掛ける、此方向に依れば時計隱しの上緣を兩度掛くる事になれども右は差支へない。

二　上前を後より始め終りに下前と同じく、此所へ歸るべきものとす。

製作順序第十五

第三十四圖參照

一　飾ミシンを掛けたる縫目の兩側の仕付を全部取り去る事。

二　第三十四圖に於ける如く前ダテのフックの眞中と、腰マクの縫目とを合せ、身頃より五厘位引込めて仕付を打つ。

第二十七圖參照

三　第三十四圖に於ける如く同じく前ダテを五厘程引込めて斷込の邊より、フックの上位迄仕付を打つものとす。

四　第三十四圖の如く前立の上端より穴の一分位奥に沿ひて仕付を打つ、此仕付を打つには圖面の如く前ダテの彎形の强きために生じたる餘りを平均に縮せる。

第三十三圖參照

五　表側より巾一寸第三十二圖の如く、チョークを引き其際に沿ひて仕付を打つ。

第三十二圖

六　ビジョウの仕付を打つ、ビジョウの位置は第三十二圖及第三十三圖に於ける如く、前に於ては腰マクの縫目より二吋四分の一位、尻の縫目に於ては三吋位とす、

第三十三圖

飾ミシンは一吋半位とす。

七　内股を入るゝには膝の合仕付を合して仕付をなす。

製作順序第十六

製作順序第十六　ミシン掛第八

一　内股の地縫をなす。

二　ビジョウ及び前ダテの飾ミシンを掛ける。（第三十二圖を參照する）

三　下前も前と同じ形式に從ふ、

製作順序第十七

製作順序第十七　第三十五圖參照

一　内股ビジョウ及び前ダテの仕付を取り去りてミシン止をなす。

二　内股の膝の合仕付より上部を返し針（手縫）を以てなす事。

三　内股の縫目を割る此縫目を割るには熨斗の加減に注意して全部を割り次に又熨斗切を掛けて割目の圓滑に成るやう割るものと心得あれ。

尻の縫目の入れ方第三十五圖參照

製作順序第十八

四　尻の縫目を入れる（此所を縫ふには先づ第三十五圖に於けるが如き體裁になし全部に仕付を打ちて、次に股の切込より二寸位の間地縫糸を以て細かに返し針に縫ふものとす）

製作順序第十八　第三十五圖及第三十六圖第三十七圖參照

製作順序第十九

製作順序第十九　ミシン掛第九

一　尻の地縫をなす。

二　上前の筒を引出して廣げ、小股の縫目を揉割り、上前と下前を正しく重ねて切込より五厘位上位に表より三四同に亘りて止ミシンを掛ける。

三　尻の縫目の地縫ミシンの上を第三十五圖の如く全部手縫をなす事。

第三十六圖參照　裾の上げ方

靴ズレをつける

一　尻の縫目を割る、此縫目も内股と等しく熨斗切を掛けて滑らかに割る。

二　裾を上げるには第三十六圖解に於けるが如く股下の寸法を、廿八吋と假定する時は、前端に於ては廿七吋四分の三、中央に於ては廿八吋、後端に於ては一吋長き位の程度にて、裾の恰好を附ける。

三　兩足の長さの違はぬやうに注意して、圖の如く切仕付を打つ。

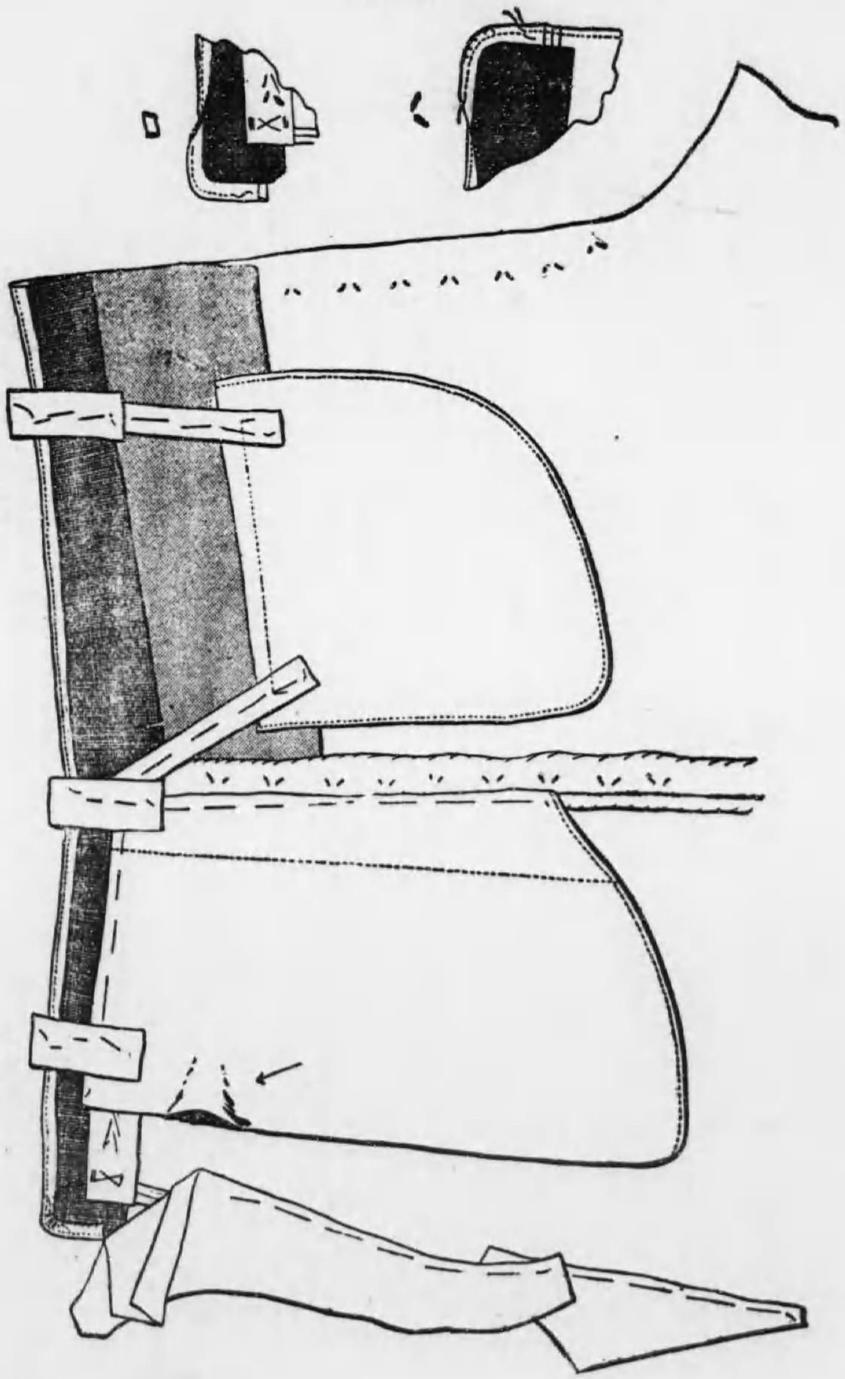
四　切仕付より端先を熨斗を以て極度に前方に曲げる、之は折上げたる時に縫込が吊れぬ爲めにするのである。

五　切付付を當に端先の仕付を打ち、次に縫込の端へ仕付を打ちて、終りに靴ズレを附ける。

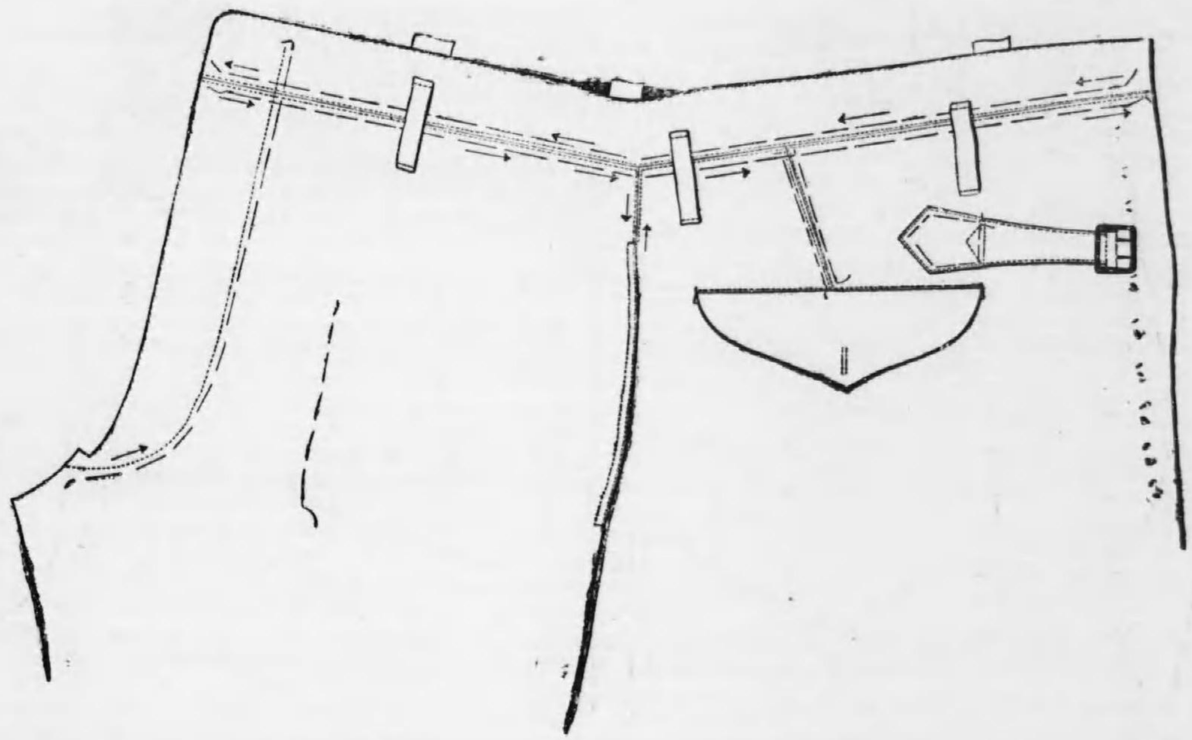
六　腰のボタンを附ける。

七　止めを入れるには股を第一に、前ダテ、縦ガクシ、後面の如く順序よくなす事。

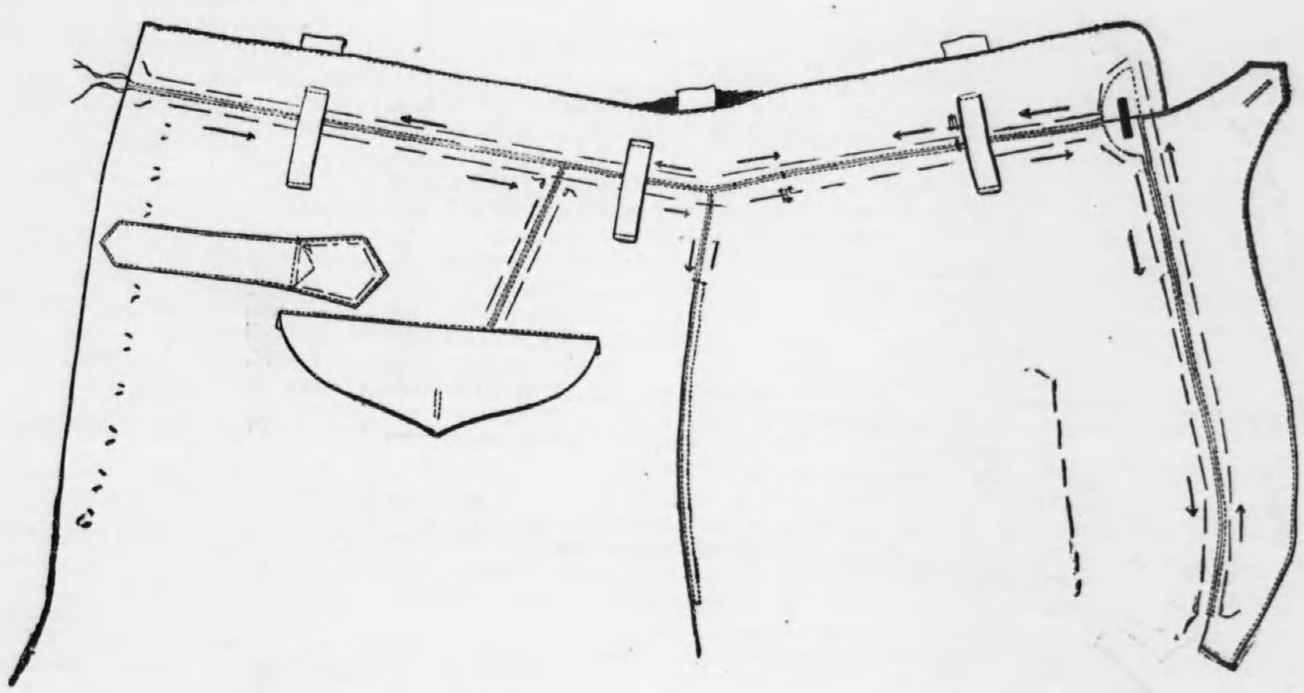
第三十一圖

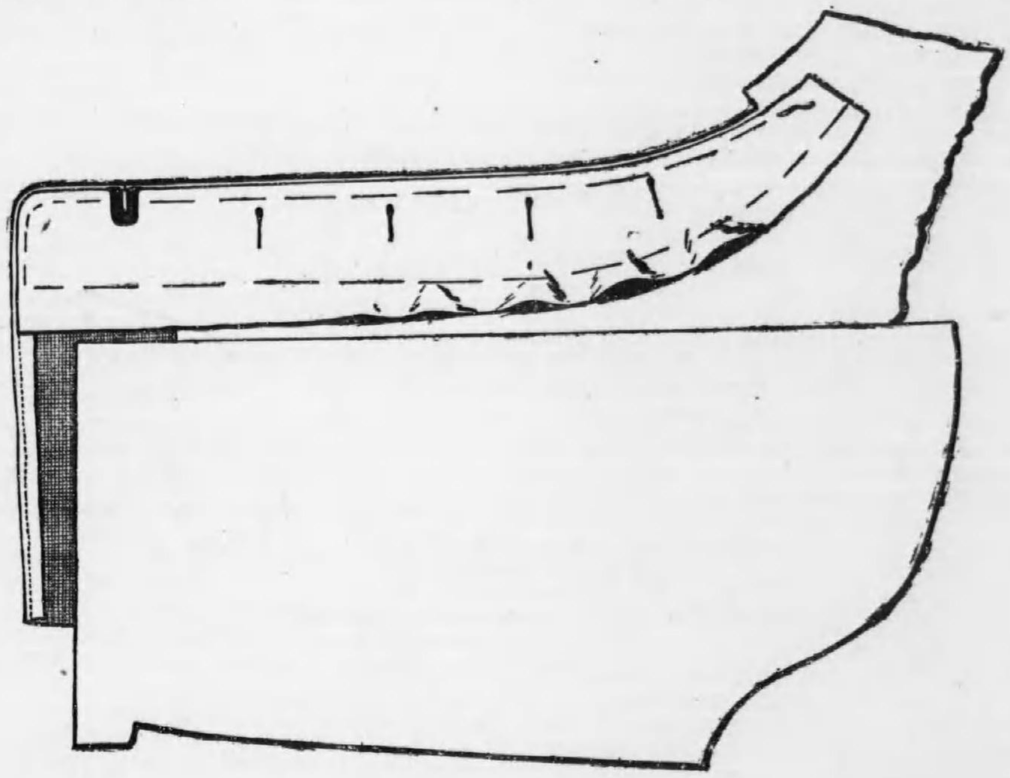


第二十三圖

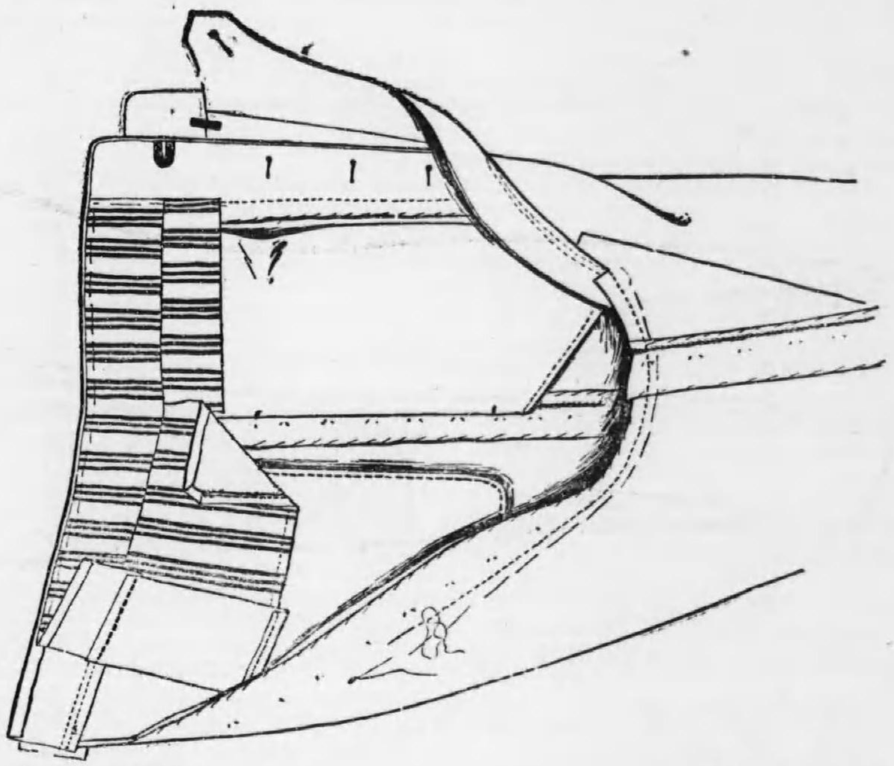


第二十四圖





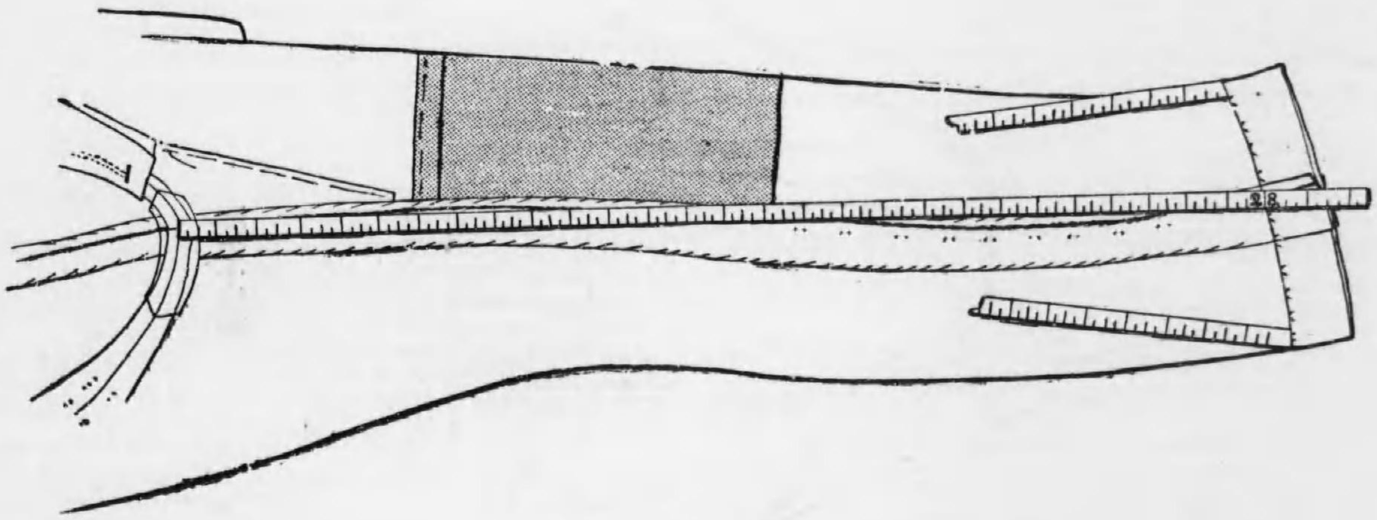
第三十五圖



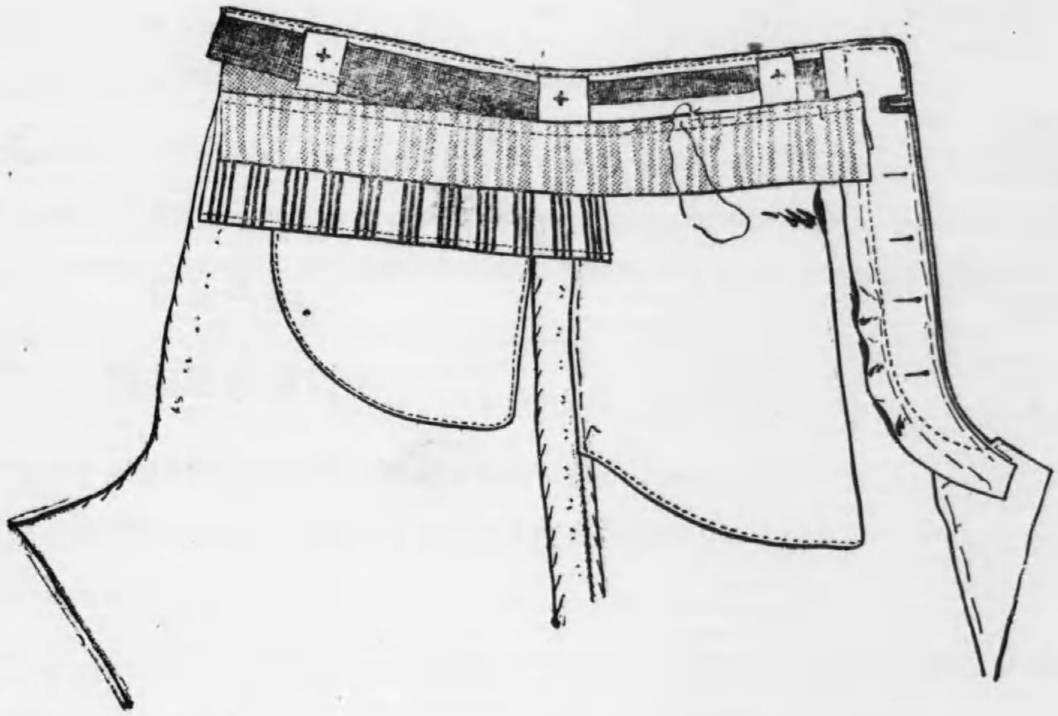
第四章　ズボン製作順序

第三十三圖

第三十六圖



第七十三圖



八　腰裏を附けるには、第三十七圖の如く、下部の重ね目を、縦の縫目より二分位前方に寄せて、腰マクの飾ミシンを當に仕付を成し、次に上方へ返して腰マクの上端より五厘位引込めて仕付を打つ。

九　シックを附ける、シックは斜の切地を用ひて巾五分位、長さ二寸位を第三十六圖の股部に於けるが如き體裁に付けるものとす。

製作順序第二十

マツリ縫

一　裾口及び靴ズレを細かくカラゲ縫をなす、若し千鳥がけをする場合には余程細かになさざれば、靴のフックに引き掛りて、ほころび易き故に注意あらん事を乞ふ。

二　膝裏のマツリをなす。

三　シックのマツリをなす、次に前ダテのカラゲ縫をなす。

四　縦ガクシ裏のマツリをなす。

五　腰裏のマツリをなす。

六　全部の仕付及び切仕付等不用なるものを取り去る事。

之れにてズボンの工程は全部終了す、最後の仕上げをなす前に、隅々まで能く目を通して不必要なる仕付糸又はチョークの痕等殘りなく除き去り、技術の萬全を期すべきである、仕上後に切付等或はミシン糸の殘り居る等の事は、見惡きのみならず、技術の優劣も推し計られ行き屆かぬことを表はすものなれば、些細なる事のやうなれども落度のなきやうに能く注意するのが肝要である。

製作順序第二十一

仕上げとは一般に品物の最後の加工工程に使用する言葉なれども、洋服に對する

プレッシング

仕上げとは意味が能く撤底して居らぬやうに思はれる、英米の言葉にてはプレッシングといふ言を云ふ、プレシングとは物を押へつけるといふ意味を成してゐるのであるから、洋服の仕上げとしての適當な言葉は、プレシングと言つた方が直應して居る如く思はる、毛織物の仕上げをなすには熨斗にて押へつけて地質を滑らかにするやうな心持ちを以て從事するのが肝要だ、ラシヤ類を織物會社で仕上げをなすには俗にロールといふ機械の壓搾作用に依つて成すので之と同じ理由で洋服も加工中に種々皺になり、或はラシヤの體裁を損じ居る等の事ある故、其れを元に復し體裁を整へるためになすものなれば、出來るだけ壓搾して（熨斗ヅレ）のなきやうに、又濕氣のなきやうに、猶又洋服の恰好を整へるやうなすが目的なれば、一面にムラなく壓搾して終りに熨斗の光りを取り去る事が必要である、熨斗の光りを取るには水を充分に濕して後、絞りし切を直接にラシヤの上にのせ、又其上に乾きたる切を二枚程あて、其上より熨斗をあてる時は光りが取れるから右のやうになせ、然し濕氣

ロール機械

熨斗の光りを去る

濕氣を浮たせずに

をラシヤが吸込むのと光りが取れるとは、僅かなる時間の堺目故成る可く濕氣をラシヤにもたせずに光りを取り去る事肝要なり、猶ズボンの前後の折目は出來るだけ折目正しく、確かり付ける事、さもなき時は直に折目がくずれる故右の條能く注意あれ。

裾口の仕上

筒の仕上

段々に上前の方に

一　裾口の仕上を第一とする。

二　次に筒の仕上をなす（前後面の折目をしつかりつけて熨斗づれを取る事、）

三　前開きから始めて時計隱し、縱隱し、尻隱し、脇の縫目、尻の縫目等を仕上げて段々に上前の方に廻つて仕上げをなす。表が全部すみし上はボタンの印をなす。

四　腰裏、袋等の仕上げをする事。

五　前ボタン、裏ボタン、雨蓋のボタンを附ける事。

之れにてズボンは完全に出來上る。

カフスの作り方三種類　第三十八圖參照

左に掲げたるは、ズボン裾口の折返しにして、此三種を以て最新式の方法となす、

フールタンアップ

イをフルターン、アップと云ひ、**ロ**をハーフ、フレンチターン、アップ、**ハ**をコワター、フレンチと云ふ。

第三十八圖中各圖面に於ける太き黑線は、股下の寸尺及び此等に要する縫込の長サを示す線にして、縫込の長サは、**イ**が五吋、**ロ**が四吋三分の一、**ハ**が三吋四分の三なり、

イの圖面はフルターン、アップの圖解で、一吋四分の三のカフスである。

1 2 間はカフスの內側となる部分にて、巾は一吋四分の三である。

2 3 間はカフスの表面となる部分にて、同じく一吋四分の三である。

3 4 間は折込の部分にして、二分の一吋とする。

喰違る半吋

五吋が安全の方法

ハーフフレンチ

三種類の特長

4 1 間は合計四吋である。

猶此カフスを仕上げるには右の1より4間の寸法四吋を要する理であるが、實際に於ては前面と後面の喰違る等の餘裕を半吋と加算して四吋半を要することになる然れども切地が充分にある場合には、更に半吋の餘裕を加へて五吋と見るを以て最も安全なる方法なりとする。

ロの圖面は、ハーフ、フレンチの圖解にして、內面圖下部に於けるが如き體裁に仕上ぐるものにて、之等三種類の中最も便利なる方法であるから、左に其等の特長を合せ擧げ、以て參考に供する事とする。

三種の特長

1 同じ股下の寸法にて**イ**に於ける場合より、約一吋切れ地の節減を成し得る事。

2 裾の縫目を解く事なくて、單に折り目を變ずるのみにて、股下の長サを一吋位

の長短を自由ならしむる事。

3 内面圖上圖の如く内側に折返したる場合には普通形裾口と同じ體裁に變ずることを得るのである。

作り方

右の作り方

1は股下の寸法、

2 1はカフスの表面と成るべき部分にして、巾一吋四分の三である。

3 2間は裏側の下部となる部分にして巾は2 1間の半分。

4 3間は折代にて、此場合半吋と定む。

右の説明に從へば、4より1に至る間の長サは三吋八分の一を要す、然れどもイ圖に於て述べたる如く、裁縫の爲めに必要なる餘裕を、一吋と定め置き、實際に於ては四吋八分の一を要するのである。

内面圖の説明

カフスを平易に作るには

5 1間はカフスの巾の半分なり。

6 5間も同じくカフスの巾の半分なり。

内面圖の説明

1は内面部下部に於けるが如く、表側の上縁となりて6の位置に至るものとする。

2は同圖面に於て裾の端先(股下の仕上線)なり。

3はロノ二圖に於けるが如く、5と縫合すべきものとす。

此カフスを最も平易に作るには

一　1 3 5の各線の位置を定め、3及び5を折る。

二　ロの二圖面に於けるが如く3 5の端へミシンを掛ける。

三　ロの二外側圖に於けるが如く、ツキ合せてカラゲ縫をなす。

四　35の縫目を眞中にして兩端に折り目を附ける事。

ハの圖面はコワタ、フレンチの圖解にして、

1は股下の長さなり。

21間はカフスの巾の半分、卽ち八分の七吋なり。

32間はカフスの巾の四分の三、卽ち一吋拾六分の五なり。

43間は折代にして半吋、

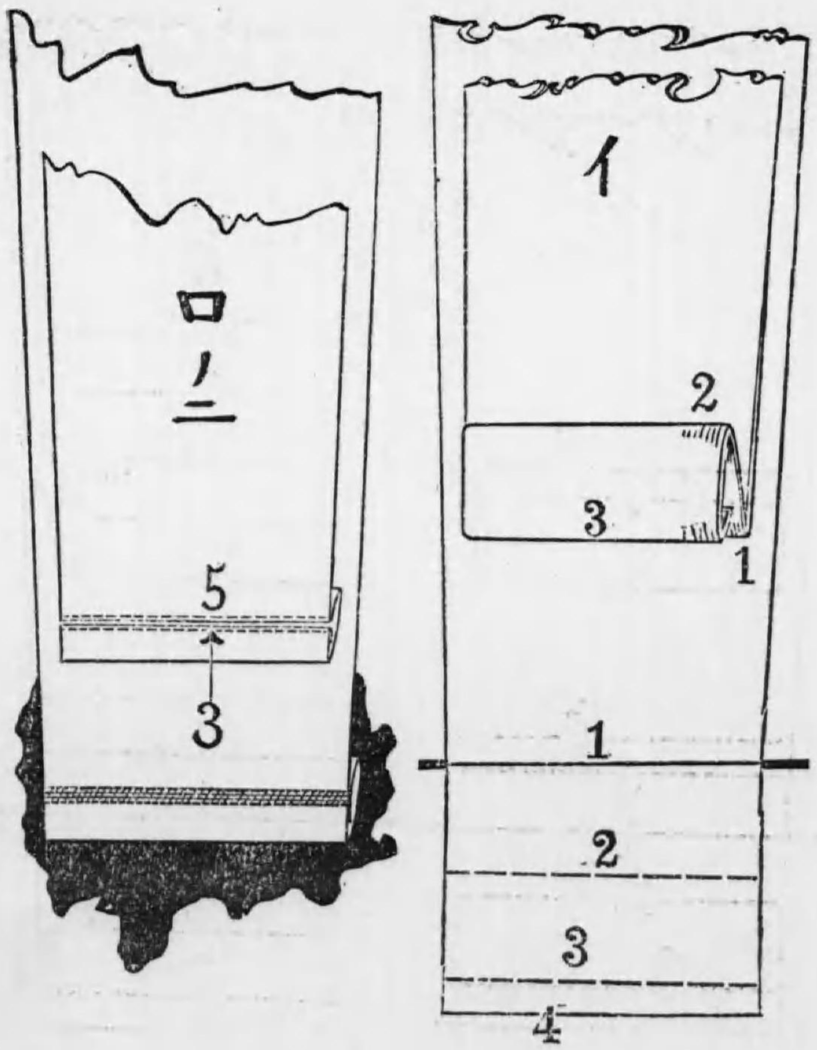
51間は21間と同じ寸法。

65間はカフスの巾の四分の一、卽ち拾六分の七吋、

1234間に要する寸法は、二吋拾六分の拾一にて餘裕の一吋を加へて三吋四分の三位とす。

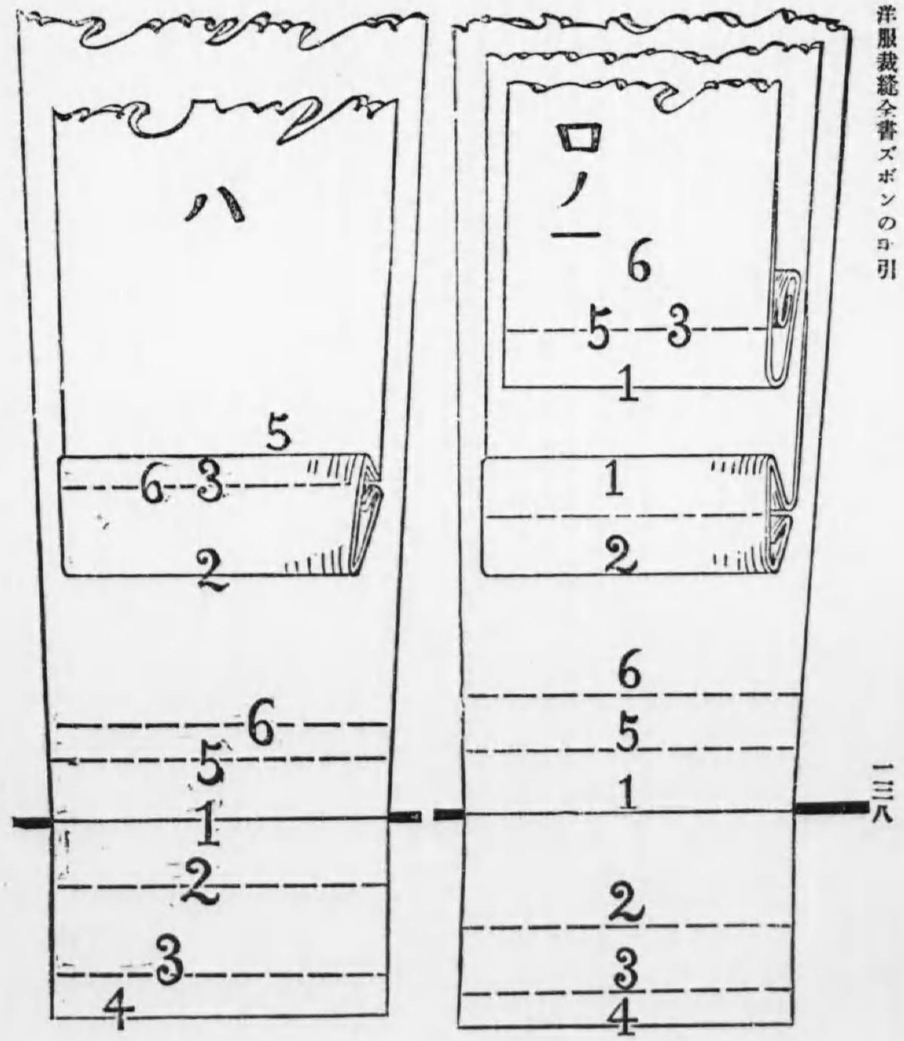
此カフスは3と6を縫合せ、1は表側の中央に出來上るのである。

第三十八圖（一）



第五章　各種ズボン裁斷法

第三十八圖（二）



肥満形のズボン

直角線

肥満形ズボン裁斷法　第三十九圖參照

尻廻四拾三吋、　股上拾吋半、
腰廻四拾吋、　膝廻廿吋、
股下卅吋、　裾口拾六半、

イより前下に直角線を引く事。

ロイ間は股下の方法に股上の寸法を加へたるもの卽ち四拾吋半である。

ハイ間は股上の寸法である。

ニハ間は股下の寸法の半分より二吋少さくする。

ホハ間は尻の半度の六分の一。

ロハニホの各點より前方に直角線を引く事。

ヘハ間は尻の半度の三分の一である。

トヘ間は尻の半度の六分の一である。

チト間は尻の半度の六分の一より四分の一吋少きものとする。

リチ間は四分の三吋にして。

ヌト間も右に同じ寸度なりとす。

ハチによりて**ト**より直角線を上方に設くる事。

ルヘ間は四分の三吋なりとす。

オは**ハチ**に依りて**ル**より直角線を上方に引き腰線上に於て設けらる。

ワオ間は腰廻の四分の一にして。

カオ間も右の寸度に同じものとす。

ヨワ間は**ト**の直角線と腰線の結合點より**ワ**に至る間の寸度に同じものとす。

ワの八分の一吋前方より**ヌ**に至る直線と、**ワ**より四分の一吋後方より**ト**に至る線を設くる事。

カより**ヨワ**を經て**チ**に至る仕上線を圖の如く設け次に下前線を右の如く形作る。

タロ間は尻の半度の三分の一より四分の三吋多きものとする。

レタ間は十二分の三吋とす（十二分の目盛に於て三吋なり）通常尻の寸法と腰の寸法の差を六吋と定むるものにして、腰の寸法の太くなるに從ひ一吋毎に十二分の一吋を加ふるものなり、されど此場合に於ては普通の腰寸法より三吋多きものなるに依り十二分の三吋なりとす。

ルより**リレ**に至る直線を引く事、斯くして、

ソを膝線上に設けらる。

ツソ間は膝廻の寸法の四分の一にして、

ネソ間も右と同じ寸度なりとす。

ナレ間は裾口の寸法の四分の一より四分の一吋少なきものとす。

ラレ間は右の**ナレ**間と同樣なりとす。

チツナ間及び**リツ**間に圖の如く仕上線を引く事、次に**カ**より裾に至る間を同じく仕上げるものとす。

後面の製圖

尻の半度の六分の一

後面の製圖

圖面に於ける二重線の前面を基として、尻、膝、裾の線を延長せよ。

ムヌ間は尻の半度の六分一より半吋多し。

ウオ間は尻の半度の六分一にして、**ルオ**の延長線上に設けらる。

キウ間は一吋にして、**ウ**よりの直角線上に設けらる。

キヌを結合して圖面の如く、**キ**より**ム**に至る仕上線を設く。

ノツ間は四分の三吋である。

ヲナ間は一吋。

ラを施回點として**カ**及び**ハ**より弧線を描くこと。

クハ間は一吋半。

カフス付ズボン

ヤネ間は四分一吋。

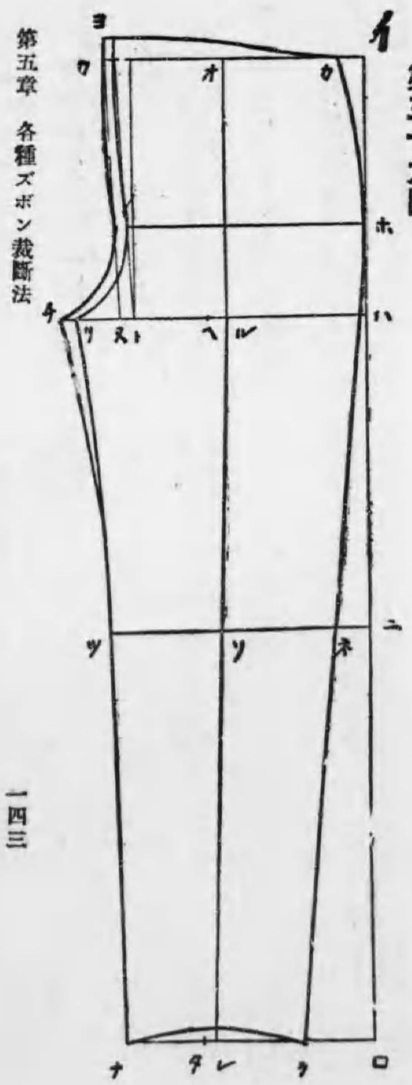
マラ間は一吋。

ケキ間は腰の寸法の二分一より二吋多い、此二吋の中一吋半は縫代にして、他の半吋は癖の縫目より切り去る爲めである。

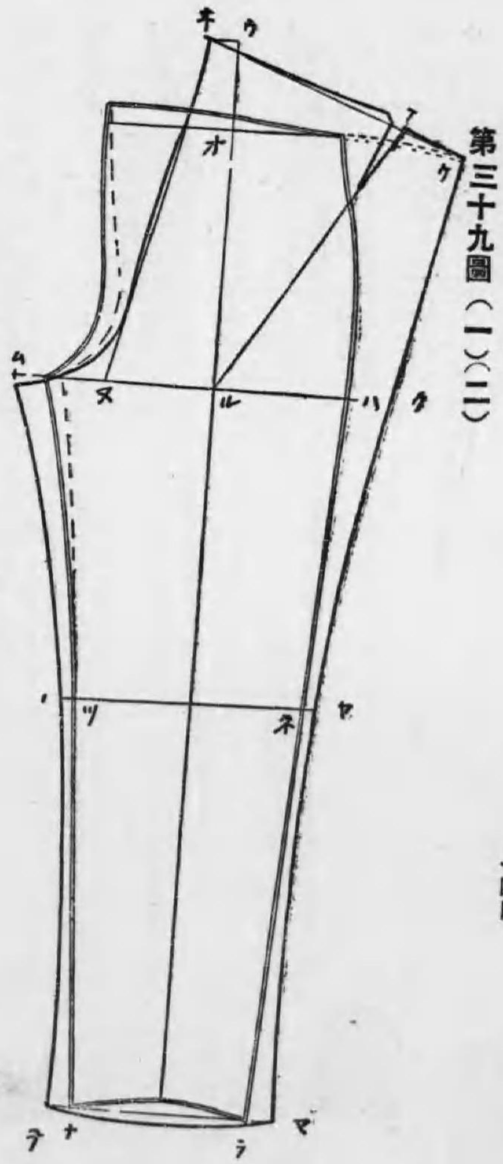
ケより**クヤマ**の諸點を經て**ヲ**に至る間を、圖面の如く仕上げなくてはならぬ。

フケ間は三吋にして次に圖の如く仕上線を設けるものとする。

第三十九圖



第三十九圖（一）（二）



カフス付半ズボン　第四十圖參照

尻廻卅七吋、　子膝拾三吋、　腰廻卅二吋、　脹ら脛四吋四分一、
股上九吋半、　股下拾三吋半（小膝迄の寸法）

イより前下に直角線を引く事、

ロイ間は股上の寸法九吋半なりとす、

ハロ間は股下の寸法拾三吋半なりとす、

ニハ間は餘裕にして此場合にては三吋とす、

ロハニの各點より前方に直角線を引く事、

ホロ間は尻の半度の二分の一にして（卽ち拾八半）なり、

ヘホ間は半吋、

トヘ間は尻の半度の八分一より四分一少し、

チト間は四分の三吋なり、

リは**ヘ**より上方に直角線を設け、腰線上の結合點より半吋後に**チ**より直線を引き、

腰線上の結合點より直線を引く

尻の半度の六分の一

さて、**リ**を設ける事、

ヌは右の**チリ**線に平行して直線を引き、腰の結合點に於て設けらる。

ルは**リヌ**間の眞中より腰の半度の二分の一なりとす、

オロ間は尻の半度の六分一なりとす、前方に直角線を引く事、

ワは右の直角線と、**ホヌ**の結合點である。

カはロチ間の中央、

ヨはカより直角線を下方に引き、裾線上に設けらる、

タヨ間は小膝巾の四分一より一吋多い、然れど裾口の形狀若しくは客の好みに依りて多少の増減は有るものと見るべし、少き場合には半吋位にても宜しい、又多き時には一吋半位迄とす、

レヨ間は右に同じ、

ソはチよりタに至る直線上に設けらる、

ツはロよりレに至る直線上に設けらる、

ネツ間は四分の三吋である、

ナソ間は右に同じ、

ラヨ間は半吋なり、タラを經てムに至る直線を引く、

ムはタラを經たる直線とロツ線の結合點である、

股角

膝線より右側の二重線

後面圖

ルよりリトナタ間を圖の如き形に仕上線を引き股角はトより四分一位下方に設ける、

右と同じくルよりロネム間を圖の如く仕上線を設け、此線はロに於て外側へ半吋出したるもの、

ヌよりワチ間を徑てナに至る仕上線を引く事、

膝線より右側の二重線はビジョウ用の場合に用ふる爲めにして、ヨより二吋右へ定むる、

腰マクの無き場合には圖の如く、一吋四分三を腰の上方へ加へる、

後方圖は前面部を基として製圖するものなれば、圖面の如く尻、膝、裾線を前後へ伸長するものとす、

ウト間は尻の半度の拾二分一なり、（ト點は前面圖上にあり）

キロ間は一吋半とす、キよりワに至る直線を引き、此線に依りて上方に面して直

角線を引く、

外側彎形

ノは腰線上に設けらる、

ヲノ間は尻の半度の六分一なりとす、然し乍ら其場合と好みによりて多少の増減はある事、

ヲの少しく外側より**ノ**を經て稍外側へ、彎形を作り**ワ**に至りて**ウ**の半吋下方迄を圖の如く仕上線を設ける、

縱の仕上線

クナ間一吋なり、

ヤタ間は右に同じ、

ウより**クヤ**に至る仕上線を、圖の如く設ける、

マム間は一吋なり

ケネ間は何れも一吋である、

フキ間は一吋半とす、次に縱の仕上線を形作る案内線として、**ケフ**より直線を引く事、

殘りの寸度

コヲ間は尻廻りの半度に一吋半加へたるもの、

コより**フ**の一吋外側を經て**ケマ**に至る仕上線を引き、次に**マヤ**間を同じく形作る、

ゲートル及カフス製圖

下圖のカフスを附ける場合には、**ケマ**間に二重線の如き持出しを附ける、

コケ間は前面の**ルネ**間の長さと同じものなり、

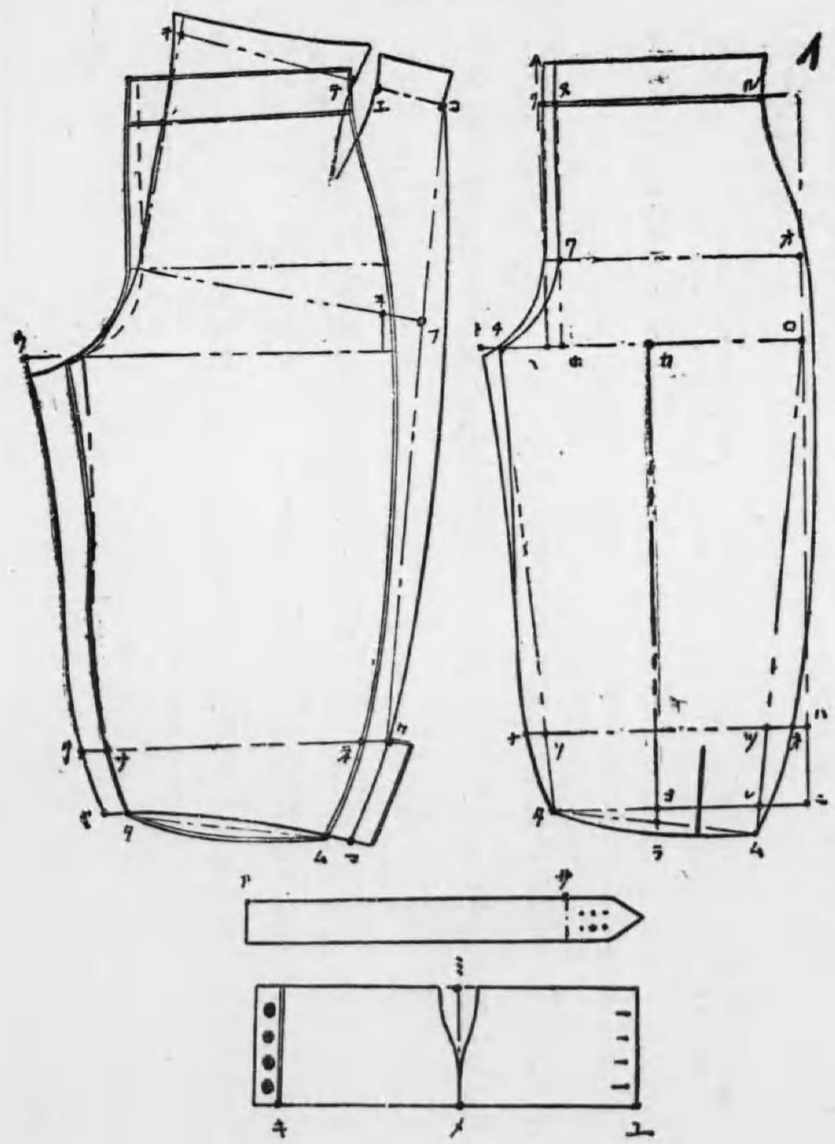
ヱコ間は二吋半なり、

テエ間は尻の半度より腰の半度を引去りたる殘りの寸度なりとす、されば此**テエ**間の腰廻りの細サ太サに依りて、差異を生ずるものなり、而して圖の如く腰マクを附け、**エテ**間を取り去るものとす、

ゲートル及びカフスの製圖、

アサ間は小膝の寸法より半吋多く、巾は此場合一吋半なれども、其場合と好みとに依り加減せよ、

第四十圖



ビジョウ穴はサ點より圖の如く、外側に附けるのである、

キユ間は膨ら脛の寸法より半吋多くすべし、

メはキエ間の中央部である、

ミメ間は此場合は四吋半であるが、客の好みによりて加減すべし、

次に脹ら脛と小膝の寸法の差に半吋加へたるものをミの兩端より取り去る。

最新式乘馬ズボン裁斷法　第四十一圖參照

尻、　卅八吋、　膝巾、　拾四半、

腰、　卅三吋、　小膝、　拾三吋、

內股、　廿九吋、　コムラ、　拾四吋、

股上、　九吋半、　裾口、　拾二吋、

イより前下に直角線を引く、

ロイ間は股上の寸法にして此場合は九吋とする、

ハロ間は内股の寸法の半分なり、

ニハ間は股下の半度の六分の一なり、

ホニ間は**ニホ**間の長サより一吋多し、

ヘホ間は此場合に於ては四吋なるも、望みによりては其長サを變更してもよし、

ロハニホヘの各點より前方へ直角線を引く、

トロ間は尻廻の半度の二分の一である、

チト間は半吋なり、

リチ間は尻廻の半度の八分の一である、

ヌリ間四分の三吋、

トチの兩點より直角線を引上げ、腰線上に於て**ル**及び**オ**を設く、

ワチ間は尻の半度の六分の一なり、

カは**ルオ**の中間より測りて腰の半度の二分の一である、

ヨは**ロリ**間の中央である、

タは**ヨ**より直角線を引下げて膝線上に設けらる、

レタ間は此場合に於ては一吋なれ共、多少の增減はあるものとす、

レより**ハ**線に依りて直角線を引き下げ、裾線上に於て**ソ**を小膝線上に**ツ**コムラ線上に**ネ**を設ける、

ナレ間は膝廻の四分の一である、

ラツ間は小膝の四分の一である、

ムネ間はコムラの四分の一である、

ウソ間は裾口の四分の一より、四分の一吋多し、

キソ間は一吋半、

ノレ間は一吋半、

ヲノ間は二吋にして**キノ**線よりの直線上なり、

クは**ロラ**の結合線上に於て眞中である、

クより**ヤ**に至る直角を設けよ、

ヤク間は此場合二吋四分の三なれ共、切地の都合又はスタイルに依りて多少の變化は差支へなし、

カマヤラノの各點を經て**キ**に至る間を、圖の如く仕上線を形成し**ニラ**線より四分の三吋下より點線の如く、一吋四分の一の持出を付ける事、

同じく**カ**より**ルワヌナラム**の各點を經て、**ウ**に至る間及び**オリナ**間を、圖の如く形成し前面圖を終了す、

腰マク無しの場合には圖の如く、一吋四分の三を腰線の上部に附加へる事、

後面の製圖

後面は二重線を以て示す前面を基として、製圖するものなれば、腰、尻、膝、小膝、コムラ、裾口の各線を圖の如く引延すべし、

ケヌ間は尻の半度の拾二分の一、

フは此場合には前面**ワ**點より四分の三吋とす、**ロフ**線に依りて直角線を引き上げるものとす。

コは腰線上に於て設けらる、

エコ間は尻の半度の六分の一に一吋加へたるもの、

テエ間は腰の半度の長サに、二吋加へたるもの、

アテ間は二吋半なりとす、

サア間は半吋なり、

キマ間は二吋半、

ユヤ間は二吋四分の三、

メナ間は膝廻の寸法に一吋を加へたるものより、**ノナ**間の長サを引き去りたる殘

内股の縫目

りの長サである、

ミム間はコムラの寸法に一吋を加へたるものより。前面圖の**ネム**の間の長サを引き去りたる殘りの寸法である、

メミの兩點より上下直線を引き、上は**ヱ**に至り下は**シ**に至る、

シは裾線と**メミ**線の合致點、

ヱメ間は二吋なり、

ヒウ間は裾口の寸法に一吋半を加へたる長サより、**キウ**間の長サを引き去りたる殘りの寸法である、

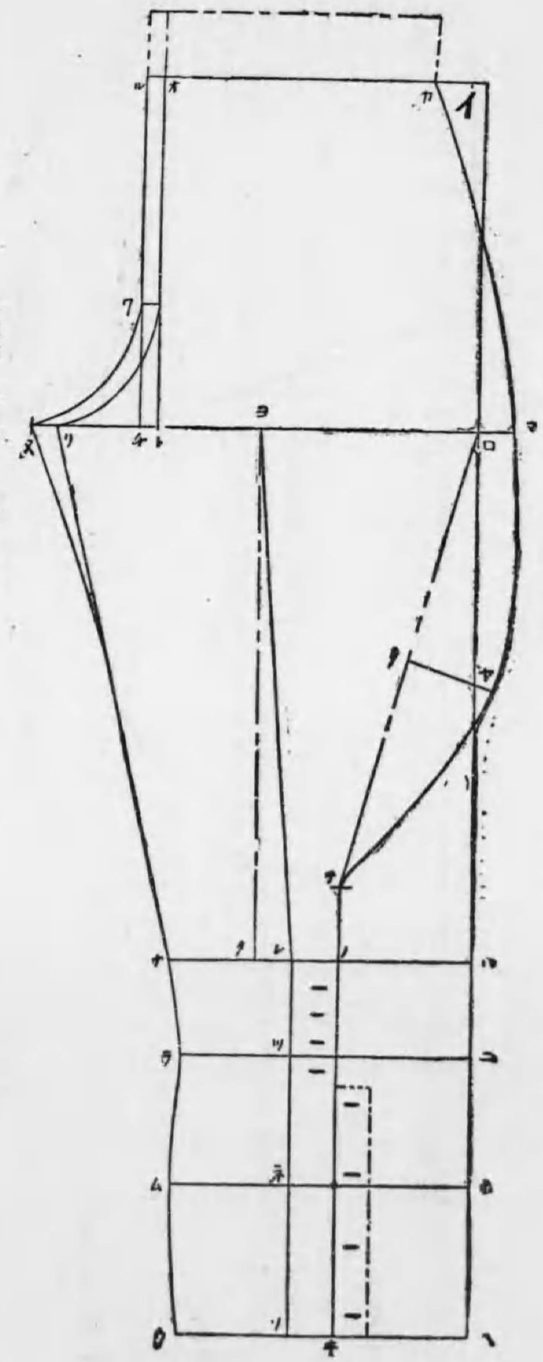
ヒシ間は裾口の寸法の殘寸なれば、此三分の一を縱の縫目に於て圖の如く取去り殘りの三分の二は後面の中央に於て、圖の如く取去る、次に廻全部に圖に倣つて仕上線を形成し、終りに**メ**點より下方に持ち出しを附けよ、

内股の縫目**ラ**の一吋上部より**メ**に至る直線を引き圖の如く上部の彎曲を強く切り去る、此上下の彎形線には裁斷するに當り兩側に縫代を附けなくてはならぬ、

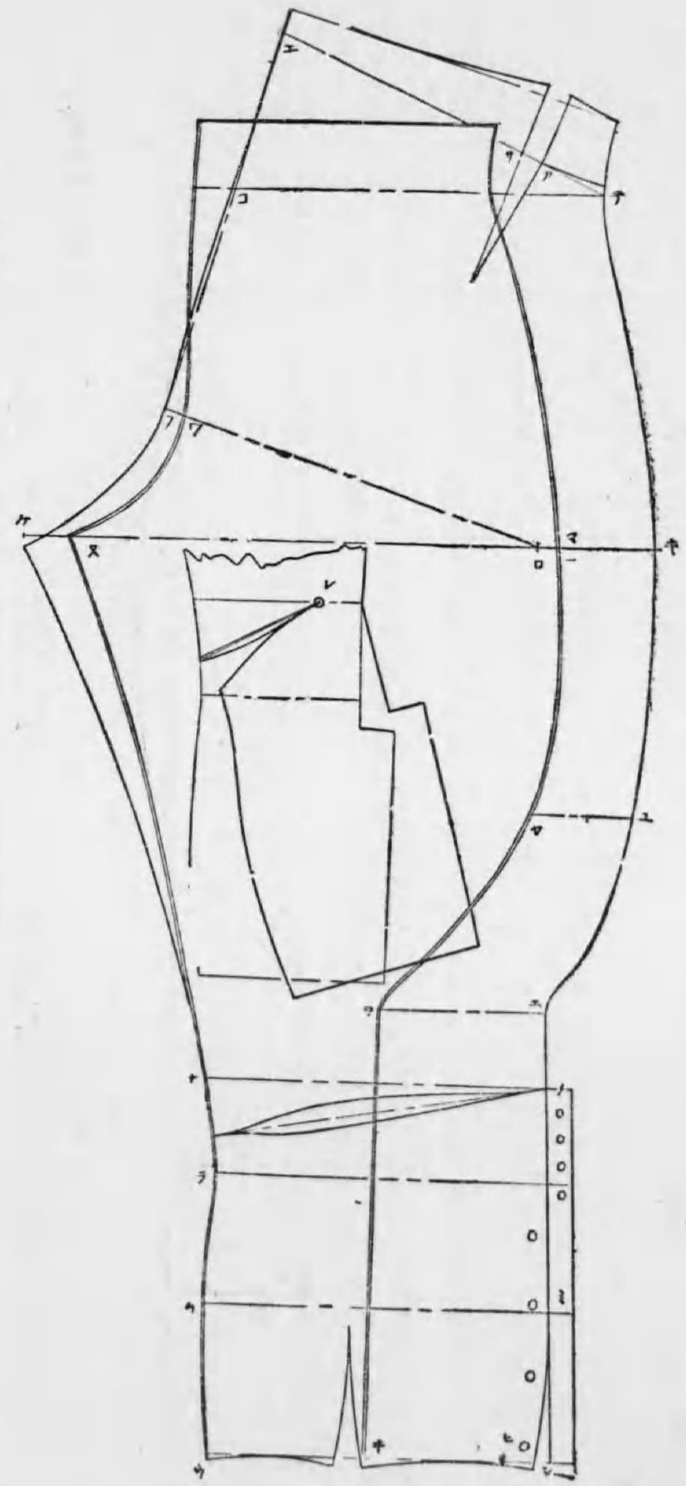
内面圖

第四十一圖（一）

内面圖は前面膝下にして、膝頭の餘裕を得る爲めに、**ラ**點の一吋上部より**レ**に至る直線を引きて一吋程開き縫代をして、稍弓形に裁斷すべきものである。



第四十一圖（二）



普通半ズボン製圖法

普通形半ズボンの製圖法　第四十二圖參照

尻、　卅八吋、　腰卅三吋、　股上、九吋八分の七、股下廿八吋八分の一、

膝、　拾四吋、　小膝拾三吋、　コムラ。拾四吋、

イカへに至る如く前下に直角線を引き其角に設けらるゝのである、

ロイ間は股上の寸法、

ハロ間は股下の寸法の半分、

ニハ間股下の半度の六分の一、

ホニ間は**ニホ**間の長サより一吋多し、

ヘホ間は此場合に於ては一吋とす、これより長く作る時は口の寸法に從ひて口を作る、

トロ間は尻の半度の六分の一、

ロハニホヘトの各點より前方に直角線を引く、

チロ間は尻の半度の二分の一、

リチ間は二分の一吋である、

ヌリ間は間の半度の八分の一より四分の三吋多い、

ルヌ間は四分の三吋、

ヲは**ルロ**間の中央である、

リチの兩點より直角線を上方に引きて、**ワカヨ**の三點を設く、

タは**カヨ**點の中央より腰の半度の二分の一である、

ヲ點より直角線を引き下げて**レ**を膝線上に設く、

ソレ間は此場合に於ては一吋と定む、

ソより**ハ**線に依りて直角線を引き下げ**ツネ**の兩點を設く、

ソナ間は膝の四分の一、

ナ點より直角線を引き下げて**ラム**の二點を設く、

キツ間は小膝の四分の一、

ノネ間はコムラの四分の一より四分の一吋少い、

オは**ロナ**點の中央にして此場合**ロナ**の直線より一吋四分の一である、

クロ間は此場合一吋と定む、

圖面に從ひ廻り全部に仕上線を引きて前面圖を終了す、

腰マクなしの場合には本圖面の如く腰線上に一吋四分の三を加へる、

後面の製圖

後面圖は二重線を以て示す前面圖を基圖として製作するものなれば、腰、尻、膝、小膝、コムラ等の各線を圖の如く引き延ばせ、

ヤヌ間は尻の半度の拾二分の一である、

マナ間は膝の半分に半吋を加へたるもの、

ケラ間は小膝の半分に半吋を加へたるもの、

フム間はコムラの半分に半吋を加へたるもの、

コマ間は膝の寸法に縫代として一吋を加へたるものより**ナウ**間の寸度を引去りたる殘寸である。

エケ間は小膝の寸法に縫代として一吋を加へたるものより**ラヰ**間の寸度を引去り

たる殘寸である、

テフ間はコムラの寸法に一吋を加へたる寸法より**ムノ**間の寸度を引去りたる殘寸である、

アワ間は半吋である、

サ點は**ロア**の直線に依りて直角線を引き上げ、腰線上に設けらる、

キサ間は尻の半度の六分の一である、

ユキ間は腰の半度の二分の一に二吋を加へたるもの、

メユ間は三吋である、

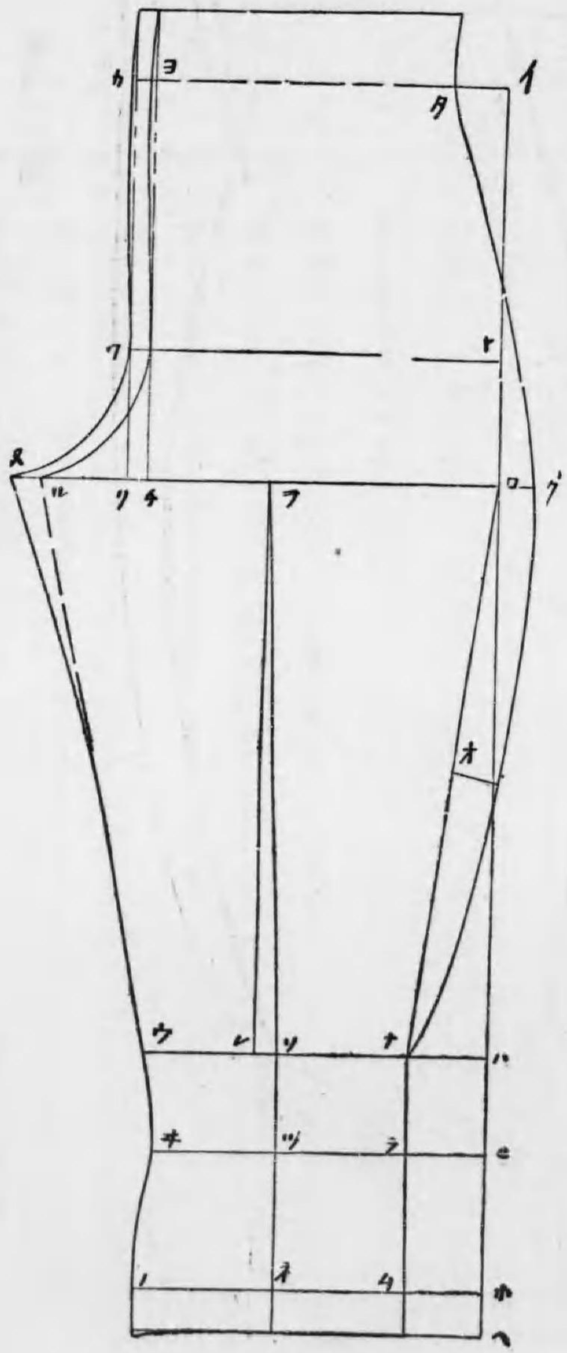
シメ間は半吋である、

エク間は一吋半である、

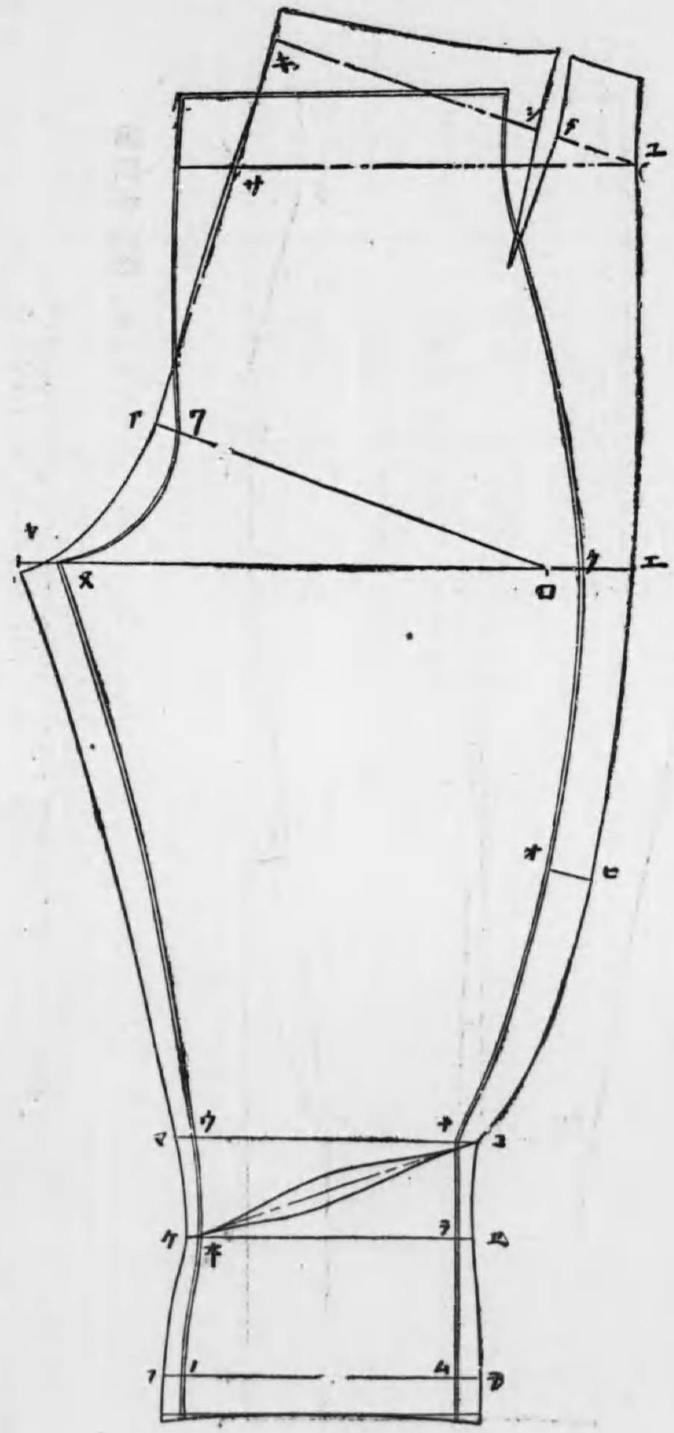
ヒオ間は一吋四分の一である、

圖面に從ひ廻り全部に仕上線を引き、終に**ケコ**間に直線を引き中央に於て圖の如く、直線の兩側を半吋位取り去りて縫代をつけるのである、

第四十二圖（一）



第四十二圖（二）



普通形ズボン裁斷法　第四十三圖參照

尻廻り　三十七吋　腰廻り　三十二吋
股下　二十七吋　股上　九吋八分の三
膝廻り　十七吋半　裾口　十五吋四分の一

イは**ロラ**に至る直角の基點である、
イロ間は股下の方法と股上の寸法を合せたるものより半吋少なきものである、
ロハ間は股下の寸法より半吋少い、
ハニ間は尻の半度の六分の一である、
ロハニの各點より前方に直角線を引く事、
ホハ間は尻の半度の三分の一である、
ヘホ間は尻の半度の六分の一である、